

米國大統領ノ博愛公明ナル勸告ニ應ジ講和ノ談判ヲ開始セラレ、ト、誰レカ其速ナルニ驚カザルモノアラン、抑モ講和ノ事タル固ヨリ 大權ニ屬シ一般官民ノ喙ヲ容ルベキ筋ニ非ザルハ更ニ言ヲ俟タズト雖モ其得喪是非ハ直ニ帝國ノ安危盛衰ヲ招クニ依リ國家ノ爲聊カ微衷ヲ獻呈シ以テ當局者ノ參考ニ供スルハ敢テ無益ニ非ザルコトヲ信ズ、但未ダ講和ノ佳境ニ入ラズ他ノ勸告ニ由リテ之ヲ行フノ難キ、隨テ其精神及條件ニ至リテハ頗ル重大ニシテ各意見ノ岐ル、所大ニ慎重ヲ要スベキモノアリ、請フ之ヲ左ニ列叙セム

一、戰捷ニ傲リテ武黷シ過大難行ノ條件ヲ提出シテ列國ノ侮笑ヲ招カザルコト
二、提出ノ條件ハ極メテ正當ニシテ而モ對手國ノ服従スベク列國ノ信ヲ有ツニ足ルベキヲ以テ程度トシ苟モ曲ゲザルコト

三、提出ノ條件ハ侵略ノ尤メニ傲ハズ顯ラ宣戰ノ 大旨ニ副ヒ永久ニ我邦自衛ト東洋平和トヲ保障スルニ必要ナル條件ヲ提出シ我邦ノ毫髮モ野心ナキコトヲ宇内ニ發表シ以テ將來ノ禍根ヲ絶ツコト

四、前三要領ヲ以テ講和談判ノ精神トシ之ニ基キ相當ノ條約ヲ定約スルコト

五、前項ノ條件トシテハ率ネ左ノ各目ニ準據シ樽俎折衝之ガ宜シキヲ制スルコト

(一) 韓國ヲ我保護下ニ置クコトヲ確認セシムルコト

(二) 滿洲ヲ開放シテ各國ノ自由貿易場トシ清國ノ秩序恢復マデ我邦ニ於テ之ヲ統治スルコト

(三) 軍費ニ相當ナル償金ヲ徵スルコト但完納ニ至ルマデノ間擔保トシテ浦港及沿海洲ヲ占領スルコト

(四) 對手國ヲシテ旅順大連ノ租借權ヲ清國ニ返還セシムルト同時ニ之ヲ我邦ニ租借シテ旅順ヲ軍港トシ以テ東洋ノ平和ヲ維持スルコト

(五) 東清鐵道ヲ我邦ニ領有シ沿海州ノ漁獲權ヲ取得スルコト

(六) 浦港ノ軍港ヲ廢セシメ各國ノ自由港トスルコト

(七) 黑龍江ニ相當ノ中立地帯ヲ設ケ軍艦ノ出入ヲ禁ジ露清國境ニ相當ノ中立地帯ヲ置キ兵備ヲ禁ゼシムルコト
(八) 樺太ヲ割讓セシムルコト

右ノ外休戰ノ要求アルモ平和條件成算ノ見込確立セザル限りハ斷ジテ之ヲ許スベカラズ、講和談判中兵力ヲ以テ外交ヲ牽制スルコト但其見込確立スルモ休戰約スルニハ可成之ヲ短期トシ其際ニ必要ナル擔保ヲ要ス

以上ノ八條件ハ最モ正當ニシテ右三要項ノ精神ニ該當スルヲ以テ果シテ其目的ヲ達スルコトヲ得バ則チ永久ノ平和ヲ保障スルニ庶幾カラシカ、且夫レ講和ハ畢竟戰捷國ノ寬仁ニ出ヅルト雖モ若シガ寬仁ノ度ヲ誤ルトキハ遂ニ屈辱的ニ陥キリ騰ヲ噬ムモ亦奚ゾ及バム、殷鑑遠カラズ日清戰役ニ在リ、若シ夫レ談判破裂シテ再ビ戰ヲ進ムルモ舉國一致意氣益々軒昂衝天ノ概アリ、乃チ國內ノ壯丁ハ奮テ軍ニ從ハザルコトヲ憾ミ、天候ト農家ノ激動トニ依リテ昨年ノ豐穰ニ加フルニ本年麥作ノ多收ヲ以テシ其他ノ殖産興業復タ戰前ノ比ニ非ザルモノアリ、隨テ其財源亦充實、假令戰鬪久シキニ涉ルモ固ヨリ辭セザルベシ。回顧スルニ日清戰役ノ際ハ國民ノ進退未ダ今日ニ至ラズ各般ノ計劃率ネ當該官吏ノ勸誘指導ニ須ツ所頗ル多カリシモ今回ノ戰役ニ迫ビテハ一般國民ノ敵愾心ハ旺盛ニシテ國庫債券ノ募集其他ノ諸計劃等ノ殆ンド當該官吏ノ盡力ヲ煩ハスニ及バズ、立ロニ辨ズルモノアルヲ認ム。殊ニ當該官吏ハ平素ニ多額ノ俸給旅費ヲ受ケツ、アルガ故ニ未曾有ノ時局ニ臨ミ其職ヲ盡スハ固ヨリ其所、而モ猶且ツ未ダ珍ラザルヲ憾ムモノナシトセズ、他日平和克復ノ秋ニ方リ 朝廷大ニ論功行賞ノ場合ニ於テハ夫ノ日清戰役ノ例ニ倣フコトナク戰鬪ニ從事セル文武官職アルモノ、外先以テ軍隊後援ノ根源タル多數國民ノ代表者ナル町村吏員ヲ厚クセラレンコトヲ豫メ切望シテ已マザルナリ。

今ヤ講和談判開始ニ先チ國內講和條約ノ論議方サニ露ミタルモ苟モ之ニ拘ハルコトナク、斷ミ乎タル大精神ヲ以テ之ニ膺ラレ最光輝アル有終ノ全捷ヲ收メラル、ハ我國民ノ齊シク期待スル所、而シテ只區々一片ノ愚衷自ラ禁ジ難ク譴怒ヲ憚ラズ孤忠ヲ披瀝シ敢テ上表シテ以聞ス。忠一願クバ閣下諸レヲ全權委員ノ講和談判上萬分一ノ參

考ニ供セラル、アラバ洵ニ望外ノ至リニ堪ユルナシ。頓首謹言

講和ニ關スル再上表

維時明治三十八年九月三日東海逸民池田忠一恭ク書ヲ裁シ以テ再ビ桂首相閣下ニ上表ス、今回ノ講和ハ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全スルニ在ルハ宣戰ノ大詔ニ炳乎タルヲ以テ此大任ニ膺ルモノ、此大旨ヲ奉ジテ毫モ遺策ナキコトヲ確信シテ疑ハザルモ、之ガ萬一ヲ慮リ本年六月十六日ヲ以テ講和ニ關スル精神及目的ニ就キ卑見ノ在ル所ヲ上表シ、以テ諸レヲ參考ニ供セリ、而シテ頃口竊ニ講和成立ノ大要ヲ聞キ曩ニ上表シタル條件即卑見中韓國保護權、滿洲開放、遼東半島租借權讓受、東清鐵道讓受、沿海洲漁獲權取得等ハ貫徹シタルガ如シト雖モ卑見ノ最平和ニ必要ナリトシタル浦港ノ武裝解除、露國陸海軍制限ノ貫徹セザルヲ始メトシ、就中樺太島ノ部分割讓ト償金ノ絶無トニ至リテハ謙抑モ亦實ニ甚シト謂ハザルベカラズ、未ダ詳細ノ實相ヲ窺フコトヲ得ザルガ故容易ニ之ガ是非ヲ論斷シ難シト雖モ假リニ今仄聞スル所ニ由リ之ヲ觀レバ樽俎折衝ノ失敗ハ掩フベカラザル事實ト認メ、國論民議ノ漸ク喧囂殆ド抑制スベカラザル衷情定ニ已ムヲ得ザルモノアリテ然リ、熟ラ今回ノ戰爭ヲ考フルニ 皇軍每戰捷ヲ制シ、陸ハ將ニ哈爾濱ヲ屠ラントスレバ海ハ將ニ浦港ヲ陷ケレントシ、帝國ハ斯ル戰捷ノ位置ニ在ルヲ以テ連敗ノ對手國ニ對シ樽俎折衝ヲ爲スニハ夫ノ前上表卑見ノ條件ハ固ヨリ當然ノ事、而モ尙謙抑ニ屬スルニ拘ラズ、今果シテ傳聞スルガ如キニ於テハ謙抑ニ非ラズ、屈辱ナリトイフモノアルモ亦之ヲ咎ムルヲ得ザルベシ、屈辱ノ論ハ未ダ顧ミルニ足ラズト雖モ所謂平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全スルノ大旨ニ負カンコトヲ恐ル、是獨リ何ゾヤ、請フ諸ヲ左ニ陳ベム。

抑モ今回ノ戰爭ハ帝國ガ自衛ト佑隣トノ大義ニ訴ヘ以テ對手國ノ橫暴ヲ懲ラシ顯ラ東洋否世界ノ平和ヲ永遠ニ期スルニ外ナラズ、是ヲ以テ勇武ナル我陸海軍ハ 大詔ノ下ニ勇躍蹶起シ 御稜威ニ倚リ曠古未會有ノ戰果ヲ收メリ、是國民ガ舉國一致之ガ後援ヲ賜メタルノ力亦與ラズンバアラズ、畢竟平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ

保全セント欲シ幾萬人ハ最愛ノ父母妻子ヲ顧ミズシテ骨ヲ異域ニ暴ラシ五千萬ノ國民ハ臥薪嘗膽以テ十幾億萬圓ノ軍費ヲ負擔シタルニ非ラズヤ、然而シテ樽俎折衝ノ結果傳聞スルニ韓國保護權トイヒ、滿洲開放トイヒ、遼東半島租借權ノ讓受ト云ヒ、皆日清戰役以來帝國ノ勢力及主張ノ範圍内ニ屬シ、固ヨリ當然ノコトニシテ東清鐵道讓受トモ僅ニ長南以南ニ止マル上ハ遼東半島租借權ニ附隨シテ相離ルベカラザルモノトセバ是亦當然ノ事タルベシ、且樺太島部分割即北緯五十度論ノ如キモ亦當時舊幕時代ノ微力ナル該全權吏員ガ交渉談判ヲ實行スルニ止マルモノ、如シ、果シテ然ラバ今回ノ樽俎折衝ニ由リ得ル所ハ僅ニ沿海州ノ漁獲權等ニ止マルモノ、如シ、若シ夫レ然リトセバ則チ幾萬ノ忠魂ト其遺族ニ對シ雷ニ面目ヲ失フノミナラズ五千萬國民ノ臥薪嘗膽ヲ如何セン、剩ヘ償金絶無トセバ對手國ガ特志ヲ以テ之ヲ寄贈セバ格別否ラザレバ幾億ノ内外債ハ勿論戰後ノ經營ハ何ヲ以テ之ヲ支辨スルノ剛算ナルヤ疑ハザルヲ得ザルベシ、嗟夫償金絶無モ可ナリ、其他得ル所太ダ寡キモ亦可ナリ、唯大詔ニ副ハザルノ一點ニ至リテハ殆ンド萬口一致誠ニ之ヲ默過スベカラザルモノアリ、何ゾヤ夫ノ浦港ノ武裝ヲ解カシメズ、西比利亞鐵道ハ依然之ニ連絡セシメ、清國ノ秩序未ダ回復セザルニ對手國ハ同時ニ我軍隊ヲ撤退セシムルガ如キ、加藤樺太島ヲシテ日露兩國境ヲ接セシムルトキハ假令軍備ノ施政ヲ爲サマルノ約ヲ結ブモ彼國ノ特性トシテ決シテ之ヲ信用シ難キハ從來ノ歴史ニ徴シテ明ケシ、是戰ノ機會ヲ與ヘ争ノ種子ヲ播クニ異ラズ、今夫レ果シテ如此トセバ一時休戰の極メテ姑息ナル講和ニシテ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全スルコトヲ得ザルナリ、忠一今江湖ノ遠キニ在リト雖モ 君ト民トヲ憂フルノ念慮未ダ減ゼズ、自ラ孤忠ヲ知リナガラ曠古未會有ノ大難ニ遭遇スルヲ以テ豫メ上表シテ事ノ此ニ至ラザランコトヲ庶幾ヘリ、而シテ事遂ニ此ニ至リタルハ定メテ百折事情ノ存スルアルベシト雖究竟實力ノ未ダ足ラザル戰爭ニ勝チテ外交ニ敗レタリトノ嘲ヲ受クル亦已ムヲ得ザルノミ、此時ニ方リ焦眉ノ善後策トシテハ左ニ掲グルノ外他途ナカルベシ。

一、講和條約ノ 批准ハ形式的ニ付條約當時ト甚シキ事情ノ齟齬セザル限り彼我全權委員ノ締約ヲ 批准セラル

筋ナルモ苟モ其途ノアル限り 批准アラセラレザルコト
二、批准アラセラル、ノ萬不得已ニ至ラバ其萬不得已謙抑ニ過グルニ至リタル實情ヲ詳悉シ天下ニ 勅諭ヲ下サル、コト

三、勅諭ヲ下サル、ト同時ニ臨時帝國議會ヲ召集シ其顛末ヲ報告シテ之ガ諒解ヲ求メ且地方長官ヲ召集シテ之ヲ訓諭シ各地方人民ヲシテ其方向ヲ誤ラシメザルコトヲ勸ムルコト但シ戰費及戰後財政ノ計劃ヲ要ス

四、前各項ノ場合ニ於テハ陸海軍人ノ外平素俸給旅費(歳費ヲ含ム)ニ生活スル内閣大臣以下中央官吏貴衆兩院議員ハ勿論地方官ノ戰時ニ盡スハ固ヨリ當然ニ付都テ今回ノ論功行賞ノ恩典ニ與ラシメザルコト但陸海軍人中戰地派遣ノ將校下士兵卒ニ厚クセラレ殊ニ下級軍人ニ厚クセラル、コト

五、國民後援ノ根源タル町村吏員其他特志ノ公私團體ハ前項ニ拘ラズ相當ニ行賞セラレ以テ將來ヲ勵マスコト右ハ閣下ノ賢明ナル固ヨリ己ニ之ヲ知ルアリ忠一ガ區々ノ忠言ヲ須タズト雖モ世ノ政客凡民徒ニ喧囂ニ走り、之ガ善後策ヲ講ゼザルハ畢竟國家ニ忠誠ナリト稱シ難キモノアルヲ慨キ僭越ヲ願ミズ、尊嚴ヲ冒瀆シ敢テ一片ノ孤忠ヲ披瀝ス、忠一學淺ク識乏シク言文ヲ成サズ文言ヲ盡サズ、忠一願クハ閣下其孤忠ヲ憐ミ速ニ之ヲ 天關ニ達シ、之ヲ台閣ニ通ジ國民ヲシテ較、靜謐ニ赴キ一致共同臥薪嘗膽ノ實ヲ繼續セシメ以テ他日ニ備フルコトヲ得テ國運ヲ挽回スルコトヲ得バ至幸何物カ之ニ加ヘン、忠一悚懼再拜謹言

是歲七月 長女鍊子を磐田郡十束村下本郷農鈴木芳太郎二男惣作に嫁せしむ。媒酌人は同村上本郷の人鈴木敬三なるも、當初の申込は芳太郎實兄福田の大竹淑堂なり。鍊には婚嫁訓を與ふ。左の如し

婚 嫁 訓

一、舅姑に孝なるべく夫に貞なるべし

二、尊族を敬し卑族を愛すべし

三、行を慎み用を節すべし

四、賓客を懇ろにすべし

五、郷人を厚うすべし

右の五ヶ條を守らば婦道を全うするに庶ひか

明治三十八年七月八日

忠

鍊 殿

是歲十一月 長男宏京都帝國大學法科を卒業す。

是歲八月 縣農會來年度事業上に關し意見書を同會長に提出す。其の要旨。

一、耕地整理工事ノ目的計畫ヲ定メ繼續事業トシテ之ニ相當ナル縣費補助ヲ仰ギ以テ本縣耕地整理事業ノ完全ヲ期スル可成速ナルコト

(前略) 本縣下十三郡現田地反別約六萬二千八百十八町步、中耕地整理工事ヲ施スヲ得ザルモノ約三割トスレバ其殘七割即四萬三千九百七十二町步ハ之ヲ施スノ必要アリ、此中磐田郡始メ各郡耕地整理竣工反別約三千八十二町步ヲ控除シ、四萬八百九十町步ニ十年繼續工事トセバ一年約四千町步ヲ整理スルヲ要ス、最小限度工費一町步ニ付十圓ヲ補助スルモノトシ約四萬圓ノ補助ヲ要ス、灌漑排水工費ニ關シテハ仍特別ノ補給ヲ要スルモ將來永遠ノ鴻益ヲ收ムルコトヲ思ヘバ何カアラン、然リト雖モ獎勵ニ程實施後餘日極メテ淺ク其設計準備ノ未ダ普ネカラザルノ今日、姑ラク之ヲ次年度ニ豫約シ置キ而シテ來年度ニ於テハ必ず各郡平均約五町步ノ模範耕地整理工事ヲ

垂ル、ノ目的計畫ヲ定メ此總反別六十五町歩ニ對シ、之ヲ整理スルモノトシ工費一反歩ニ付五圓ヲ助成スルコト、シテ約三千二百五十圓ノ補助ハ最必要ナリ、殊ニ此助成ハ排水工事ヲ併行スルモノニ支給スル見込ヲ以テ十年繼續工事補助ト共ニ何レモ實地ニ適切ナル補助規程ヲ設定スルヲ要ス(中略)

耕地整理工事ハ農家ノ一大事業ニ付前陳ノ助成アルモ其工費ハ巨額ナル故勸業銀行又ハ農工銀行ニ年賦負債ヲ必要トスルモ兩銀行營利ニ走ルノ傾ヲ生ジ年八朱以上ニ非ザレバ貸付ヲ爲サズ、抑モ兩銀行ハ政府特別ノ保護アリ斯業ノ改發ヲ圖ル爲之ヲ設立セラレタルニ拘ラズ普通銀行ト均シク營利ヲ競フハ設立ノ大旨ニ悞ルニ依リ縣農會ハ全國農事會ト協力シテ地方長官及主務大臣ニ交渉シ可成低利ヲ以テ年賦償還ノ道ヲ講ズルニ勸ムベシ

二、縣農會專任顧問トシテ適當ナル農學士ノ年給金ヲ特ニ縣費ヨリ補助ヲ求メ以テ農會ノ幹部ヲシテ最有力ナラシムルト同時ニ縣下ノ農業者ヲシテハ遵由スル所アルヲ知ラシムルコト

三、具體的條項ノ下ニ町村農會獎勵方法ヲ制定シ以テ之ガ活動ヲ幫助スルノ必要ヲ認ムルヲ以テ其獎勵金トシテ相當ノ縣費補助ヲ要ムルコト

(前略) 鹽水選麥奴豫防害蟲防除、堆肥改良共同苗代等農商務大臣諭告ノ十四項其他縣郡農會規程ヲ指摘シ其全部ヲ遂行セシメタル町村農會ニハ一等、其半以上ヲ遂行セシメタルモノニハ二等獎勵金ヲ下付スルノ類、其金額ハ可成多キ方効アルモ經濟ニ限リアレバ漸次加フルモノトシ差向一等十圓二等七圓三等五圓トシ、而シテ本金ハ妄ニ之ヲ支消スルコトヲ得ズシテ其名譽ヲ蓄積スルコトトセバ效果ヲ收ムル至大ナルベシ、本方法ハ必ズシモ毎年之ヲ行フヲ要セズ隔年一回之ヲ行ヘバ則チ足ル、嗟夫世間動モスレバ輒チ町村農會ノ活動セザルヲ慨歎スルモ未ダ活動セシムベキ獎勵方法ヲ講ゼザルハ亦其道ヲ盡シタル所以ニ非ザルベシ、本獎勵金ノ補助ヲ要ムルニハ縣下十三郡ヲ通ジ一郡平均五町村農會トシ最其萃ヲ拔キ之ヲ獎勵スルモノトシテ豫算ヲ定メテ可ナリ。

四、農家ノ中堅トナリ指導誘掖ノ重任ニ膺ル郡農事監督ノ改善ヲ圖リ以テ農事改發ノ速度ヲシテ一層有効ナラシ

ムル爲メ之ニ相當スル縣費ノ補助ヲ增加スルコト

現時ノ郡農事監督タル大概實驗家又ハ事務家ニシテ階級的ニ農業教育ノ素養間然スル所ナシトセズ、其爲ス所率ネ事務一片ニ止マリ講習ニ講話ニ農業者ヲ指導誘掖シテ之ガ知識實益ヲ傳フルニ人乏シ、偶々實驗ニ富メルモノ場ノ講話ヲ爲シ得ルニ止マリ普通講習會ノ講師タルノ任務ニ堪ヘズ、依テ相當ノ待遇ヲ以テ農科大學乙科卒業ニシテ其人材經歷アル者ヲ聘シテ郡農事監督ノ重任ヲ帶バシメバ其改發ノ程度今日ノ比ニ非ザルベシト雖モ一郡少クトモ年給五百圓ヲ要スベク、縣下十三郡ヲ合スルトキハ實ニ六七千圓ノ巨額ニ上ルガ故ニ容易ノ事ニ非ザルベシ、他府縣中ニハ已ニ之ヲ配置スルモノアレバ行レ難シトセザルベキモ、今頓ニ之ヲ行ヒ得ズトセバ漸進策ヲ採リ最適任ナル後繼者ヲ養成シ漸次交代セシムルモノトシ郡農會ヲシテ相當ノ人物及教育アルモノヲ推選セシメ之ニ一年百圓内外ノ學業補助金ヲ交付シ農科大學其他必要ノ農學校ニ入學セシメ成業後ハ誓テ郡農事監督ニ從事セシムベキノ規程ヲ設ケ之ヲ實行スル爲各郡一人ヲ推選スルモノトシテ一年千圓ノ補助ヲ要ス、其實果ヲ收メ得ベキニ至ルノ間來年度ニ於テハ凡ソ三月以内ヲ期シ郡農事監督ノ職務ニ必須ナル學科目ノ講習會ヲ開キ、郡農事監督ヲ招集シテ講習セシムベシ、本講習ニ要スル一切ノ費用ヲ取調ベ之ニ相當スル縣費ノ補助ヲ要ス、此講習會ノ講師トシテハ可成農科大學教授中ニ就キ之ヲ囑託シ、本縣農事試驗場長、本縣立農學校長、本縣農會顧問ノ中ヨリ補助セシメ最莊嚴ニシテ歸服スルニ足ルモノヲラシメザルベカラズ。

本件縣費ノ補助ヲ受クルヲ得ザルトキハ郡費ヨリ補助スル見込ヲ以テ知事ヨリ速ニ郡長ニ論達セシメ、各郡其方針ヲ一ニシテ進ムコト切望ニ堪ヘズ。

五、相當ノ縣費ヲ補助シテ郡農事試驗場ヲ創設セシメ凡ソ各般ノ農事ハ都ベテ試驗ノ成績ニ準ジ之ヲ郡内農業者ニ傳ヘ以テ之ガ指導方法ヲ誤ラザルコト

縣農事試驗場アルモ各郡風土自ラ相異リ一律ニ推斷スルヲ得ザルモノアリ、故ニ少クモ各郡ニ一ヶ所ノ農事試驗

場ヲ創設シ、輕易ナル農事一切ノ試験ヲ行ヒ之ガ確實ナルコトヲ認知シタル上ハ汎ク之ヲ當業者ニ周知シテ實益ヲ傳フルヲ得バ其利益實ニ莫大ナルヲ信ズ、而シテ郡農事試驗場ハ之ヲ郡農會ニ屬セシメ、其經費ハ郡ノ大小ヲ斟酌シ一年五百圓乃至千圓ヲ補助シ不足ハ郡農會ノ負擔ニ屬セシムルモノトス。

是歲十月 日本海員接濟會改善に關する意見書を前島密に呈す。前島より「御親切なる御注意下され銘謝仕候理事及常議員等に篤と相諮り可申」旨返事あり。

是歲七月 縣會議員内山長八、町會議員吉川由藏、中津川敬三郎町會の決議を齎らし來り、余に中泉町梅原村組合長たるべきことを以てす。余承諾せず。

是歲八月 日露戰役忠死者招魂祭祀に關し、芳川内務大臣に建白す。其要旨左の如し。

伏シテ惟ルニ日露戰役ハ我邦未曾有ノ大事ニシテ實ニ帝國存亡ノ繫ル所、幸開戰以來陸海軍毎戰捷ヲ制シ今ヤ講和條約締結中ニ係レリ、抑モ此未曾有ナル戰果ヲ收ムルニ至レルハ全ク上 大元帥陛下ノ 御稜威ニ之レ由ルハ固ヨリ言ヲ要セザルト雖モ抑モ亦下陸海軍ノ忠勇ト國民ノ後援トノ二者相一致スルニ非ズンバアラズ、若シ夫レ内地勤務ノ大小官吏ハ勿論地方官ノ如キハ戰時ニ方リ各其職務ヲ盡スハ當然ノコトニシテ而カモ猶且未ダ殊ラザルモノアリ、抑國民後援ノ職タル編軍糧兵家遺族救護家業補助授産等何レモ國民愛國ノ熱誠ヨリ出ヅルモノニシテ殆ド官ノ干渉ヲ受ケズ、其他各地ニ勃興スル公共的記念事業亦其熱誠ニ出デザルナク、剩ヘ戰後ノ國產ハ之ヲ戰前ニ比シ百万ノ壯丁出征ノ爲著シク之ガ勞働力ヲ減殺シタルニ拘ラズ其產額反テ多キヲ占メ夫ノ輸出貨品ノ如キ亦増進シツ、アリ、是率ネ内地實業家ノ激勵ニ由ラザルナシ、加筋戰費ノ財源タル最過重ノ戰時稅負擔トイヒ最多額ノ國庫債券應募トイヒ皆國民一致ノ敵愾心ニ發露セザルハナシ、洵ニ曠世ノ美事タリ、外ニ在ル陸海軍ノ忠勇ナル毎戰無比ノ偉勳ニ對シ内ニ居ル國民爭デカ後援ナキヲ得ン、兩々相待チテ始メテ今日ノ戰果ヲ收メタリトイフモ誣言ニ非ザルナリ夫レ國民如何ニ之ガ後援ヲ竭クスト雖モ陸海軍ノ忠勇ニ由ルニ非ザレバ何ヲ以テ此ニ至ルヲ得ムヤ、就中此戰役ニ忠死シタルモノ、功最多キニ在リトイフハ萬口ノ一致スル所ニ歸セリ、政府此等ノ者ニ對シ夙ニ勳章年金特別賜金遺族扶助料等ノ優遇ヲ與ヘラレ、其忠魂ハ長ニ之ヲ靖國神社ニ合祀セラレ毎年 勳祭ヲ賜ヒ聊カ遺憾ナキニ似タリト雖モ、遠方ニ在住スルモノハ年々之

ニ參拜スルヲ得ザルノ遺憾ヲ抱クモノ少シトセズ、政府此千載一遇ニ方リ該戰役忠死者ニ對シ左ノ特典ヲ與ヘラレ、一ハ以テ近タ其忠魂ヲ慰メ、一ハ以テ鄉關ノ後進輩ヲ勵マスト同時ニ國民後援者ニ對スル行賞法トシ以テ國民一般ヲ獎勵シ豫メ後國ニ備ヘラレムコトヲ。

一、日露戰役忠死者ヲ郷町村神社ニ合祀セシメ相當ノ維持金ヲ下附セラレ毎年其祭日ヲトシ必ズ、招魂祭ヲ舉行シ、以テ常ニ忠死者ノ功勳ヲ記念シ、傍ラ其鄉關ノ後進輩ヲ鼓舞シ、且國民教育ノ資料ニ供シ以テ國家忠誠ノ士氣ヲ涵養セシメラレ、夫ノ日露戰役ニ於ケルガ如キ各地處々ニ不完全ナル社又ハ碑標ヲ建テ若ハ更ニ之ヲ建テザル等無益及不均衡ナル元費ヲ省キ以テ可成之ヲ有益ニ藏貯セシムル爲メ相當ノ制ヲ定メラル、ノ迅速ナルコト、但シ必要ニ依リ日露戰役忠死者ヲモ合祀セラル、コト。

二、日露戰役忠死者中下士兵卒ニ及ブマデ之ニ對シ相當ノ位階ヲ賜リ既ニ位階ヲ有スル者ニハ追陞セラレ以テ優遇ノ一層遲キヲ加ヘラレ一般國民ヲシテ尊敬ノ念ヲ崇フセシムルコト。

三、日露戰役ニ關シ不日論功行賞ノ御沙汰アル場合ニハ夫ノ日露戰役ノ覆轍ニ倣フコトナク最周到均衡ノ方針ニ執リ第一陸軍海軍ノ戰闘員ニ厚クセラル、ハ勿論、内地陸海軍勤務者ハ率ネ之ニ亞ギ、中央及地方大小文官ノ如キハ常ニ俸給ニ衣食スルガ故ニ戰時ニ方リ各職務ニ盡スハ固ヨリ當然ナルヲ以テ又之ニ亞ギ、就中後援者タル國民ヲ賞セラル、ノ厚キハ將來ニ關シ誠ニ切望スル所ナリト雖モ一人毎ニ之ヲ賞スルノ途ナキニ依リ之ガ代表者ニ對シ最モ之ヲ厚クセラレ以テ諸レヲ後昆ニ示シ現在及將來ノ民心ヲ振セラレ殊ニ國家ノ元氣ヲ發揮セラル、コト。

國民後援ノ代表者トシテ最中堅ナル町村長ノ如キハ薄給ヲ以テ日夜之ニ貢獻スルコト一般官吏ノ厚俸ト同日ニ語ルベカラザルモノアリ、又公共團體ノ代表者中ニハ無報酬無旅費ニテ自辨シ東奔西走後援ノ實ヲ舉グルモノアリ、此等ハ素ヨリ篤志ニ出ヅルモノナルベシト雖モ遺漏ナク鄭重ノ審査ヲ經テ彼此行賞ノ甚シキ軒輊ナキヲ要スベシ。

是歲九月 日露講和時局に關する上奏書を獻呈したり。文事祕事官長細川潤次郎男爵に御執奏を願出でたり。

日露講和善後ニ關スル 上奏

草莽一芥ノ微臣池田忠一謹ミテ奏シ奉ル

日露戰役ハ實ニ帝國未曾有ノ大事而シテ長クモ上 陛下ノ御秘威ト下 皇軍ノ忠烈及臣民ノ後援トニ倚リテ以テ今日ノ戰果ヲ收メリ、今ヤ講和已ニ成立ヲ告グト雖モ今尙御批准前ニ係ルヲ以テ未其條約ノ詳ナルヲ伺フコトヲ得ズ、但道聽途說スル所ニ由リ之ヲ觀レバ宣戰ノ 宸衷ニ副ハザルモノアルガ如シ、是以國論鼎沸其甚シキニ至リテハ條約ノ破棄ヲ絶叫スルモノ亦尠シトセズ 臣忠一豫メ事ノ此ニ至ランコトヲ恐レ全權委員ノ 御委任ニ先チ敢テ桂首相ニ上表シ、以テ一片ノ微衷ヲ披瀝セリ、上表ノ大概ハ貫徹スルガ如キモ重要ノ事項尙未ダ貫徹セザルコトヲ慨ク、樽俎折衝ノ成功之ガ全キヲ得ザリシハ比較的戰捷ノ效果ヲ薄フシ誠ニ千載ノ遺憾ナリキ、然レドモ既往ヲ咎ムルモ益ナク遂事ヲ諫ムルモ効ナシ、要之自今舉國益々一致眞ニ臥薪嘗膽ノ實ヲ舉ゲ以テ最過重ノ戰費及戰後經營費ヲ負擔スルノ覺悟ヲ定メザルベカラザルニ拘ラズ、國論囂々トシテ尙已マザルハ獨リ何ゾヤ、臣忠一惶懼多ク言フニ忍ビザルモノアリ、伏シテ惟ルニ戰爭ニ勝チテ折衝ニ敗レタルハ古今東西其歴史ナキニ非ラズト雖モ、今回ノ折衝ニシテ尙之ガ宜シキヲ制セバ輒チ較ニ其目的ヲ達スルコトヲ得ベシト信ズ、然レドモ事既往ニ屬スルヲ以テ今復茲ニ贅スルモ將何ノ益カ之レ有ラン臣忠一請フ之ガ善後策ヲ左ニ列叙シ以テ切ニ 聖鑑ヲ仰ギ奉ル。

第一元老ハ偏倚ナク之ヲ收攬シ給フト同時ニ内閣ヲ掣肘セシメラレザルコト

樞密院ハ至高顧問府ニシテ顯ラ重要ノ國務ヲ御 諮詢アラセ給フト所タルヲ以テ周ネク元老ヲ收攬シ給フガ如シト雖モ、眞ノ元老ニ非ラズシテ早く已ニ其班ニ列シ堂々タル元老ニシテ今尙其班ニ漏ル、モノナシトセズ殊ニ顧問官ニ非ラズ元老ノ名ヲ冒シ之ニ列スルモノアリ、且所謂元老ナルモノハ常ニ内閣各省ト相往來シテ國務ヲ指揮シ内閣ハ大臣ノ上ニ大臣アルガ如キ奇觀ヲ呈セリ、加旣今回ノ講和條約タルヤ固ヨリ之ヲ全權委員ニ 御委任アラセラル、ト雖モ、聞クニ屢々講和地ヨリ指揮ヲ仰グニ方リ元老會議ヲ開カルト、果シテ元老ニシテ周ネク之ヲ收攬シ給ハンニハ其指揮ヲ下サセ給フニ就キ其利害得喪ニ關シ慎重ニ審議ノ餘地ヲ存シ、嘗ニ較ヤ其目的ヲ達スル

ノミナラズ今日ノ如ク國論ヲ招クガ如キコトヲ避クベシ、爲メニ戰爭ヲ繼續スルニ至ルモ亦不得已ノミ。矧ンヤ戰爭繼續ノ目的ヲ確立シ苟モ動カズシテ折衝セバ其目的ヲ達スルニ至リタルモ未ダ測ルベカラザルオヤ、畢竟元老少ナクシテ一方ニ偏倚シ深ク國論ノ伏スル所ヲ探究セザルモノアリテ事此ニ及ビシモノナラン、故ニ元老ハ可成偏倚ナク之ヲ至高顧問府ニ收攬シ給ヒ、而シテ常ニ内閣ヲ掣肘シ之ガ責任ヲシテ輕カラシムルガ如キ宿弊ヲ芟除シ給ヒ、重要ノ國務ハ公然樞密院ニ 御諮詢アラセラレ、内閣ト顧問府トノ畛域ヲシテ儼然タラシメ給ヒツ、アルコト、恐察スレドモ、九重雲深クシテ草莽微臣ノ窺ヒ知ル所ニ非レバナリ、但周ネク元老ヲ收攬シ給ハムニハ或ハ異分子アルコトヲ恐レ給フヤ、異分子集リテ始メテ重要ノ國務ヲ練磨シ 御諮詢奉答ニ遺策ナキ所以ニシテ徒ニ阿附迎合ハ國家ノ長計ニ非ザルナリ。

第二内閣ヲ改造シ給ヒ以テ天下ノ耳目ヲ一新セラル、コト

現時ノ内閣各相ハ所謂元老ノ兒分内閣ニシテ一時勢望アリシモ、先是屢々帝國議會就中衆議院ト衝突シ僅ニ三年間ニ已ニ二回ノ解散ヲ敢テシ、以テ國論ヲ制シ、爲メニ勢望漸ク衰ヘントシ、偶々日露戰役ノ起ルニ會シ、舉國一致ノ必要ニ迫ラレ、該戰役中陽ニ内閣ヲ助クト雖モ陰ニ懺焉タラザルモノアリ、乃チ今回日露講和ノ不結果ヲ機會トシ斯ク國論ノ鼎沸スルニ至リタルナラン、假令不結果ナルニモセヨ、其成立後徒ニ嗷々スルモ嘗ニ益ナキノミナラズ、却テ害ヲ招カンコトヲ恐ル。事已ニ此ニ至リタル上ハ惟舉國一致臥薪嘗膽ノ一途アルノミ、夫レ舉國一致臥薪嘗膽ノ實ヲ舉ゲント欲セバ速ニ勢望已ニ衰ヘツ、アル内閣ヲ改造シ給フヨリ急ナルハナシ、内閣ヲ改造シ賜フトキハ則チ忽チ天下ノ耳目ヲ一新シ、始メテ其艱苦ヲ共ニスルコトヲ得ベシ、竊ニ聞ク各相ハ此未曾有ノ國難ニ方リ實ニ憚リテ 聖聞ニ達スルニ忍ビ難キ行爲アルモノアリト、果シテ然ラバ猶更國民ト共ニ其艱苦ヲ同ジウスルコトヲ得ムヤ、於是乎内閣ノ改造ヲ促スノ氣運ニ迫レリ、抑モ内閣ノ改造ハ一ニ 聖斷ニ出ヅルト雖モ從來ノ慣例ヲ踏襲シ給ヒ單ニ藩閥若ハ政黨ニ因襲シ給フトキハ内閣ノ基礎鞏固ナリ難ク、其效果亦見ルベカラズ、

故ニ首相ハ上班ノ華胄中最威望アルモノヨリ新ニ之ヲ 御親任アラセ給ヒ、其他ノ各相ハ貴衆兩院中最モ錚々ノ人材ヲ御拔擢アラセ給ヒ以テ積弊ヲ一掃セラル、ニ若クハナシ、内閣ノ基礎スニ立チ、然後大ニ中央及地方政務ノ大刷新ヲ行ハシメ給フ、其樞要官吏ハ勉メテ公平ノ方針ニ基キ、是亦一地方ニ偏倚スルコトヲ戒メ給ヒ、各府縣ヲ通ジテ其人材ヲ登庸セシメラレ、而シテ臥嘗ノ難苦ニ伴フベキ行政ヲ施サシメ、以テ國民ヲシテ過重ノ政費ヲ負擔スルモ之ヲ辭セザルノ元氣ヲ涵養スルノ最急務ナルヲ覺ユ。

第三、日露戰役ニ於ケル論功行賞ハ陸海軍人ニ限り厚ク之ヲ下シ給ヒ、尤戰地派遣ノ軍人ニ厚ウシ給ヒ、就中下級軍人ニ對シ可成之ヲ厚クシ内閣各相以下中央官吏貴衆兩院議員ハ勿論地方官ハ行賞シ給フコトヲ要セズ(安註、此項ハ前ニモ桂首相ニ對スル上表中ニモ見ユ、理由大同小異ナレバ茲ニハ便宜之ヲ省略セリ)

陛下大德乾坤ニ匹シ宏量海岳ニ侔シ、聞ク頃口畏モ 親シク講和ニ關スル民議ヲ聞食サルト臣忠一洵ニ感激ノ至ニ堪ヘズ、乃亦敢テ恭シク前三箇條ヲ獻言シ奉ル。

陛下不世出ノ 御聰明固ヨリ卑言ヲ須キズト雖モ、知リテ言ハザルハ忠ニ非ザルナリ、矧ンヤ此獻言ノ如キハ蓋シ天下萬衆ノ皆感ヲ同ジクスル所ニシテ但言ヒ難キ所ナルオヤ、今敢テ其言ヒ難キ所ヲ言フ言太ダ忌諱ニ觸レ、辭亦不遜ニ涉リ固ヨリ斧鉞ノ誅ヲ料ラズ、一片秋々ノ孤忠自ラ禁ジ難ク滿腔ノ熱血ヲ瀝ギ、謹ミテ以聞ス臣忠一願クハ 陛下大德宏量ヲ以テ幸ニ之ヲ容レ給ハ、豈ニ臣忠一人ノ幸ナルノミナランヤ、誠惶誠懼頓首敬ミテ白シ奉ル。

是歲十月 縣農會幹事より、滿洲利源調査の爲め實業家にして此際渡航の人には農商務省に於て相當便宜を與ふべきに付知事に於て屈指の實業家を推薦すべき様内命ありたる哉にて余を其候補として推薦したしとの事にて内牒ありしも、聊か考ふる所あり、辭退したり。

是歲同 磐田郡の休戚に關する非常の大問題突發。縣立農學校移轉の議是なり。非認の内狀を龜井知事に提出して反省を求め、郡内各町村長をして出岡總代を選ばしめ、郡長をして臨時郡會を開かしめ調査委員を選擧せしめ、又郡農會參事員會を招集し、知事及縣會議員に意見書を提出して極力反省を求め、自からも出岡して連日該委員を援け、又獨立特行一誠無我の大精神を以て知事部長縣會議員を歴訪して全力を傾注し之が存續を主張して移轉の不可を論破し、遂に其の目的を達し、本郡内に適當の校地を選定して之に移轉改築の事を條件として之を決議せしめ郡民をして安堵せしむ。町村長等より提出せしめたる意見書も、余の起草したるものなるも、余は郡農會會長として郡農會參事員鈴木治平、鈴木重作、山田重太郎、岡本春吉、吉田正直、副會長青山善一、幹事樽松長平等に諮りて別に意見書を草して各方面に示したり。

是歲十二月 宏昨日内務省に出仕の報に接す。但東京帝國大學大學院に於ける研究は依然。仕官心得を示すこと左の如し。

- 一、上官ニ柔順ナルベシ但シ意見アルトキハ苟モ曲ゲザルコト
- 二、凡執務上ノ意見ハ慎重ノ調査ヲ行ヒ苟モ粗慢等ノ處置アルベカラズ
- 三、同僚及下僚ニ親切ニシテ苟モ傲慢ノ行爲アルベカラズ尤モ下問ヲ耻ヂザルベシ
- 四、官吏服務紀律ノ外主務法律命令等ヲ調査シ置キ事ニ臨ミ迅速ナルベシ
- 五、凡文按ハ丁寧ニシテ迅速、而モ同僚下僚ハ勿論上官ノ指揮ヲ受ケザルベシ
- 六、出務時間ハ之ヲ恪守シ遲參缺勤ヲ嚴禁シ其他省中ノ規定ヲ勵行スベシ
- 七、主務局課ノ利害ニ付意見アルトキハ之ヲ上官ニ陳述シ又全省ニ關スル適當ニシテ行ハルベキ事件アラバ之ヲ

大臣ニ建議(局課長次官ヲ經テ)スベシ。

是歲 郡農會に對する事績の重なるもの左の通り。

- 一、旅順開城奉天占領日本海戰大捷、樺太占領に付當該將軍に祝辭を呈し、奉天占領には大山元帥奧司令官の外大島第三師團長にも之を呈せり。
- 二、大山元帥に歡迎狀を呈し本郡凱旋歸郷軍人一同に感謝狀を贈れり
- 三、各町村戰死病死者葬儀に臨み士氣を鼓舞せり
- 四、西淺羽久努見付田原各町村重要農作物競進會
- 五、縣農會主催高等講習會
- 六、郡農會總會
- 七、各町村葉煙草耕作組合をして相州秦野地方より巡回教師を聘用し苗床等の改良を傳習せしむ
- 八、中遠青年農會を開き本年十月十六日 詔勅の奉答十七要項を議決せしむ
- 九、米麥作堆肥競進會、害虫防除督勵
- 一〇、明治三十九年度縣農會事業をして五策を獻す

同三十九年一月

新内閣總理大臣侯爵西園寺公望に對し、新内閣組織に關し、客歲九月上奏三封事
中一事目的を達したるを喜ぶと同時に他の二事も尋で行はれ、痛く元老の後見及親戚故舊の干涉を
絶ち以て中央地方政務の刷新を斷行せられむことを上書せむとす。但し一木喜徳郎及宏の忠告を容
れ之が提出を見合はせたり。

是歲同月廿六、廿七日

静岡縣農會總會にて議案調査委員となり、曾て建議せし害蟲驅除豫防獎勵規程、共同

苗代獎勵規程、基本財産蓄積管理規程を決議せしめ、更に國本培養按、縣農會職員勤功賞與及死亡
退職給與例地主活動及小作人雇耕夫獎勵に關する建議をなし可決、又農會令再改正促進の爲め委員
を上京せしむることに決す。

是歲二月 李家知事地方官會議に上京に付き左記要旨を内狀す。

- 一、外征ニ從ヒタル忠死者ノ功勳ヲ無窮ニ傳フル方法ニシテ經濟的ニシテ而モ民間ニ最行ハレ易キコトヲ講ズルコト
(前略) 特ニ許可ヲ經テ靖國神社ノ分靈又ハ特別ニ縣郷町村社ニ合祀又ハ副祀スルコト(下略)
- 二、日露戰役ハ未曾有ノ大事ニ付該戰役ニ從ヒタル忠死者ニシテ下士兵卒等ノ叙勳功ハ最厚クセラレ、相當ノ位階ヲ追賜シ以テ之ヲ優遇セラル、コト
- 三、改正農會ノ事實不適當ニシテ支障少カラザルモノアルヲ以テ速ニ該條項ノ再改正ヲ行ヒ農會ノ基礎ヲ鞏固ニスルコト
改正農會令ハ衆議院決議農會法改正案及全國農事會決議ノ趣旨ヲ無視シタル不適當ノ改正ニシテ其概要ヲ舉グレバ町村農會ノ設
立ハ舊令ノ該資格ヲ有スルモノ二分一以上ヲ以テ成立スベキモノヲ改正令ニ於テハ三分二以上トシタル三分一以上ノ不同意ア
ルトキハ忽チ不成立ニ終ラシメ、舊令ニハ未加入者ニ對シテハ地方長官加入ヲ命ズルノ強制アリシモ改正令ハ之ヲ削除シ去レル
ニ依リ農會成立ノ基礎危殆ニ瀕スルニ至レリ、且縣農會ノ代表者ハ舊令ニテハ各農會則ノ定ムル所ニ任セ郡ノ大小ニ依リ増減ス
ルヲ得タルガ故之ガ宜シキヲ得タルモ改正令ヲ以テ郡ノ大小ヲ論セズ却テ之ヲ一名ニ制限シタルガ如キハ當ヲ得ズ、何トナレハ
權利ノ義務ニ伴フハ當然ニシテ郡大ナレバ農會費ノ負擔重ク、小ナレバ輕シ、縣會議員ノ郡ノ大小ニ準ジ定員ヲ異ニスルアルガ
如キ當然ナリ、實業機關ハ可成衆思ヲ收攬スルニ依リ、從來ノ代表者二十有餘名ト雖モ足ラザルヲ感ジタルニ方リ頓ニ十三名ニ
減少スルガ如キハ絕對ニ不可ナリ。(以下前出建議ニシテ行ハレザルモノ、再演ニ付省ク)

是歲四月 改正農會令施行の結果郡農會長は自然退職となる。同月二十八日を以て本會に關する金錢

其他財産圖書等一切を新會長平野政五郎に引繼を了す。

爾後優遊詩歌を賦し、書を読みて間日月を消す。

是歲^六李家知事に縣政刷新の根本に關し内狀を提出したるに直に「唯今接手の御念書正に拜讀貴説御尤もに候間精々郡市長町村長に實行家にして有爲の人物を配列致度覺悟に御座候尙其他御氣付の廉も有之候はゞ御寸暇の節御執筆御内報御待申候」(六月十日付)とありしに依り、同知事の縣政刷新に銳意なるに感じ、再び卑見を詳細認めて奉呈したり(六月十日付)。其要旨左の如し。

一、行政監督ニ關スル件

即市町村長ハ地方行政ノ重要機關ニシテ其行政ノ舉否ハ其人ノ適否ニ依ルガ故自今實行家ニシテ比較的徳材學三者ヲ備ヘ最有爲ノ人物ヲ配置セラル、ハ固ヨリ確信スル所ナルモ神ナラス人ナレバ乃其行政上ニ缺陷ナキコトヲ保セズ、是ニ於テカ監督ノ最必要ヲ生ズ、町村行政ノ監督ハ毎年縣官又ハ郡吏ヲシテ之ヲ勵行セシメラレ、近來漸ク緒ニ就キシモ尙未ダ形式ヲ免レズ、消極的即管掌ノ書類帳簿サヘ整頓スレバ之ヲ以テ足ルトシ、積極的即町村吏員職員ヲ招集シテ町村制ノ本旨町村行政ノ大意ヲ演述シテ其精神ヲ陶冶シ兼テ町村是トシテ教育勸業衛生兵事土木等ノ公益事業其他基本財産造成等ヲ獎勵シ、以テ其町村ノ幸福ヲ増進スルノ手段方法ヲ講ゼシムルモノ甚ダ稀ナルヲ遺憾トス、斯クテハ多大ノ旅費ニ對シ其效少小ナルヲ以テ自今積極的ノ方針ヲ授ケラル、コトヲ要ス市郡行政ノ監督ハ直接知事ノ權内ニ屬シ其數太ダ寡キヲ以テ周密ニ之ヲ施行シ得ベキニ拘ラズ、是迄一部ノ調査又ハ検査又ハ市制第十七條郡制第十條ノ視閲ヲ行ハル、モ郡務全體ニ就キ其功過ヲ查察スルコトナク、殊ニ昨年八月以來ハ該視察モ行ハレタルヲ聞カズ、果シテ然ラバ何ニ由リテ其行政ノ舉否ヲ知ルコトヲ得ム、加旃其検査又ハ視閲タルヤ、單ニ之ヲ屬官ニ委ネ知事ハ僚屬ヲ牽キテ親シク之ヲ行ハル、ガ如キハ置縣以來于今三十四五年知事ヲ代フルコト閣下ヲ合セ七十二名ノ多キ是迄絶無ニ屬ス、抑々知事ノ一身ヲ以テ凡百ノ行政務ニ應ジ難キガ故一部ノ調査又ハ検査ハ之ヲ僚屬ニ一任スルヲ妨ゲズト雖モ、年一回位ハ該視閲ノ外郡務全體ニ涉リテ其功過

ヲ查察スル爲メ知事ノ親閲ヲ要ス、而シテ其親閲ニ臨ミ郡市長ノ答辯苟モ明瞭ヲ缺キ書記ヲ要スルニ非ザレバ辨ジ難キ等ノコトアラバ即其ノ職掌ニ暗キモノトシテ痛ク之ヲ戒飭セラレ、若シ依然悛マザルトキハ速ニ旨ヲ諭シテ辭表ヲ提出セシメ、著々郡務ノ刷新ヲ圖ラバ夫ノ老朽又ハ無能等ノ輩地ヲ掃ヒ眞ノ郡政斯ニ舉ルコトヲ得ム、但萬一知事ノ親閲ニ故障アルトキハ上席事務官ヲシテ之ヲ代理セシムルヲ妨ゲザルモ輕々ニ之ヲ屬官ニ委任セザルコトヲ要ス。

小學校ハ國民教育ノ本源ナルヲ以テ最嚴正ニ監督セザルベカラザルニ拘ラズ漸ク弛怠ニ傾キ、隨テ兒童ノ訓練行届カズ風紀壞亂今ニ迫ビ之ヲ矯制セザルベカラズト聞ク。之ヲ矯正セント欲セバ自今一層之ガ監督ヲ嚴正ニセザルベカラズ。然ルニ近年一般ニ郡市長ノ小學校ヲ視察スルコト太ダ稀ニシテ赴任以來四五年一回ダモ視察セザル小學校アリ、尊影奉安ノ宿直ヲ設ケズ、盜賊横行スト聞ユル學校アリ、郡ノ視學アリテ時々之ヲ視察スト雖モ郡長ノ威望ニ及バザルコト遠ケレバ郡視學ニ一任シテ顧ミザルガ如キハ教育ヲ振起スル道ニ非ザルナリ。是ヲ以テ自今郡市長ニ對シ視察條件ヲ示サレ、可成毎年一回ハ視察ヲ全フシ其顛末ヲ報告スベキ様訓令ヲ發セラレ同時ニ知事ニ於テモ都合ノ出來得ル限り郡町村巡視ノ序ヲ利用シ可成小學校ヲモ巡視セラレ、諄々職員兒童等ヲ誨告セラル、コト弛怠矯制上最モ必要ナリ。

小學校長教員ハ多年勤績ヲ要スルコト勿論ナルモ勤績餘ニ年ヲ累ヌルトキハ種々ノ情弊之ニ盤リ教育事業ノ腐敗ヲ來シ更ニ振起セザルガ爲メ時トシテ之ヲ免黜又ハ交迭セシムルノ急要ヲ生ズベキニ依リ郡市長ノ不怠視察ヲ要スル所以ナリ、公私團體、即各產業組合、報徳社、各農會、蠶糸業、茶業、紙業、山林、水産業組合ヲ監督シ、傍ラ之ヲ獎勵スル亦行政上必要ナルニ拘ラズ郡市長ノ足跡太ダ稀ニシテ空谷ノ建音モ翅ナラズ。是其ノ要務ノ多忙ナルニ由ルトハイヘ、此種ノ團體ガ郡市公益上急要ナリト思ヒツ、繰合セ視察ノ出來得ザル筈ナシ、知事ヨリ是亦相當ノ訓諭ヲ與フルト共ニ知事ノ足跡亦可成洽カラントヲ望ム。

二、町村吏員獎勵ニ關スル件

縣政ノ舉否ハ町村行政ノ舉否ニ因ル、町村行政ノ舉否ハ町村長以下各吏員ノ勉否ニ因ル。是ヲ以テ監督官廳ハ法律命令ノ規定ヲ楯トシ嚴ニ行政事務ノ整理ヲ督責シテ已マザルニ拘ラズ該整理者ニ對シ恩賞ノ設ナキハ頗ル缺典ナリ、各官廳ニ官吏ハ職務勉勵賞與ノ設アリ、銀行會社亦其設ナキハナシ、然ルニ獨リ町村吏員ニ限り其設ケナキハ之ヲ獎勵スルノ道ニ非ザルナリ。之ヲ町村會ニ附シ町村費ヲ以テ支給スルヲ得ル途ナキニアラズト雖モ町村吏員トシテハ之ヲ發按スルニ忍ビ難キ事情アリテ容易ニ行レズ。剩ヘ町村吏員ハ國政及縣政事務ヲ執ルガ故ニ之ガ恩賞ヲ町村ニ一任シ置クハ其當ヲ得タルモノニ非ズ。依テ速ニ國費又ハ縣費ヲ以テ之ヲ設ケラレ、町村吏員ノ一任期以上ヲ勤メ其成績良好ナルモノニ恩賞スルノ方法ヲ定メラレ度、若シ縣限り不相叶トセバ速ニ之ヲ政府ニ運バレ度藍綬褒章ノ規定アルモ此等八十年以上ノ星霜ヲ履マザレバ其恩典ニ浴シ難キヲ以テ之ヲ待ツニ違アラザルナリ。

右恩賞ノ方法ヲ定メラル、ト同時ニ其不整理者ニ對シテハ其輕重ニ準ジ假借ナク之ヲ懲戒サレ所謂信賞必罰以テ方今因循姑息ノ積弊即勤ムルモ賞ナク怠ルモ罰ナキガ如キ不振行政ヲ一新セラレンコトヲ渴望ス。

三、徒法改廢及繁文省略ニ關スル件(安註。屢々他の機會に建議せし事にして未だ行はれざるものを羅列して李家知事の注意を喚起したるものなれば茲には其の理由を省略す。)

四、耕地整理工事ニ關スル件(安註。右に同じ)

五、縣下元二等川以下改修工事及交通不便地ノ道路改良工事ニ關スル件

縣民ノ害ヲ除キ利ヲ興スノ事業一ニシテ足ラズト雖モ縣下元二等河川以下河川ノ改修工事ヲ施行スルヨリ大ナルハナシ、元一等河川天龍富士大井安倍ノ四大川河身改修工事ハ已ニ略ボ竣功ヲ告ゲタレバ元二等河川以下ノ改修工事ニ着手スルハ當然ノ順序ナリ。二等河川以下ニハ害ノ大小利ノ厚薄アリ、宜シク之ヲ調査シテ其緩急ヲ慮リ之ヲ取捨先後スベシ、忠一否縣民ガ公平ニ切望スル所ハ縣下全體ノ河川ニ就キ適當調査ヲ遂ゲ河川ノ性質ニ依リ其

大小ニ鑑ミ其利害ヲ審カニシ著手ノ先後及繼續年期限等大目的ヲ定メ縣會ノ議ニ附シ毎年其大目的ニ從ヒ著ミ之ガ竣功ヲ圖ラル、コトヲ要ス、夫ノ太田、原野谷、菊、都田等ノ大川ヲ後ニシテ區々タル澗川、巴川等ノ小川ヲ先ニシタルハ其緩急順序ヲ顛倒シタルモノニシテ河川改修ノ縣是トスルコトヲ得ズ、然レドモ既往ハ咎ムルモ益ナシ、自今其覆轍ニ陥キラザル爲メ、速ニ相當調査ヲ遂ゲ縣下全體ノ各河川工事施行ノ大目的大計畫ヲ定メ縣民ノ害ヲ除キ利ヲ興スニ咨ナラザルベキノミ。殊ニ此工事ハ耕地整理工事ニ隨伴スル灌溉排水工事ト相持チテ施行スルコト最便益ナルヲ以テ此點ニ關シ周密ノ注意ヲ拂フノ要アリ。

然ルニ河川工事ハ平坦部ニ利益アルモ交通不便地ニハ率ネ影響ナキ故、道路ヲ改良シ以テ山間僻地ニモ利益ヲ與ヘザルベカラズ。現ニ磐田郡二俣以北ニ在リテハ假令天龍川運輸ノ便アルニモセヨ、是僅ニ下リ船ノ便ニ止リ、夫レ連雨水ノトキハ交通杜絶、其不便實ニ言ハム方ナシ、一條ノ大動脈タル車道開鑿ノ急ニ迫レリ、各郡皆此類少カラズ。是亦大體ノ調査ヲ遂ゲ繼續年限ヲ定メ補助歩合ヲ立テナバ關係部落ノ奮發ニ依リ大ニ工事ヲ進ムルヲ得ベシ。所謂之ヲ縣是トシテ施行セラル、ニハ前段河川改修工事ト關聯シテ共ニ巨額ノ縣費ヲ要スベシ依テ傍ラ民力ヲ考ヘ其負擔ニ堪ユルヲ以テ程度トシ餘リ長年期ニ涉ルノ虞アレバ縣債ヲ起シ以テ之ニ投ズルモ機宜ノ措置タルベシ、カノ萬金ヲ投ジテ未成功ニ屬スル社山疏水寺谷用水改良工事等ヲ再興セシムルノ最モ深厚ナル方法ヲ企畫セラル、コト亦切望シテ已マザルナリ。(下略)

本書に對しても、廿一日付にて李家知事より「貴書中の高見は委曲御同感に御座候間幾分にては實行成績を以て貴臺の厚意に報じ申度覺悟」の趣返書來る。

是歲同十五日 文官論功行賞に關し、默し難く、遂に持論を西園寺首相に上る。(謚賞を戒め、戰陣に臨みて命懸けの仕事をしたるものは文官が文筆口論を卓子上に弄すると言はれざるに依り大に功を論じ賞を行ふべく、併かも下士兵卒に厚く國民後援に對する行賞の軍人に亞ぎて可成厚くするの趣旨を以て代表的に町村吏員其他公共團體の篤志者を賞するの外、優詔を煥發して國民後援の

美風を顯彰。本上書は、先年^{三十二}會福農商務大臣に隨行して郡下富岡村耕地整理工事を巡視したるすべきの事。岡野博士(現法制局長官、當時の農商務參事)を経て旨趣の貫徹を期したり。其後七月二十四日の新聞は左の通りの御沙汰書を發表したり。誠に辱し。(安註。岡野博士はいふまでもなく後に屢々臺閣に列したる故敬次郎氏なり。)

明治三十七八年戰役ノ際團體及篤志者ニ於テ師ヲ輸ヒ兵ヲ恤ミ以テ志氣ノ振勵ニ努メ、産ヲ授ケ窮ヲ濟ヒ以テ出征者ヲシテ後顧ノ憂ナカラシメ、寡獨ノ慰藉、老幼ノ保護其他各種後援ノ施設亦咸宜キニ適ヒ、所在相應ジテ國民奉公ノ義ヲ竭シ候段、御満足ニ被思召候旨御沙汰候事

是歳同 遠江國報徳社長岡田良一郎に左記事項に關し書を寄せて、痛く其反省を促す。管見例の疎狂己むことを得ざるに出づ。主として同社の定款改正に關する件にして數度の建言にも拘はらず未だ實施に至らざるを憾むことなり。只新に本社定款中に耕地整理漁船漁具新造馬牛購入の各目を貸付金中に加へ、重きを積金主義即遠き子孫の計を爲すのみに措かず、又其積金は單に危險なる銀行會社に預入れて固定せしむるに止めず、勉めて確實なる方法を按じ、近き現社員に貸付を行ひて各産業に必要な融通を爲し、自他財本を増殖する道を講ずることの一項を加へたるの外左の注意を以てしたり。

- 一、町村社ハ可成之ヲ擴大ニシテ進デハ町村ノ區域ニ符合スルヲ希望スルト同時ニ町村基本財産造成ノ素養ヲ圖ラシメ、單ニ私利ニ奔ラシメザルコトヲ指導勸誘シテ極力之ヲ貫徹スルコト
- 二、報徳常會ノ時間ヲ規定シ以テ現規ノ如キ甚シキ不紀律ナル行動ヲ矯制スルコト
- 三、開祖以下斯教功勞者ノ肖像及傳記ヲ蒐集シ以テ之ヲ一室ニ收メ永久之ヲ保存シ以テ其功勞ヲ讓レザルコト

四、報徳學研究會ハ獨リ本社役員ニ限ラズ一般社員ノ應ニ勉ムベキ所ナルヲ以テ是迄ノ通り唯第三館ノミニ專屬シテ之ヲ開クハ普及ノ方法ニ非ザルガ故自今之ヲ各館ニ開キ以テ研究ノ便宜ヲ與フルコト

是歳^同月 長女鍊子長男を擧ぐ。婿鈴木惣作父芳太郎の依頼を受け介爾と命名す。出處詩經生民之篇、既醉章中君子萬年介爾景福。(安註。介爾は父の孫を得たるの初なり。時に父五十八歳なりしが、鍊子のお手柄なりとして大に喜ばれ、將來を囑して祝福されたり。)

是歳^八 遠江國學生獎勵會改革意見を一木喜徳郎に寄す。同文を會頭赤松男爵(良則)にも示したるが同感の意を表せらる。

是歳^同 祖先累代祭及亡母三年祭(十二月三日の處、孫等の歸省を機とし)を施行す。其迎送文左の如し。但本年より之を例文とす。

迎 祭 文

維時明治三十九年八月十三日第八世ノ孫忠一齋戒虔ミテ我祖先以降累代一族ノ精靈ヲ迎ヘ恭ク之ヲ祭ル。

回顧スレバ我祖先以來于今二百二十六年忠一ニ及ビテ實ニ八世ノ久シキ、幸ニ其家名ヲ汚損セズト雖モ大ニ之ヲ發揚セザルコトヲ愧ヅルノミ、但維新以降時世一變徳川家ノ轉封ト同時ニ我家モ亦流離顛沛ノ境遇ニ瀕セシモ幸ニ父母兩賢ノ積徳ト亡弟善作ノ孝行トニ頼リ小農ニ卑官ニ家系ヲ保續シ以テ今日ニ及ベリ、是亦祖先以降累代ノ餘光ニシテ而モ父母兩賢及亡弟ノ遺澤ト謂フベシ。

抑モ本祭ハ去月之ヲ行フベキノ處故アリテ今日ニ施行セリ、乃恭ク之ヲ施行スルト共ニ遠ク其餘光ヲ拜シ、近ク其遺澤ヲ戴キ子々孫々長ヘニ之ヲ忘ルベカラズ、殊ニ本年亡母りう子君ノ三年祭ニ丁ルヲ以テ併セテ茲ニ之ヲ祭リ以テ生前ノ厚恩ヲ感謝シテ已マザル所ナリ、告ゲ來リテ此ニ至リ感益ニ極リテ復タ多ク言フニ忍ビズ。諸靈髣髴トシテ來格尙クバ享ケヨ。

維時明治三十九年八月十五日第八世ノ孫忠一齋戒度ミテ我祖先以降累代一族ノ精靈ヲ祭リ終リヲ告ゲ茲ニ恭ク之ヲ送ル、嗚呼人既ニ生アレバ則チ死アリ人己ニ死スト雖モ名ハ死セズ。我祖先以降累代一族ハ既己ニ死シテ九原ノ客タルモ墓石歷然寺域ニ立チ靈牌依然家壇ニ存セリ、但人生限リアレバ則チ累代一族皆生キテ一家團樂ノ樂ミヲ同ジクスルコトヲ得難シト雖モ毎年佛教ニ從ヒ慎ミテ盆祭ヲ行ヒ以テ其精靈ヲ招キ聊カ粗羞ヲ供ヘ一堂ノ下皆猶ホ在スガ如クナルコトヲ期ス、今ヤ祭ヲ終ヘ一族各祭壇ヲ出デ、將ニ復タ九原ニ歸ラレントス、仍テ其祭業ノ甚ダ菲薄ナルコトヲ陳謝スルト同時ニ其厚恩ヲ忘レザルコトヲ矢フ。尙クバ享ケヨ。

是歳同 一木喜徳郎に地方行政上に關する意見を寄せて參考に供す。主として郡制廢止問題にして凡そ事物の存廢を決するは其の理由と事實の消長に之れ由らざるべからざるも、其の廢止の理由及事實共に之を存續するに若かざる旨を以てせり。抑々廢止論者の恃みて金城鐵壁と爲す所は經費を節減すると、郡長をして町村行政監督を周到ならしむるの二者に歸着するが如きも、町村行政の監督周到否は郡長其の人の手腕に存し郡制機關あるが爲めに非らず。郡制廢止に伴ひ郡會を廢止すると同時に、之に代はるべき町村組合會を置くべきは固より言を俟たず、殊に教育勸業衛生土木其の他郡基本財産造成等自ら施行しつゝある必要費は之を中廢することを得ず。加旃補助費も亦依然之を支給するの不得已に出づべしとせば、其の經費を増すことあるを知りて之を減ずることを知らざるべし。況んや將來道路、水利法其の他郡設事業の必要を生ずべきに於てをや。今郡制あるが爲め町村行政の監督周到を缺くといふと雖も、假令之を廢止するも、郡長若し其の人を得ざるときは之

が周到を缺くべきが故に、其廢否に關はらず、郡制改善及郡組織革新の方法を講ずるは實に地方政務改善の第一着手たるを知らざるべからず。他に如何なる理由事實あるにもせよ、之を存續するに若かざる上は、政府が三級の自治體を認め、一旦自治權を郡に與へられ、既己に施行の今日に至り容易に奪去るは妥當の措置に非らざるべし。昨年衆議院に於て之が廢止案を通過したるが如き實に怪訝に堪へざるなり。

尙右に附帶して市町村制改正按中町村長の選舉を町村會に一任して制裁を加へざると、町村吏員功勞者の賞與及慰勞を町村會決議概目中に加へざるは缺點なりと認むるに依り此點をも特に町村行政振興の爲めに指摘したり。蓋し町村行政の舉否は町村長其の人に存するが故に町村制中己に名譽職を以て本體とし、其の町村内の名望ある者の選舉せられて其の任に當らむことを希望するに拘はらず今や漸くにして墮落し、第四、第五流以下の人物に低下し、甚しきは殆んど雇人を以て之を遇するに及べり。町村行政の不整理にして不靜謐なる敢て怪しむに足らざるなり。豈に慨歎の至りならずや。改正を好機として此宿弊を芟除せざるべからず、依て其の選舉法を市長に準じ、府縣知事町村會の選舉せる町村候補者の中に就き認可するの制とせば名望家之を逃るゝに道なく、一舉にして之を收攬することを得、將來町村行政の面目を一新するを得べし。町村吏員功勞者の賞與慰勞は現制上亦町村長に於て發按するを妨げずと雖も、自己の功勞を自ら發按し難きは人情免れ難きを以て町村會決議概目中に加ふるときは此便宜を増すべし。大體町村會を以て衆議院又は府縣會と同視するは餘りに理窟に拘泥して自治の簡便を失するものといはざるを得ず。町村長助役を雇人視し、其

の町村内下流人物を選擧せしむるものとせば、或は之に町村會議員被選權を褫奪するも、餘義なきに至るや知るべからずと雖も、苟も上流の人物を選擧するとせば從來の通りとする方町村經濟の爲めにも宜しく、隨て之を議長に仰ぐは議事の圓滿を期する所以なるべし。

又市制改正案中市會議員任期を四年に短縮しながら、市長の任期を六年に据置くは、市長の市會の選舉に出づるものなるからには市會と共に進退を共にすべき筈なるのみならず、人材日進月歩の際必要なるの旨を以てせり。蓋し一木氏は貴族院に於て此等法案の特別委員として審査の重任に膺らるべきに依り、其の參考の万一に備へたるなり。

是歳九月 左の建議按を中遠教育會に提出す。

- 一、日露戰役ニ關スル本郡出身軍人ノ勳功事績ヲ蒐集編次シ各傳記ヲ作り、一ハ以テ修身教育ノ資料ニ供シ、一ハ以テ永ク其ノ勳功ヲ讓レザルノ議
- 二、我邦ノ全捷ハ忠死軍人ノ功最多キニ居ル故永ク忠魂ヲ祭祀スルハ教育上至大ノ關係アルニ依リ可成適當ニシテ永久ニ傳フベキ祭祀方法ノ施設ヲ本會ヨリ其ノ筋ヘ建議スルノ議
- 三、戰後本會事業ノ發展ヲ要スルガ爲メ從來ノ教員會的ノ面目ヲ釐革シ汎ク本郡内ノ有力者ヲ網羅スルノ議
- 四、全校兒童均霑獎勵ノ適法ヲ劃シ是迄各校區々任意ノ編制ヲ大體上本郡同一ニ革新シ以テ獎勵ノ效果ヲシテ可成多大ナラシムルノ議

是歳十二月 静岡縣立農業學校々地を中泉町に移轉新築に決し、其の旨發表せらる。其の爲め見付全町未曾有の大紛擾を起し、町長以下吏員、町會議員の總辭職と爲り、町民は各所に集合して炊出を爲し、郡長及校長の無能を罵詈訕し、多衆郡役所を蹂躪して郡長を罵倒し、不穩甚し。警察の保護を

受け辛うじて一時を收拾したりと雖も、見付町民の激昂一方ならず、知事郡長の命を奉ぜざるに至り、其の紛擾底止する所を知らず。即知事郡長等の依頼と町民の陳情に依り、挺身極力之が鎮靜策を講ずると同時に、双方の間に立ちて之が調停方を談じ、先以て町政機關を具備し、長日子を費して遂に漸く平穩に局を結ばしむるに至れり。而して縣立農學校々地校舍等に特別下附を願出で高等女學校を創設することゝなれり。

同四十年^{二月十六日} 池田家憲を定む。但し是迄の家憲とても、大同小異なりしが、今回宏の意見をも聞き、更に之を確定せしものなり。

池田家憲

- 一、常ニ國體ヲ重ンジ忠孝ヲ以テ體トシ勤儉讓ヲ以テ用トス
 - 二、別ニ定ムル財産規定ニ從ヒ毎年歳計ヲ定ム
 - 三、子女弟妹ノ教育ハ人物ニ依リ資力ニ應ジテ之ヲ行フ
 - 四、飲酒ヲ慎ミ結婚ヲ正クス
 - 五、冠婚葬祭其ノ他ノ吉凶ハ克ク誠意ヲ致シ痛ク虚浮ヲ戒ム
- 右ノ通相定ム後世子孫當ニ之ヲ遵守スベシ

明治四十年二月十六日

第八世孫 忠一 謹識

是歳十二月 余が前年の建議に依り總會の決議を経て遠江報徳社第三館に於て報徳社長岡田良一郎彰

ル部長ヲ置カレタルハ誠ニ官制未曾有ノ一大進歩ト謂ハザルベカラズ、然ルニ其實施僅ニ二年ヲ過ギ加旃戰後猶更教育實業振作ノ氣運ニ臨ミ殆ンド從前ノ官制ニ復スルガ如キ改正ヲ行ハント欲スルハ何ノ理由アリテ然ルヤ、誰レカ之ガ判斷ニ苦マザルヲ得ンヤ、改正論者ガ改正唯一ノ理由トシテ其重要ノ點ヲ舉グレバ曰ク教育實業ノ事務ハ之ヲ第一ニ併合シテ足レリ、別ニ之ヲ獨立セシムルノ必要ナシ、曰ク實業ハ人民ニ直接スルヲ以テ當器ノ人ニ乏シ、曰ク國費ヲ減少スルナリト、果シテ此三點ノ外ニ出デズトセバ彌々之ガ判斷ニ苦マザルヲ得ザルヲ以テ今試ニ其三點ニ就キ實ニ然ルベカラザル所以ヲ申明セント欲ス。

第一教育實業ノ事務ハ之ヲ第一ニ併合シテ足レリ別ニ之ヲ獨立セシムル必要ナシト曰フト雖モ、地方公益ノ發達ヲ圖ルハ教育實業ヲ措キテ他アルコトヲ知ラズ、戰後益々之ガ發達ヲ要ムルノ時代ニ方リ頓ニ之ヲ第一ニ併合セシムルハ第一部長如何ニ英材ト雖モ併舉スベカラザルハ理ノ當サニ觀易キ所ナリ、矧ンヤ各地方ノ民度官ノ勸奨ヲ待チテ然後興ルハ一般ノ情況ニシテ補助政策ノ今日ニ盛ナルヲ以テ之ヲ證スルニ餘リアルオヤ。抑モ第一部タルヤ府縣郡市町村會ヲ始メ百般地方行政ノ淵藪ニシテ就中地方民ノ休戚ニ關スル土木地理其他會計等ノ諸務ヲ分掌スルガ故ニ其事務最繁劇ヲ加ヘ英材ヲ得ルスヲ猶且之ヲ舉ゲ易カラザルニモ拘ラズ教育實業ノ二大事務ヲ加フルトキハ到底勸奨ノ道ヲシテ周到ナラシメ難キハ今更言ヲ俟タズ、矧ンヤ教育實業ハ勸奨ノ力ニ依リ増進ノ餘地尙ホ多々アルオヤ、戰時ニ方リ善ク之ヲ振張シテ教育實業ノ二大事務ヲ獨立セシメタルニ戰後今頓ニ之ヲ縮少シテ復タ之ヲ從前ノ制度ニ復セントスルハ時勢ノ進運ニ伴ハザル改正ト謂フベシ、矧ンヤ一旦之ヲ縮少セバ爾後容易ニ之ヲ振張スルコトヲ得ザルオヤ。

第二、實業ハ人民ニ直接スルヲ以テ當器ノ人ニ乏シト曰フト雖モ、新進ノ學士或ハ閑歷ニ富マザルモノアルヲ以テ人民ニ直接指導スル上ニ於テ多少ノ遺憾ナキニ非ザルベシト雖モ、若シ之ヲ推シテ單ニ當器ノ人ニ乏シトセバ各部率ネ皆然ラザルハナシ、新進ノ學士ヲ佐タルニ閑歷ニ富メル屬吏ヲ以テセバ何等支障アルコトヲ認メズ、矧ンヤ之ヲ主裁スル知事アルオヤ。

第三、國費ヲ減少スト曰フト雖モ僅ニ五六萬圓ヲ減少スルニ過ギザルベシ、而シテ教育實業ニ關スル各部長ヲ置カレ其勸奨周到ノ爲メ地方ノ福利ヲ増進スルノ効益ハ蓋シ多大ニシテ奚ソノ翅ニ僅々タル五六萬圓ナルノミナラシヤ、但本文事務官一人ノ年俸旅費ヲ掲ゲタルハ參事官ヲ廢シ依然第三部長トシ之ヲ置クモノトセバ今回ノ改正ハ即第二部長ヲ廢スルニ止マレルヲ以テ事務官一人ヲ減ズルノ割合ヨリ打算シ來レルモノナリ、昔時ノ如ク知事部長ガ老朽ニシテ學識ニ乏シキモノ輩出ノ時代ナレバイザ知ラズ、今ヤ知事中ニモ學識ノ士ニ乏シカラズ、部長ノ如キハ大抵學士ヲ以テ之ニ充テラル、ガ故ニ當ニ其必要ヲ感ゼザルノミナラズ、之ガ爲メ却テ事務ノ滯滯ヲ招カンコトヲ恐ル、ニ依リ斷然參事官ナル制度ヲ廢セラレ、第二部長ト共ニ第三部長ヲ存置セラレ以テ教育實業ノ併行シテ彼此軒輊ナキノ權衡ヲ保持スルハ蓋シ地方一般ノ輿論ナルベシ。

要之教育實業ナル地方ノ二大事務ヲ舉ゲテ之ヲ第一ニ併合セント欲スルハ猶中央ニ於テ文部農商務ノ兩省ヲ廢シ以テ之ヲ內務省ニ合スルト同ジク、當ニ地方政務ノ刷新ヲ圖ル所以ニ非ザルノミナラズ地方公益ノ發達ヲ要ムルノ主趣ト相反スルヲ以テ前述ノ通り痛切ニ之ヲ申明シ來ラバ之ガ改正ノ無用ナルヲ知ルニ餘リアリ。云々。

是歲七月 左記の件李家知事に内狀して縣政に裨補せり。

- 一、全縣ノ地主會ヲ起シ以テ眞ニ根本的農事ノ改發ヲ圖ラル、コト
- 二、縣會議員選舉ハ彼此妥協無益ノ黨爭ト冗費トヲ制シ以テ縣治ノ圓滿ヲ保ツコト
- 三、郡長ノ選叙ヲ精クシ以テ行政ノ刷新ヲ圖ラル、コト
- 四、町村ノ合併已ニ發表ノ上ハ勉メテ之ガ遂行ノ手段ヲ講ジ以テ隣縣ノ覆轍ヲ履マザルコト
- 五、西ヶ谷前縣農會長ヲ論功行賞中ニ加ヘ以テ其不衡平ナキヲ期セラル、コト
- 六、藍綬褒章ノ賜與ヲ公平ニシ以テ其效果ヲ完カラシムルコト

七、縣立各學校長ノ選任ヲ精クシ以テ中等教育ノ完備ヲ圖ラル、コト
是歲八月 左の件を建議案として中遠教育會臨時總會に提出す。

一、中遠教育會員ハ自今奮テ報徳社ニ入り以テ其規範ヲ兒童及其父兄ニ垂レ榜ラ其事業ヲ助ケ以テ躬行實踐ノ實ヲ學グルコト

二、會員吊慰例ヲ定メ以テ相互情誼ヲ厚クシ德義ノ率先者タルヲ期スルコト

三、會員ハ所在町村限り其出身將校下士兵員ヲ款待スル爲メ其町村送迎會ニ本會ヲ代表シ會長名ノ送迎辭ヲ贈呈シ以テ兵事教育親密ノ關係ヲ發揮スルコト

四、貧民子女就學獎勵ノ爲國庫下付ノ幾分ヲ割キ之ヲ各町村ニ補助シ以テ戸ニ不就學ノ兒童ナカラシムルコト

是歲十一月 烈士故沖禎介追悼詩歌蒐集斡旋に對し大久保春野第三師團長より、同人父沖莊藏沖繩地方の禮狀を添へ謝狀を寄せらる。

同四十一年四月 宏神奈川縣轉任に付施政上の要項左の通申諭す所あり。

凡百ノ施政慎重調査ノ上ニ非ザレバ容易ニ着手難相成候得共新任地ハ外人交際ノ爲メ教育其他百事餘程相後レ、候趣ニ付諸事改良ノ餘地可有之候間左記參考ニ供シ候

一、郡市教育會ナケレバ之ヲ創設シ已設ナレバ善ク之ヲ利用シ調査シタル改良方法ニ付可及郡市教育ノ發展ヲ圖ルコト但シ其方法ハ縣及郡市ノ狀況ニ依リ最モ行ハレ易キヲ要ス

二、市町村ノ風俗ヲ厚クシ浮薄ヲ矯ムルガ爲メ青年團體ヲ創立シ、已設ナレバ善ク之ヲ利用シ調査シタル改良方法ニ付郡市町村長ノ同意ヲ得テ施行スルコト但其方法ハ郡市町村ノ狀況ニ依ル、他課ノ主掌ナレバ豫メ協議ヲ要ス

此團體ハ系統的ニ郡市町村聯絡ノ道ヲ開クヲ要ス

三、小田原ハ二宮翁誕生地ナレバ此教ヲ全縣下ニ普及スルコト但主掌課ト協議シ産業組合及青年團體ト相待チ報徳社ノ市町村ハ青年團體ヲ特設セズ其定款中ニ學グルノ便宜ヲ與フルコトヲ要ス

報徳教ハ普通教育ト密接ノ關係ヲ有ス

四、縣立學校ノ内部ヲ改良シ延テ郡市町村立及私立學校ノ内部ヲ改良スルコト但改良方法ハ先以テ現規定ヲ調査シ然後實地ニ就キ調査ノ上同僚又ハ上官ニ圖リ特ニ經濟ヲ考ヘ之ヲ定ムルヲ要ス

五、小學校ハ國民教育ノ原素ナレバ一層内外改良ヲ要スルヲ以テ充分ノ調査ヲ要ス尤モ土地ノ情況ヲモ鑑ミ特ニ經濟ヲ考ヘ緩急順序ヲ審ニシ著手スルハ勿論都ベテノ方按ハ前號ト共ニ實行ヲ貴ブ、若シ半途非難ヲ受ケ立消トナスナレバ寧ロ始メヨリ着手セザルニ若カズ

六、小學校ニ於テハ教員生徒ヲシテ外人トノ交際ヲ極メテ圓滿ナラシメザルベカラズ前號ノ各學校ニ於テモ亦最モ然リトス

七、前各號ノ施設ハ上官ノ意向ヲ探リタル上ニ非ザレバ輕忽ニ發表スベカラズ且獨リ主掌ノ課ノミナラズ縣全體ニ涉リタル處務細則其他ノ施設改善上ニハ特ニ眼ヲ著ケ勉メテ貢獻スルコト

右ノ外新任地ニ於テハ縣官郡市町村吏ハ勿論參事會員等ノ中ニハ初任ヲ試ミントシテ難問其他種々ノ手段ヲ弄スルヤモ不被測候間十二分ノ用意ヲ以テ從容之ニ接スルコト余ガ、實際本縣ニ於テ經驗スル所ナレバナリ

是歲四月 日露戰役に從軍し 皇軍第一の偉勳を樹てたる陸軍歩兵中尉功四級工學士市川紀元二銅像除幕式中泉町有市川公園に舉行す。此事業に對しては斡旋微力を盡くしたり。

是歲四月 五月中衆議院議員總選舉に付候補者たらんことを政進兩派より申込まれたるも(政友派よりは木治平、進歩派よりは川島瀧藏、熊岡安平、神谷、中津川敬三郎等來宅して彼此交渉を累ニ)謝絶し、依然高潔を守ることす。

是歲五月十日 錫と克に學生五耻箴を與へて之を勵ます。

一曰、勿以衣之惡爲耻、可以知之不至爲耻。二曰、勿以食之惡爲耻、可以心之不正爲耻。三曰、勿以室之惡爲耻、可以身之不修爲耻。四曰、勿以帽之惡爲耻、可以學之不進爲耻。五曰、勿以靴之惡爲耻、可以德之不增爲耻。

忠 一 撰

是歲七月 内閣更迭に付一木喜徳郎に内翰を寄せ、有力なる内閣組織に斡旋すると同時に其一員に加はり斷々乎として宿題なる行政財政の根本整理を果し以て輿望に副はれむことを梅森の開明を待つに均しき感を以て其奮起を促せしが、後に同氏を内務に訪ひたる節、世の中は御注文通りにはゆかぬ由笑て話されたり。

(安註。一木博士への内翰の末には、折にふれてと題して「退きて世のさま見れば皆鳥の箱にむれて一の意見を求めたるに、「御來示奏上の義至極御尤の義と奉存候小生共同感に存候得共今日の情勢亦如何とも難致もの可有之と存候且御提議相成とも直に 至登を奉候候ては如何哉と奉存候尙此邊之義は拜啓可申述候云」と來示の次第もあり、遂に果さざりし稿あり)

維時明治四十一年七月七日草莽一芥ノ微臣池田忠一謹ミテ奏シ奉ル

神聖ナル 陛下宵衣旰食常ニ内閣ニ臨御シ萬機ヲ親裁シ給フ普天率濱誰カ感激セザルモノアラシヤ、伏シテ惟ルニ内閣ハ庶政ノ淵藪ニシテ百揆ノ出ヅル所ナリ、其是非ハ天下ノ休戚ニ關ス、故ニ最有力ニシテ而モ遺策ナキコトヲ要ス、然ルニ明治十八年内閣官制革新以來于今二十有三年而シテ内閣ノ更迭スルコト今回ヲ以テ十三回ノ多キニ及ベリ、其中最長キハ五年最短キハ一年ニ滿タズ之ヲ平均セバ僅ニ二年、之ヲ如何ゾ庶政ヲ整ヘ百揆ヲ舉ゲ以テ殊遇ニ答フルコトヲ得ム 陛下大徳天地ノ如ク廣量海岳ノ如シ其更迭毎ニ首相ノ 閣下ニ奏薦スル所ノ各大臣ハ悉ク之ヲ採納シ給ヒ各其職責ヲ盡サシメラル、而シテ頃口聞ク内閣各大臣ノ總辭職ニ遭遇シ、今又 宸衷ヲ憐シ給ヒツ、アリト、抑モ内閣大臣ノ選任ハ固ヨリ 陛下ノ大權ニ存スト雖モ其組織ノ如何ハ亦大ニ臣民ノ利害

ニ關係アルヲ以テ斧鉞ノ誅ヲ憚ラズ敢テ卑見ヲ獻セント欲スルハ獨リ何ゾヤ、方今宇内列國陽ニ平和ヲ唱フト雖モ陰ニ鴟梟ノ慾ヲ逞シクセント欲スルノ時ニ際シ内閣ノ更迭ヲ頻繁ニスルノ秋ニ非ザルナリ、其頻繁ナル更迭ヤ名ハ談笑ノ間ニ於テ之ヲ行フト云フト雖モ其實政權奪奪ノ譏ヲ免レズ、從來内閣ノ更迭アルヤ種々ノ因由アルモ其歸スル所ハ即チ難局ヲ嫁シ、未ダ全ク其職責ヲ盡サルモノ其一タラズンバアラズ、是以テ今假令難局タルモ内閣ノ最有力ニシテ遺策ナキコトヲ期セント欲セバ先ヅ新ニ首相ヲ朝野ノ最威望アルモノヨリ拔擢シ給ヒ各大臣ハ其奏薦ニ依リ貴衆兩院中各派ヨリ其俊髦ヲ簡拔セラル、ヨリ美キハナシ、夫レ如此ナレバ野ニ遺賢ナク政權ニ飢渴セズ彼此妥協シテ政綱及財政ヲ定ムルコトヲ得テ容易ニ難局ヲ通過スルコトヲ得ベシ、隨テ永ク内閣ヲ持續スベク以テ國務ヲ伸暢スベク國家ノ長計蓋シ焉レヨリ過グルアルナシ、若シ夫レ不世出ノ豪傑アラバ格別然ルニ非ラズ單ニ政派ヲ本位トシテ其一方ニ偏倚シテ内閣ヲ造ラシメ給フハ亦長計ニ非ラズシテ寧ロ政策ヲ本位トシテ不偏不黨ノ愈レニ若カザルナリ、臣忠一願クハ 陛下特ニ 聖鑑ヲ垂レ給ハンコトヲ、誠ニ忠切懇到ノ至リニ堪ユルナシ、誠恐誠懼頓首々々敬ミテ白シ奉ル

是歲同 小松原英太郎文部大臣に任ぜらる。寄松祝一首を送る。

よろづ樹も今は翠をこらせども雪霜ふりて松を知る哉

尙右に添へて各中學の中を指定して大學豫備科を副設し、年々高等學校入學志望者夥しきも之を待つ設備なき爲假令試験には合格するも、入學するを得ず空しく彷徨する者年々多きを加ふる是雪霜なり、視學制度の不完全にして教育事業の擧らざる是雪霜なり。師範學校の教養不完全なる爲教員の人格に乏しき雪霜なり。小學教員の待遇宜しきを得ざる爲地方に雇人視せらる是雪霜なり、中等學校長其器に適はざる者ある爲學校の統一を缺き教育の改善を期し難し是雪霜なり。其外大學

より中小學に至るまで之を調べ來らば雪霜少からざるべし。之を打拂ひてこそ松の價値を知れと書き送る。

是歲同 縣杯武二男忍(前大阪府知事)及三男敏大學卒業に付賀詩を送る。杯武より左の禮狀に接せり。

(前略) 陳は今回兩兒大學卒業に對し貴意に懸けられ態々賀詩を賜はり拜誦御芳志奉謝候轉結之意實に恐縮に不堪候小生事御承知被爲在候通短才淺學沈淪元より其所聊不遇を憾むる所無之候兒亦短才能く雄飛し得ること不思議に存じ候乍去可成御令息様方之驥尾に付多少なりとも國家に貢獻せしめ度存居候(後略)。

是歲八 大久保春野陸軍大將に任せられたるを祝する爲寄兵祝てふ題にて歌一首を送りしに、大に喜び來れり。

是歲九月四日 一木喜徳郎を内務省に訪ひ謂つて曰く、方今人情輕薄風俗浮華社會滔々として日に汚濁之を救済するの道唯報徳の教を普及するに在り。幸に大兄は文部次官たり。君は内務次官たり。殊に産業組合及斯教の熱心家平田東助君内務大臣にして、又之に賛成ある小松原君文部大臣たり。兩々相俟ちて斯教を振興するの好運に向へり、何卒此好機を逸せず、其方法手段の何たるを論ぜず、此際何分の考按を運らされ、不日開かるべき地方官會議に於て大臣より斯教普及の訓諭を行はれ、之を地方人民の任意に付し去るの秋に非らざる所以を縷陳したり。一木次官も深く其意を諒したり。(安註。成申 詔書の煥發ありたるは實に此翌月の事(十月十三日)なり。されば父は果然此事ありとして感激に堪へざるものありき)

是歲十一 慶久侯有栖川宮威仁親王第一王女實枝子殿下と御整婚の盛婚を擧げられたるに對し、慶喜公に同族を代表し恭しく祝辭を上る。

是歲同 農會關係者行賞の件に付李家知事に内翰を呈し、現農會責任者にも注意を促したるも、時機後れたればと稱して其儘と爲る。縣當局の不注意驚くの外なし。

同四十二年二月三日 磐田郡農會副會長青山善一來訪、郡農會は貴下是迄の御盡力に對し酬勞金品贈呈の儀あるも、貴下の廉潔、若之を受けざる等の事ありては遺憾なるに依り豫め内諾を得んとして會長の命を受け來れりとの事なり。余之に答へて曰く御厚意は忝きも余の當時無報酬無旅費にて微力を致せしは國士國家に盡すの一端にして、酬勞金品等思ひも寄らずと。而して之を峻拒したり。

是歲同 年來引立てたる水野富三郎、藤田信次郎郡長に任せられたれば嬉しく、親しく祝辭を送る是歲七月 知事より島田町政整理刷新の爲め其町長たらむことを懇勸せられ、同日島田の有力家天野廉來訪亦之を懇囑し、待遇を厚うすべしとの事なりき。併かし之に應ぜずして友人馬場晴利を推薦す。(安註。此時李家知事に辭退したる手紙の末に「御心は忝きも鵞を割くには牛の刀なくとも」とあり、父の志高潔にして報酬給料に衣食するの意無きを知るべし)

是歲同 田中董丘易賛に付弔辭を贈る。

是歲三月一日 天龍村青年會に臨み、易乾卦大哉乾元萬物資始に在る始の説を説きて中庸、誠者物之終始不誠無物に及び、教なかるべからざる所以を示し、報徳教義を法として時間を正しくすること、禮義を重じ、廉耻を貴ぶこと等凡七要項を示す。了はるや滿場拍手直に、左の通り之を決議せり。

- 一、各種ノ會合ニ時間ヲ重ンゼザルハ日本從來ノ弊風ナルガ本會ハ嚴ニ向後時間ノ勵行ヲナスベシ
- 二、形式的ニ陥キラザル程度ニ於テ特ニ禮節ヲ重ンジ長幼上下其盡スベキヲ盡サンコトヲ期ス
- 三、節儉ヲ旨トシ體格ノ強健ヲ計ルノ第一歩トシテ衛生上有害ナル襟卷ヲ全廢ス

是歲五月十日 東京市區改正の結果淺草北松山町祖先累代の墳墓地專修院を巢鴨町染井に移轉改葬に付兩日立會無事完了。之に關する記録は別に改葬始末一班として後考に資れり。

是歲六月 磐田郡役所より郡治一班回付につき一閱したるに郡の沿革不明瞭なるに依り、左記郡の沿革調を送りて之が更正方を忠告したり。

磐田郡ノ沿革

本郡沿革ノ概様ヲ按ズルニ磐田郡ハ成務天皇ノ御宇國郡創置ノ時之ヲ置カレ、其疆域頗ル廣濶ナリシガ元慶五年中其一部ヲ割キ山香郡ヲ置カレ後山香郡ヲ廢シテ之ヲ豐田郡ト周智郡トニ合セラレ、豐田郡亦往昔ノ磐田郡ノ大部分ヲ割キテ之ヲ置カル、而シテ其廢置年代等共ニ未ダ詳ナラズ、山名郡ハ養老六年中佐益郡（即佐野郡、今小笠郡ニ屬ス）ノ幾部ヲ割キテ之ヲ置カレタルモノナリ、皆何レモ年歴久シク、代官領及舊領主ノ知行所タリ、維新後靜岡藩ニ屬シ明治四年廢藩後濱松縣ニ屬シ、區制ノ時豐田山名磐田三郡ヲ以テ第二大區ヲ置カレ其行政區劃トセラレ、同九年廢縣後靜岡縣ニ屬シ、同十二年區制ヲ廢シ郡役所創設ノ時仍ホ其三郡ヲ以テ其行政區劃トセラレ、同二十二年中町村制施行ノ時山名郡ノ堀越村（今久努西村一大字）及中山梨村（今山梨町一大字）ヲ周智郡ニ、周智郡ノ村松村（今久努村ノ一大字）ヲ山名郡ニ編入セラレ、周智郡ノ上平山村（今山香村ノ一大字）及萱間村（今三川村ノ一大字）ヲ豐田郡ニ、城東郡（今小笠郡ニ屬ス）ノ寄木村（今幸浦村ノ一大字）ヲ山名郡ニ編入セラレ、同二十九年中法律第四十七號ニ依リ郡分合ノ時豐田郡ノ赤佐中瀬龍池豐西中野町ノ五ヶ村ヲ濱名郡ニ編入セラレ爾餘ノ豐田山名兩郡ノ全部ト最小ナル磐田郡トヲ合セ之ニ長上町掛塚村ヲ加ヘラレテ新ニ一郡ヲ置カレ特ニ磐田郡ト名ヅケラル是其歴史最古ケレバナリ、同二十二年中法律第六十五號ヲ以テ郡制ヲ施行セラレタレドモ郡ハ依然トシテ變ゼズ今ニ追ベリ。

是歲七月 宏三重縣警察部長に榮遷すと聞き左の手翰を寄せて之を祝規す。

今回榮遷の報に接し誠に欣賀に堪へず、是迄は内務部長の下に屬し機に課長に止まりしが、警察部長は直接に知事を輔けて全縣下の警察を總攬し、地方行政上最重要の官務たり、隨て全縣民の風紀衛生勸善懲惡の樞機を掌握するものなれば最慎重にして機敏ならざるべからず、殊に部下多數の警察官を統率し、縣下一般の人民を保護するの要職なるは勿論、時に帝都に於て警察部長會議を開かるゝを以て直に内務大臣の諮問又は警保局長の協議に對しては最確實適切の意見を提供して好模範たり及職掌上に關する法令其他に付豫め審査を遂げ之に提出して之が改善を圖る等前途其手腕伎倆を發展するの好運に遭遇せしものなれば今回の榮遷は即將來の好運を胚胎せり、爲國家一番養體練膽以て此新務に膺らるゝは信じて疑はざる所なるも、例の疎狂萬已み難く乃ち左に要項を列叙し以て聊か參考に資る、素より警察に經驗乏しきものなれば請ふ焉れを取捨せよ

- 一、上官と意思を連絡し其方針に従ひ寬嚴宜きを得而かも苟も法令を曲げざること但其方針に付適切の意見あらば之を直言するを妨げず
- 二、風紀を清肅にし衛生を周密にし惡事を未然に防遏すること但風紀衛生に關しては宿弊を審査し専ら之が匡制を要するは勿論、殊に湊船工場料理店飲食店待合茶屋等の風紀を匡制するに在り
- 三、刑事上各般の罪惡を摘發し以て社會の安寧秩序を保持し而かも苛察に失せざること
- 四、神廟保護内外人參拜方就中 至尊以下貴族高官に對する注意方、行軍演習等に對する手配方毫も遺策なきこと

- 五、防盜警火水其他の天災に際しては豫め用意し事に臨み毫も蹉跌又は狼狽なきこと
- 六、警察官の品性を陶冶して向上せしめ最懇切廉直の氣風を養成し而も駐在所巡査の品行上に關しては部内人民の儀表たることを心掛けしめ信威を保つことを訓諭し平素に之を鍛鍊せしむること

七、各種の選舉取締に關しては最公平慎重に之を取扱ひ其他諸般の取締向も亦之に準ずること

八、右の外警察上の學理は既に之を修得すれども其實務に膺るは初めてに付不慣の事故へ先輩及前任者等に問合はせ能ふ限り管内を巡察し將來の警察方針を定め上官の同意を経るは勿論、必要に依り下僚に詰問の上著々實行を勵むること申す迄もなければ山田町に出張先づ内外 神廟に参拜し官司に對面し、且置鹽彌宜にも必ず面會、將來の幫助を請ふこと(安註。置鹽彌宜とあるは、元父の僚官藤四郎氏なり) 追て新任地は 神都の在る所、殊に事務も前任地に比すれば較く簡易にして宿望の讀書も出來可申哉と被察猶更好都合と存す。

是歳八月 寺田彦八郎に書翰を寄せ社山疏水工事再興心を喚起す。

是歳同三月 宏本月十九日初めて男を擧ぐるを以て即ち命名すること左の通り。(安註。是れ父が還暦の年の喜びは嘗ふるに物なかりき)

善長 出處 周易文言傳云元者善之長也君子體仁足以長人

是歳九月 女婿鈴木惣作二男を擧ぐ、乃命名左の通

宜民 出處 詩經生民篇顯、令德宜民宜人

是歳同九月 中泉町梅原村組合長神谷惣吉満期に付其後任に推薦さる。余は別に考ふる所あり、河野繁太郎を助役に推薦當分組合長を選舉せず、見付町と合併の歩を進むべき旨を以てし、幸に組合會議員の容るゝ所となる。

是歳十二月 韓國駐劄軍司令官陸軍大將大久保男爵に招かれ、厚く饗應せられたるに依り、懇到なる謝辭を呈す。

同四十三年十二月 宏編著自彊錄に對し、左の評言を寄せて字句の正誤に付、注意する所あり本書は警察官の精神修養上必要を裁し篤志を以て企てたるものにして三重縣下の警察官全部に配布せるものなり。其費金二百圓。余太だ之を嘉し金五十圓を寄付し其美擧を助けり。

評 自 彊 錄

訓言周到鑿々、感ニ中リ警察官ノ眞髓ヲ穿テ得テ復タ餘蘊ナシ殊ニ 至尊及古人先輩ノ格言選歌等ヲ網羅シテ至レリ盡セリ、就中教育勅語、戊申 詔書ト警察本務トヲ日章櫻花帽章中ニ挿入シタルハ是著者ノ最モ苦心スル所ト感賞措カズ、豈ニ獨リ警官ノ規箴タルノミナランヤ

是歳同 磐田郡在住徳川舊藩士族總代より、毎年總代の任に膺り能く其任を盡され殊に子弟學資金に關しては非常の御盡力を以て基礎に確立せり其功勞實に少からざる旨を録せる感謝狀に記念品を添へ贈り來る。固辭すれども聽かれず。

七 感化教育十年

是歳三月 靜岡縣立感化院長即三保學院長を命ぜらる。本院事業は創始に屬し、爲國家重要なるを以て固辭し難く萬不得已重任に膺ることとなる。縣令を以て發布すべき本院規則は勿論族長以下の選定等一切を委任せらる。余の奉公は之を以て三回とす、何れも當局長官より選拔を蒙れるものにして、自分は一回も依頼したることなし。其の第一回は徳川舊藩知事徳川家 達公より藩學の教授に選拔され、第二回は故迫縣令より佐野城東郡長に後の小 笠郡長選拔され、而して第三回は即ち今回なり。任

に就くに先ち、神奈川、東京、千葉、埼玉地方感化事業を實視し、詳悉取調べ、頗る裨益する所あり、辭令を謹受するや、期するに十年を以てし、至誠奉公以て童蒙を啓迪し以て君國に報むんことを誓ひ、七十杏坪匡市風、蕃山耳順舉河功、老來天未許閑暇、啓迪童蒙亦奉公の七絶を賦す。時に齡六十有二。(宏註。三保學院は其後三方原に移され今は三方原學園といふ。)

只憾む學院の新築已に着手中にて啄を容る能はざるを。乃ち假令外形上の設備は姑らく之を舍くも内部の教化をして完全ならしむの方針を取り、各室座右銘に、毎朝々禮式、靜坐法、大祭祀日記念日の典式各訓話等の内容懇到を旨とし、門庭堤防園圃草木等に至るまで皆教を寓せざるはなく、又荒地を開拓して庭園とし、庭園の風光絶佳、命くるに十景を以てせり。

準備萬端成り、感化の第一本源なる「我家の御守」なる職員生徒の須臾も離るべからざる典範も、編み上げたれば左の國風二首を李家知事に示して一祭を博したり。(宏註。「我家の御守」中には五箇條の御即位勅語、教育に關する御沙汰書、報徳訓、報徳歌、三保學院歌及毎日の日に因みたる諸教訓を與に俱に奉體遵守する爲め之を手帳形に收めたるものなり。)

鶏も犬も聲なき浮島に移るも國の爲めと思へば

千鳥まで學びの庭に慣れにけりふみ讀む聲を波ときくらむ

生徒は改過遷善の域に赴かしむると同時に之を篤志家に委託して之に適する實業を授け、獨立自營の途を講ぜしめ、其成績の善良なるものを選抜して假退學又は本退學生とし、之が獎勵方法としては賞を重んじ、罰を軽くし、苟も痴愚の悖徳性に非らざる限り何れも改過遷善の目的を達成するに努めたるもの十年一日の如し。例に依りて一日の缺勤なく、一秒時の遅刻なく、生徒縣下二市十三

郡に涉りて五十有餘名の多きに達したり。

在院中獨り院生を感化するのみならず、三保村下の自治、實業の改發、青年の善導に留意し、又御穂神社々司氏子總代等の懇請に應じ、羽衣再建碑文を書き土人米國渡航有力者 久保田勲作等の依頼に依り羽衣天女

に關する漁父柏梁翁祠堂記文を撰み、岩崎照吉氏の囑に依り三保療園十景を定め、清水町戰勝記念講堂記文を草し、三保海苔改良開祖田中孫七氏の碑文を書したり。(宏註。此項後出選養軒詩集抄中三保即事參照)

恰かも大正九年三月は、豫期の十周年に達したるを以て世に在りては局外に立ちて斯業の向上を神明に祈り奉り、世を遊りし後も魂魄宇内に磅礴して斯業の發達を護る所あらむことを期して豫め密に森下官房主事及主任岡田理事官(宏註。新任の 地方局長なり)と胥謀り來る四月三日即 神武天皇祭日をトし、盛

に本院創立十週年記念式舉行の翌日退職の辭令を受く。後任杉山重喜(族長兼教師及 院長事務取扱)を紹介して歓迎すると同時に、生徒に對し、余の今斯を去るは十周年の約を履むに在り、如何ともし難し、因て茲

に第一に吾を視ること猶ほ富士山の如く、第二に本職を退くも依然神宮、御穂神社、成田不動尊、富士淺間神社に生徒の成業を祈り奉る、第三に余假令此世を遊りても靈魂尙彷彿其立身を祈り奉る旨を別辭とし余假令之を祈り奉るも生徒一同にして若し焉れ勉めずば何の效かあらんと訓言す。遠近

傳へ聞きて驚き訪客陸續相踵きたるも、直に入江町女婿鈴木惣作寓居に引揚げ、留まること五日にして同十一日午後一時妻と與に一浴を豆の長岡温泉に試み、然後清遊を八幡野なる實弟肥田和

三郎の清權堂に爲さんと欲して江尻驛を出發せり、郡町村長署長校長始め社長頭取職員生徒擧げて見送を忝うせり。

(宏註。父の感化教育十年は、後にも朝露の覺中父の手記に見ゆるが如く、事業が當然に日夜分陰の餘間を許さざりしが故に、眞に文字通りの十年一日の如くにして、感化事業の外には、また一つの天地なく、僅

に三保學院の所在地元の爲めに、已むを得ざるの公務を辨じたるに過ぎず、父の舊業だも譲る能はざりし天下國家の大局の爲めに已まんと欲して抑へ得ざるの衷情を披瀝して上は大匡宰相より下地方長官等に對する折に觸れての苦言も復た聽く能はざるに至れり。されば余に對する諭示は更らなり、一族一家の私事に至りては全く顧みざる餘地なかりしはいふを須むず。父が生命として、父の祖先に奉じて後考に垂れむとするこの朝露の覺も、爲めに全く中絶し、十年の記録も、僅々以上の一二頁に壓縮せらるゝに過ぎず。以て如何に、父が此事業の爲めに没頭せしかを想見すべし。蓋し父の日課は、當時、毎月、毎日の日に因みたる教訓を繰返へし、親ら範を垂れて院の職員生徒を導かんとするに在りしものにして、他念の乗ずる隙を完封したるなり。其「我が家の御守」中に集めて毎日の日に因める最も切の教訓なりとして日々之を繰返へしては其の日の行に資れるもの左の如し)

- 一日 二宮尊徳先生道歌
いにしへの白きを思ひ洗濯のかへすくもかへすくも
- 二日 林子平先生いろは歌
ぶ禮をもぶ禮としらぬ人はたゞ形は人よむねは畜生
- 三日 二宮尊徳先生道歌
み渡せば遠き近きはなかりけり己々が住所にぞある
- 四日 教育勅語
よく忠に克く孝に
- 五日 徳川家康公格言
いかり(怒)は敵と思へ
- 六日 二宮尊徳先生道歌
むかしまく木の實大木になりけり今まぐ木の實後の大木ぞ
- 七日 林子平先生いろは歌
なに事もうか／＼せず精出せ月日は鳥の飛ぶよりも疾し
- 八日 貝原益軒先生養生訓
やう(養)生の要は自ら欺くことを戒め能く忍ぶに在り
- 九日 報徳訓
こん(今)年の衣食は昨年の産業に在り
- 十日 林子平先生いろは歌
とにかくに人のあしきといつはりはいふな語るな是ぞ慎獨
- 十一日 宗純和尚安心立命歌
一生の守り本尊を尋ねればわれ人共に飯と汗なり
- 十二日 修身要鑑
にん(忍)耐は人生成業の本なり
- 十三日 森本信行社長編道歌
三度くふ飯さへこわし柔かし思ふまゝにはならぬ世の中
- 十四日 白隠禪師粉引歌
よると晝ともなうてはならぬ晝は働く夜分は休む

- 十五日 森本信行社長編道歌
ごく(極)樂も地獄も己が身に在りて鬼も佛も心なりけり
- 十六日 スコット先生格言
らう(勞)働は神が人間生活の上に與へ給ひしものなり
- 十七日 林子平先生いろは歌
しよ(書)籍をば數々よみて事のあと多く知るべし迷さむべし
- 十八日 手島堵菴先生心學いろは歌
はちをしれかし耻をば知らにや耻のかきあきするものじやくち(口)は是禍の門
- 十九日 童子教
はや(早)起にまさる勤ぞなかるべし夢で此世をくらし行く身は
- 二十日 二宮尊徳先生道歌
いじがわるうは生れはつかぬ直が元來うまれつき
- 二十一日 手島堵菴先生同上
にん／＼のおのが身の上慎まで餘所のよしあしいふぞ拙き
- 二十二日 林子平先生いろは歌
さけばちりちれば又咲き年毎に眺めつくせぬ花のいろ／＼
- 二十三日 二宮尊徳先生道歌
よの中の親に孝ある人はたゞ何につけても頼母しきかな
- 二十四日 荒木田武守先生世の中百首
ご(五)穀は種の美なるものなり
- 二十五日 孟子
ろうなぞと貴き卑しきいはずして年たけまさる人を敬へ
- 二十六日 林子平先生いろは歌
しん(身)命の長養は衣食住の三に在り
- 二十七日 報徳訓
はへばたて立てば歩めと子を思ふ我身に積る老を忘れて
- 二十八日 森本信行社長編道歌
く(苦)は樂の種、樂は苦の種と知るべし
- 二十九日 徳川光圀卿格言
さくらをば何はかなしと思ひけん人も花はさこそ見るらめ
- 三十日 森本信行社長編道歌
一を聞て二を知る
- 三十一日 論語

同十七日午前八幡野より小汽船に乗り伊東に上陸、久須美温泉宿大坂屋に一泊、十八日亦小汽船にて國府津に上陸、汽車にて午後四時恙なく東京青山に歸臥せり。(安註。青山とあるは余の原宿宅なり)

回顧すれば、十年感化事業に役し日夜分陰の餘間を許さざりしも、今茲に退職歸臥したるを以て其主なる事項を約載すること即左の如し。

同四十四年^四 宏新置の内務省土木局書記官に任ぜられ、尋で内務書記官參事官を兼ね、新設の都市計畫課長に補せられ、道路法都市計畫法其他必要の法令を起案し議會の協賛を経て 裁可施行せられ其功寔に不少。是より先き大正二年五月には英倫に開催の萬國道路會議に參列 被仰付、傍歐米各國施政の巡視を被命、翌年四月歸朝得る所不少。(此間明治四十四年七月六日には内孫庸徳、大正三年二月十一日には同説子生れ、同元年十月三十日には外孫徳就生れたり。孰れも余の命名なり。又同 五年九月二十一日には内孫達子を得たり)

大正六年^二 肥田家に於て川合家と婚約相整ひ、此大祝日を以て三島大神前に此大典を擧ぐ。忠一肥田和三郎に代りて恭しく披露式を行ふ。

同年四月八日偶得列于岡田文相歡迎會之榮、

英材在野詎要稱、拔擢元知 皇願單、朝立廟堂呈正議、夕臨公會試雄談、
期窮學制全斯責、又革教方推此男、國運汚隆繫文相、何爲伴食有名廿

同 七年^五 宏累進して勅任内務監察官に任ぜられ、其他明治神宮造營局參事及鐵道院參事、各種委員を命ぜられ、叙勳四等賜瑞寶章、未幾何東京市區改正事業の功に依り陞勳、同三等に叙せらる。同九年八月任内務省社會局長、頗る抱負する所あり、是亦新置の官にして施設する所少しとせず。先以て檄を傳へて全國青年團代表者を東上せしめ、神宮、宮城參拜、令旨を賜はる。其精神修



(影撮年四十四治明)

(明治四十四年)

白鳥子 謹啓

先考 三好 吉夫 様

先考 三好 貞子 様

先考 三好 貞子 様

三好 貞子 謹啓

池田 三好 貞子

養上に與へたる感化は無限と察せらる。其他施設考按擧げて數ふべからざるが如しと雖も、惜しむらくは後藤新平男の東京市長候補者に推薦せらるゝに方り宏の助を要請せらるゝの萬不得已に及び僅々半歳にして該局長を辭せしを。(安註。余は當時後藤男爵の懇囑黙し難く、其命を承けたるも、父の諒諾を得るに非常に苦めり)是歲十二月五日 東京市會に於て滿場一致の推薦に依り助役として新市長を助け市政の革新を行ふに及び。

先是即大正五年十二月九日錫と貞子の結婚式を擧ぐ、貞子は仙臺の人大條賴義の二女にして其媒妁人は 皇子傳育官長三好愛吉夫妻なり。(安註。三好氏は義に第二高等學校長として令名あり、錫の學生時代より最も私淑したる人なり、早世甚だ可惜)

寒 松 祝

田にそと池の隄の大松は條も茂りて千代をふるらむ

錫は仙臺第二高等學校を経て東京帝國大學に入り獸醫學科を修め大正五年七月首席を以て卒業、滿二年間無給にて傳染病研究所技手と爲り、尋で大阪府技師となり、九年十二月内務技師に任ぜられたり。錫に與へたる仕官十箴左の如し。(大正五年十月十五日附)

- 一、官吏服務規律及廳中諸規定ヲ恪守シ常ニ上官ヲ敬ヒ同僚ト睦シク下僚ヲ愛ムベシ
- 二、勤勉業ニ超エ尤モ登廳退廳時限ヲ愆ラズ故ナク缺勤遲刻早退スベカラズ
- 三、常ニ澹泊(儉之至)ヲ旨トシ都テ奢美ヲ制スベシ
- 四、常ニ寧靜ヲ旨トシ妄リニ忿怒スベカラズ
- 五、凡ソ公務ヲ奉ズル常ニ用意周到尤モ研究的態度ヲ以テ之ニ膺ルベシ
- 六、職務ガ公益上ニ關スル事ヲ自覺シ科學上ノ實驗發明等長ツモ先鞭ヲ着クベシ

七、凡ソ公務ヲ執ル自己ノ信ズル所ハ假令上官ト雖モ毫モ憚ルコトナク其意見ヲ貫クコトヲ懋ムベシ但シ固執スルコト勿レ

八、常ニ信義ヲ重ンジ廉潔ヲ尊ビ人格ヲ高フスルコトヲ懋ムベシ

九、公務ノ餘暇必要ノ書籍ヲ繕キ益々専門的蘊奥ヲ究メ人後ニ落ツベカラズ

一〇、休日ニハ人ヲ會シ又ハ單獨ニ體育ノ道ヲ講ジ以テ顯ラ體軀ノ保健ヲ懋ムベシ

同 七年九月廿六日

ふく子を榛村家に嫁せしむ。榛村家は遠州小笠郡雨櫻村上垂木の巨農にして父を長五郎と稱す、子無きを以て其新家弟同五郎七の長男を養ひて嗣子とす。專一是なり。專一に配する爲ふく子を娶りたるなり。媒妁人は遠州袋井土橋の人鈴木要作及同十束村上本郷の人鈴木敬三にして何れも榛村家とは親類合なり。婚禮式は村の舊慣に依りて行へり。

松緑竹青梅又堅、至哉今夜媾婚筵、舉杯俱祝將來慶、龜壽鶴齡千萬年

專一は大正六年七月東京帝國大學法科を卒へ、尋で判事登庸試験に及第し司法官試補を経て判事に任ぜられ、大阪地方裁判所に奉職。

同 八年五月廿一日

孫惟徳生る。

是歲七月

克と須賀子の結婚式を舉ぐ、須賀子は大分縣の人大審院判事末弘嚴石四女にして媒妁人は 皇后宮大夫大森男夫婦なり。(安註末弘嚴石とあるは、今の東京帝國大學法學部長末弘嚴太郎父)

池の水茂れる森の蔭うけて行末長く登る稻かな

克は濱松、郡山、横濱、津の中學を歴て第一高等學校に入り、大正六年七月東京帝國大學法科を卒業す尋で判檢事登庸試験に及第、志望に依り同八年三月檢事に身を起したり。試補となるの際、將

來の爲め仕官十箴を與へ以て之を獎勵せり。此十箴は錫に與へたるものと同じ、但し(五)中「周到」を「周密」に改め、(六)を「職務ガ司直ニシテ殊ニ終身官ノ恩遇ナル所以ヲ考へ、止ニ第二回登庸試験ニ好成绩ヲ得ルノミナラズ益々奮勵ヲ加へ其裁判官の好評ヲ博スルコトヲ期スベシ」に代へ(十)中「人ヲ會シ又ハ單獨ニ」の九字を削れり。

同 十年六月十二日

榛村專一自ら感ずる所あり、判事を辭し、辯護士を開業す。

八 古稀有餘

曩に三保學院退職發令の翌日別辭を全國感化院長始め知遇を辱うせし内務省府縣廳都市町村長及貴衆兩院議員、本縣會議員其他親族故舊等は勿論、神社佛閣銀行會社學校等の向々へ隈なく郵送し、筆末に左の偶感を添載して正并返和を乞へり。

このたびは神も遊べと許すらむ七十路もすぎ十年盡せば

十年斯業亦徒爲、齡過古稀容未衰、秋々不眠無限感、丹心一片任神知

(宏註。父が此時、田子一民、留岡幸助、有馬四郎助、武田慎治郎諸氏より全國感化院長協議會内務省に於て開かるゝに付招請せられたるに對し、斷はれる書面中の一節に「老子ハ功成り名遂ゲテ身退クハ天ノ道ナリト言ハレタルモ、余ハ功成ラズ名遂ゲズンテ身退クモ亦天ノ道ナリト言ハン、抑々爲スナクシテ徒ニ其椅子ヲ占ムルハ天ノ道ニ非ザルノミカ天ノ道ニ背クベシ況ンヤ特別ノ約アリ之ヲ破ルオヤ、特別ノ約トハ何ゾヤ、曰ク不肖忠一當初三保學院長タルニ先チ心ニ二十年ノ約ヲ結ビ以テ時ノ良二千石ニ陳べ然後其職ニ就キタリ、諺ニ十年一昔ト稱ス、曩ニ政府ハ府知事縣令ノ任期令ヲ定メテ十年ヲ一期トシタル洵ニ故アリ、故ヲ以テ治績皆舉レリ、豈ニ止ニ府知事縣令ノミナランヤ、凡ソ官職ヲ奉ズル者其勤績年數多ニ過レバ情弊生ジ易クシテ進歩ヲ妨グ、反之其年數少キトキハ善政嘉謀ヲ舉ルニ違アラズシテ忽チ去ル、之ガ中庸ヲ得ルハ夫レ唯十年カ、) 是麗ル、迄勤績ヲ勤ムル者アリシモ斷々乎トシテ職ヲ退キタル所以ナリ」云々とあり。以て父の意中を窺ふべし。)

歸臥以來恩人勝海舟、山岡鐵舟先生を始め長瀧庄次郎、同庄藏先生其の他及親族朋友故舊等の展墓

を始め、傍ら東京近郊の社寺及名勝等を探り、全國に及ぼさんと欲し、笥を曳き初めしに、大森鍾一翁の勸東京皇室博物館 總長森氏に謀りに依り、是歳六月十一日該博物館五十年間沿革史の編纂を囑託せらる。囑託に先ち今回は磐田郡農會長と同じく全く是迄の御禮奉公に付無給無俸にて相勤むべき所以を交渉したるも聽かれず。

是歳六月 宿痾脚氣靜養の爲め妻及孫達子(達子、此時五歳なり)を伴ひ箱根小涌谷鳳來樓三河屋に入浴永年の勞を醫して歸る。

是歳 大正九年六月十四日より上野皇室博物館に出勤、先以書庫の書冊及諸帳簿を涉獵して其大要を取調べ、然後既往明治四年より大正八年迄の沿革誌編纂例規即其目的を定め、之に準じ其材料を拔萃するの必要を認め、先づ之を起案して神谷主事に示し置けり。總長主事共に、編纂には干涉せざるを以て見込通り之を行ひ歳月を費すこと長さも顧念せず一人にて其の力の出來得る限度に於て之を果すべき旨告げらる。

是歳九月 より太政官日誌明治史要を始め書庫中に收藏せる有らゆる簿冊に就き古より新に及ぼし逐次必要と認むる材料を摘録し、之を例規の十五六目に分類することに着手し、十二月廿八日の御用納までに四十四冊の拔萃を了へて大正十年の新春を迎へたり。

同十年中も亦各簿冊の拔萃を勉め、毎日一時間以上早勤し、其成績を神谷主事を経て總長に報告し、十二月廿七日編纂大意と、編纂凡例を定め、事務官を経て總長に報告せり。

同 十一年 先儒墓所を大塚坂下町に訪ふ。

同 十二年 金原明善翁の病狀を下澁谷羽根澤僑居に慰問したるに、豈に料らむや、今晚已に病歿、未發喪、其筋の御沙汰を待ちつゝある趣を承り、家族親族其他病問者に挨拶の上度みて其遺體を拜み、左の要目に就き其靈に告げたり。

- 一、病問セシニ已ニ永眠残念千萬ナルモ齡九十餘歳遺憾ナキコト
- 二、翁ガ 帝室及國家ニ對スル忠節義侠公益上ニ關スル遺蹟ノ夥シキハ數ヘ難ク千載朽チザルコト
- 三、余ガ四十六年間に職中補助ヲ蒙リシコトニ對スル厚禮
- 四、余ハ多年俸給ヲ戴キシ御禮奉公トシテ東京皇室博物館編年史事業ニ盡シツ、アルコト
- 五、他日九泉下ニ御厚禮可申上覺悟

同年三月 宮崎水石先生の墓を四ッ谷永住町三十五番地東長寺に訪ひ、親しく井水を汲み墓を拂ひ香花を手向參拜感慨難堪涕自沾衣。

同年四月 孫光大生る。

同年四月 始めて新宿御苑觀櫻の恩榮に浴す。從來の例觀櫻の榮は高官紳士に限られしに、今回より肇めて此恩榮に浴することを得、感泣已む能はず。

同年四月 長男宏後藤子の外交上不得已義あり、東京市長辭職に付亦辭職、市會其他勳績を勸むれども肯んぜず。其高風に感じ、詩を賦して慰撫す。

尚富春秋休惱魂、助來市尹政功存、他時徐待風雲到、應潤生民報 聖恩
果然幾何もなくして後藤子内相の椅子を負ふと同時に社會局長官の重任に膺れり。

同年六月 克及善長を伴ひ、故森鷗外博士の墓を向島弘福寺に訪ひて追慕の意を表し、長命寺百花園

を問へり。今日の散策は意外の逸興なりき。

同年七月 克及善長庸徳を伴ひ茅ヶ崎の別墅地を見る。全地松林、海に面し、東に江之島片瀬葉山三崎を眺め、西北富嶽函嶺等を望み、浪靜に瀬淺く、海水浴に好適なり。三人游泳を試み壯快譽ふるに物なし。

同年八月 政變に付余は宏に左の通進言せんとしたるも、翌日忽ち大地震に遭ひて十分に進言するを得ざりき。

今回山本伯へ内閣組織ノ 大命降下シ聞説、伯ガ舉國一致ノ内閣準備中ナリト、是千載一遇、余ノ意見ニ暗合セリ謹デ按ズルニ五ヶ條ノ 御誓文ノ(二)上下心ヲ一ニシ盛ニ經綸ヲ行フベシヲ始メ以後ノ 詔勅中皆上下一心協力ノ 聖慮ヲ宣セ給ハザルハナシ、今回舉國一致ノ内閣ハ眞ニ 聖慮ニ副ヒ奉ルモノトイフベシ、就テ其根基ノ策タル閣臣ノ選擇上ニハ後藤子ニモ切言スベク、尙進デ山本伯ヘモ進言スルヲ要ス、高橋是清、加藤高明、犬養毅氏ヲ入ルベク其他貴族院等有ラユル人材ヲ網羅スルヲ要ス、右三者若シ入閣出來ズバ相當ノ代表者ヲ差出サシムベク、而シテ後藤子ヲ内相クラシメ、此際自カラモ進ミテ之ヲ輔ケ、從來ノ内政就中積弊アル選舉界ヲ一掃シテ公明正大ナラシムルコトヲ爲邦家切ニ希望ス

同年九月 右の進言も十分ならずして翌日大地震、民心恟々の裡に内閣の組織成る。今回の地震は其災害安政二年よりも大なり、就中、火災甚し。余は博物館書庫に在り編纂從事中の事にして書庫を出づる能はず運命を文庫に託したり。此文庫にして崩壊せば歴死の非命を遂ぐべかりしを、不幸中の幸として文庫無難なりにし依り失命を免かれ、午後五時頃認可を得、電車不通に付下駄を穿ち、遠路を辿り、番町大森邸を見舞ひ青山宅へ歸り相共に無事を喜べり。

本月三日より同六日まで特別賜暇を得しも、仍ほ交通機關開通し得るまでの許可を得、十月二日より出勤したり。避難民蝟集蟻結して離館せず。館員は其救済に専らなりき。震動は翌日以後連續息まず、町内徹夜にて六日間自警。丹羽金右衛門一族を擧げて來泊、九死一生の避難を救へり。宏社會局長官に召し出されたり。

同十三年一月 信子四家(水野、小橋、永田、湯淺)訪問歸宅後氣分勝れず、宮川博士診断の結果腸チフスと決定、傳染病研究所病院に入院、皇后陛下より目錄一包、御料牛乳外嗜好品の恩賜あり、宏始め骨肉縁者皆看病に努めたるも二月七日遂に歿す。叫天號地復た歸らず。諡して慈光院深譽妙信大姉と曰ふ。多磨墓地に葬る。累代の墓域狹隘にして移轉するを要せばなり。

右に付余は三日間毎朝の諸禮拜及諸 詔勅の奉讀を御遠慮申上ぐ、弔問者陸續接踵其數を知らず。余宏の委囑に依り井下課長、佐藤係長外一名の案内を要め、多磨墓地を實見し百年松を見出し宏錫克と相談の上之を決定す。宏の囑に應じて墓誌を撰む。

同年五月 妻及六孫を西荻窪上井草の別墅へ移住せしむ。余も從ふ。克一族は宏と同居。慈光院生前子供の成蹊學校への通學の便を慮りたるに由る。生前之を果すを得ざりしを憾むも、今行はれしは地下の悦を察すべし。同月廿五日村社八幡社に參拜。同年八月卅一日を以て博物館總長より沿革史書調及其材料宅下調の件認可せらる。認可願には宅調心得書として左の要項を以てせり。

- 一、毎日宅調時限ハ特別勤務ノ外都ベテ規定ノ服務時限ニ限ル(宏註。父の宅調時限は成規の勤務時限制よりも勝にして分陰も私せざる主義に徹底せり)
- 二、事故アリテ宅調ヲ缺クトキ一週間以上ニ及ブトキ亦前項規定ノ例ニ依ル

三、父母祭日又ハ其墓參其他必要ニ臨ミ住居ヲ離レムトスルトキハ共事由ヲ具シテ許可ヲ受ク
四、宅下ゲノ材料ハ都ベテ厚ク之ヲ保管スベキハ勿論之ガ宅下ヲ要スルトキハ拔萃録ヲ除クノ外掛官へ申出拜借
證ヲ差出シ之ヲ返上スルトキハ該拜借證ノ下戻ヲ受ク

同年九月 肥田春充の著「この大獅子吼を聴け」を讀みて之を讀みて感ぜざる者は大和民族に非らざるべし、之を讀みて慨かざるは忠愛の士に非らざるべきを以てし、唯脱誤尙多きは遺憾に付至急訂正すべき旨申遣はす。

同年十二月 國柱人材の一人たる一木氏に對し病氣見舞を呈す。
同年四月 池田社會局長官榮遷于京都府知事、余因送左之一詩

榮遷當益奮材能、府政隆、猶日升、學界受磨光倍熾、民風加礪富彌增、德要春雨有仁澤、威待秋霜無愛憎、
握吐三回胸宇闊、名區到處寶爲朋

京都の名所を探ぐる宿志の達することの叶ふべきを喜ぶ。

あらうれし西の都に杖曳きて探り盡さむ四方のけしきを

同十四年十一月 即紀元二千五百八十五年の紀元節を以て但馬家と縁組、其次女民子貰受到付結納交換。此縁組に關する書類は別に一括して永遠保存書類中に格納。

同年八月 鈴木長藏を訪ひ、妹かな子の宿病を慰問し、佛壇に禮拜、長藏案内にて延命院墓地に赴き梅輪長香信士墓に參拜。

同年二月 八勝庵(西萩別邸富嶽晴雪、連山翠嵐、八幡講林、女大觀、電車夜)に於て留別の宴を催す。其翌日は井草八幡社に詣で參拜告別、國運の隆昌と家庭の安全を祈り、昨年轉住以來の加護を謝し奉る。

廿六日京都に移る。此日より昭和二年十二月に至る記事は京都巡遊紀行に載せたり。(安註。主として神社佛閣名所舊蹟巡行の紀行にして神官、管長等と修交、詩歌の交換に會心の事多く、旭大の一卷を爲せり。)

同十四年七月 民子分娩、女兒、命中子、出于書經及中庸、基于官舎在中立賣。

幸を七つうけ得て生れけりけふの七夜のいと芽出たけれ(七幸とは其名字に備る、一かたよらぬ、二すなほ、三なほし、四たゞし、五よろし、六なる、七あたる)

同十九日於四明ヶ嶽龍蛇庵避暑、靜養旬日、清涼不覺復(安註。龍蛇庵は父母の爲めに設けたる比叡山上の小屋なり父母屢々清遊する)

四境無聲淨似仙、一禽不語靜如禪、都家幾萬電燈簇、疑是銀河降自天。

同十五年七月 宏轉任に付豫め博物館沿革史編纂宅調住所移轉の承認を得て家族と共に横濱伊勢山官舎に安着。

横濱懐古

二十年前知事誰、周君(周布)已逝惜於師、眼中閱歷新陳速、災後經營興復遲、五市渠奚拒移住、結婚我既許交肌、巍然大老大銅像、死比鴻毛萬國夷

慘狀經年尙未忘、舊來風物惹憂長、半宵船歌耶米耶、氣笛聲疑海月光

宏受勳章於白耳義國皇帝

特知名港顯譽揚、劍黍勳章於白皇、恰是菊花良季節、大忠至孝一家香

同年十一月 池田晋、川成千代子と婚す。媒妁は宏へ懇囑の處 天皇陛下御病狀葉山を離れ難くに付錫をして代らしむ。

同年十二月 每朝祈 今上陛下御惱御平癒有所感

皇后王臣侍 帝倚、常忘寢食赤心傷、舉邦祈願通天處、非告憂危今小康

同年同月 同日 今日午前一時二十五分 今上陛下御醫藥及祈願兩つながら効なく遂に 崩御あらせらる
皇室典範に依り 皇太子殿下直に 皇位を繼承あらせられ、昭和と改元あらせらる。

今喪 聖皇雖可悲、既備明嗣固洪基、誰知赫々守成績、夙在遠州航海詩

先帝陛下御歳十六時過遠州灘詩云、夜駕艤艫過遠州、波天明月思悠悠、何時能遂平生志、一躍雄飛五大洲

同歲晚書懷

世局危於累卵危、昭和 新勅可能思、政權爭奪將何事、易水應招鷓鴣嘯

昭和二年 諒闇新年

天地蕭條不耐憂、先皇仁德洽避殿、門無松竹慶年賀、鳥語如悲樹影愁

喪章含涕黑、漁客詎投竿、寂聞乾坤裡、森羅不忍看

伊勢山の絶勝

西は富士東は港眺めても眺めつきせぬ我住むかな

同十二月 宏妻孥を携へ自動車にて 多摩御陵に参拜し 聖徳の益々隆なるを欽仰し奉る。余亦従ふ。

多摩陵御参拜

先皇遺徳日彌加、來往肩摩参拜夕、崩御餘恩亦無限、寒村忽變占繁華

同三月 大森鍾一昨日遂に薨去。博物館宅調べを休みて追悼の誠衷を表す。

同四月 長子宏 先帝陛下に奉仕し、御病中及 崩御に際し、葉山御用邸内外御監護警衛の爲、夜以て

日に繼ぎ寢食を忘れ、其葵忠を盡せし心勞に對し厚き 御恩賞を拜戴して恐懼に堪へ難し。

同年同月 錫來りて洋行の内意を告ぐ。余太だ之を壯とす。米國巨豪ロッキンジャー財團事業公衆

生研究生に選ばれたるものにして、此選に入れるは官の命よりも名譽なり。

同年五月 茅ヶ崎古屋改築成りて移住の準備成る。因て伊勢山皇太神宮、成田不動尊に各参拜し國運の益々隆昌と家庭の安全を祈り奉る。

茅ヶ崎移住に付ては豫め例に依り博物館宅調地變更の承認を経たり。

同三月 余及び妻子、孫善長、光大と共に茅庵に安住。

滿眸山海望無涯、茅屋清幽惟我家、松籟濤聲相和處、天然音樂以何加

友松消暑獨閑居、編史餘閒又讀書、卜得湘南樂天地、漁歌如湧是豐漁

同年六月 博物館矢島正昭より突然左書に接す。即十二月廿日限御免願ふ。

(前略) 誠に突然に候へども年來御面倒相願居候當館沿革史編輯之件は宮内省經費節減之都合も有之候間本年度打切度様總長の意見に候間誠に恐入候得共何卒本年末迄に一應御纏め被下度奉願候(後略)

本史編纂ノ第一 本源タル各要目章中明細書ノ起稿ヲ了シタルモノ合計十八冊其ノ内譯左ノ如シ

- 一、第一章 本館ノ濫觴動機及其經過大要ニ關スル件 一冊
- 二、第二章 帝室ノ恩典ニ關スルコト 一冊
- 三、第三章 本館及表慶館動物園三年町支局等諸營造物ニ關スルコト 二冊
- 四、第九章 行幸啓及御成ニ關スルコト 一冊
- 五、第十章 各國貴賓ノ來觀ニ關スルコト 一冊
- 六、第十一章 博覽會其他ニ關スルコト 二冊
- 七、第十四章 災害ニ關スルコト 一冊

- 八、第十五章之四 上野公園ニ關スルコト 三冊
 - 九、同上之五 圖書ノ變遷ニ關スルコト 一冊
 - 一〇、同上之六 寶物ノ保護ニ關スルコト 一冊
 - 一一、同上之七 日本帝國美術史ニ關スルコト 一冊
 - 一二、同上之八 出版及撮影ニ關スルコト 二冊
 - 一三、同上之九 列品及動物ニ於ケル内外國トノ交換寄贈其他貸與ニ關スルコト 一冊
- 編纂に着手セシモ未ダ起稿ヲ了セザルモノ左ノ如シ。

- 一、東京帝國博物館五十年沿革史大綱 但本館艦船以降十五年間標準的ニ之ヲ編纂セシモ各章中未ダ明細書ノ起稿ヲ了セザルモノアリ大綱ハ率ネ該明細書ニ基キ起稿スベキモノニ付擱筆ノ不得已モノアルニ由ル
 - 二、第四章 本館及表慶館ノ陳列ニ係ル 御物及獻納寄贈入其他都ベテ蒐集ノ美術工藝歴史天産等ノ設備保管排置出品ニ關スルコト
 - 三、第五章 本館官制其他諸規定ノ新設改廢ニ關スルコト
 - 四、第六章 本館ノ經濟ニ關スルコト
 - 五、第七章 本館職員ノ進退ニ關スルコト
 - 六、第十三章 年表ニ關スルコト
- 編纂未着手ノモノハ第八章本館ニ對スル功勞者篤志者ニ關スルコト

尙十二月廿日將來之善後として他日御都合の出來得る好機に遭遇候はゞ何卒御厚配に預り斯未成の編纂を空しふせしめざると共に該拔萃錄及編纂改廢の草案を後に傳へられむことを切願して此御囑託を終はる。

同年七月 茅庵にて主人夫婦來り庸德中子の誕生を祝ふ。(安註。主人夫婦とは余等夫妻のことなり、此種の記事頗る多し。是は其一例のみ。)

同年八月 石神茅庵即事

砂白松青相海濱、清幽不復入塵氛、芙蓉妙景人知否、千態萬姿都是雲

同年十月 奉欽仰 今上陛下幸臨于奉東京灣大觀艦式

踐祚以來初幸臨、東京灣内艦如林、威風凜凜、繼明志、勇氣堂々、養正心、巨礮連轟驚露塵、空航敵愾笑翔禽、

艦艦一躍五洲外、暗合 先皇雄大吟

同年十一月 固辭金婚式 虛榮一夢宛如蜃、不免人間有吉凶、歡樂哀情天所授、金婚畢竟是門松

同年十二月 恭祝惣作榮遷于靜岡縣見付高等女學校長

特辱榮遷眞可欣、歸鄉衣錦亦忠君、賢良輩出冠他校、斯任大於前日勤

九有終

昭和三年一月 朝拜及拜讀の例改正但毎日施行如故。

- 一、天 神 地 祇 朝 拜
- 一、天神七代地神五代
- 一、神武天皇以下御歷代
- 一、伊勢兩大神宮
- 一、明治神宮

- 一、宮城
- 一、桃山兩御陵多摩御陵
- 一、護王神社
- 一、靖國神社
- 一、結城神社
- 一、八幡宮、阿部野神社
- 一、富士淺間神社
- 一、上野東照宮
- 一、波布比賣神社
- 一、鳥越明神
- 一、別雷神社
- 一、府社八幡神社
- 一、八幡野八幡神社
- 一、御穂神社
- 一、成田不動尊
- 一、徳川兩家
- 一、先祖代々
- 一、農人形

每朝朝禮式ノ節拜讀
聖詔勅

- 一、五箇條御誓文 (明治元年三月十四日)
- 一、憲法發布御勅語、同詔 (明治二十二年二月十一日)
- 一、教育勅語 (明治二十三年十月三十日)
- 一、戊申詔書 (明治四十一年十月十三日)
- 一、大正天皇踐祚勅語 (大正元年七月三十一日)
- 一、同即位禮勅語 (大正四年十一月十日) 同恩赦勅語 同救恤勅語 (同日)
- 一、御沙汰書 (大正四年十二月十日)
- 一、庚申詔書 (大正九年一月十日同年同月十三日)
- 一、癸亥詔書 (大正十二年九月十二日及同年十一月十日)
- 一、今上天皇踐祚勅語 (昭和元年十二月二十八日)
- 一、同即位禮勅語 (昭和三年十一月十日) 同恩赦勅語 同救恤勅語 (同日)

番外報徳訓

同年五月廿一日 杉山巡查繁作 突然茅庵に訪れ、横濱官舎よりの電話なりとて目下米國に研究中の錫今回歐洲英倫萬國牛乳會議に出席仰付けられたる旨、余に即報方を命ぜられたるなりといふ。

同年六月八日 羽賀重太郎の懇囑に應じ舊作參拜榎原神宮、拜觀大覺寺の外左の一詩を以てす。

多年奉職姓名馨、鳴鶴一聲傾月聽、還曆有餘稱廿五、果然元氣駕剛齡。

同年六月九日 夢覺めて左の一詩を賦し得たり

國夢快感

頃蓄鬚髯不蓄金、老來憂國奈難禁、夢登臺鼎贊 皇化、尤矯黨風匡異心
同年同廿九日 每朝拜方左の通改正。

池田忠一敬みて一段毎に之を言上

- 一、天の神様 地の神様 天の御中主神様 高御産靈神様 神御産靈神様 天神七代様 地神五代様 神武天皇陛下 歴代天皇陛下の御厚德を謝し奉り
 - 一、伊勢兩大神宮様 天照大神様の降り給ひし天壤無窮の 神勅の難有を謝し奉り
 - 一、伊勢兩大神宮様 明治神宮様 富士淺間神社様
- 御國に對する 御大恩を謝し奉ると與に恭く
祈願し奉り

今上天皇陛下の萬壽無疆を祈り奉り併せて

皇運及國運の兩ながら彌々隆ならむことを祈り奉る。

同年八月 錫自歐米歸朝

同年九月 宏舉五男充之といふ。名は孟子公孫丑上篇四端に取る。

大安佳日雨天晴、官舎呱々傳勇聲、父是英豪母賢婦、皆無優劣立榮名

同年同廿四日 静岡に赴く、是寶臺院に於て涼池院様五十年忌法要施行の爲めなり。沼ま子、妹大友けい子、克妻須賀子、嫡孫善長同行す。

忠一度祭涼池院歡譽淨喜居士之尊靈五十年、乃賦得七律一首以聊慰其尊靈

五十年光倏忽行、經過如夢陸然驚、名醫不少難延壽、良藥雖多永保生、飛瀑同涼忘夏日、紅楓共賞赴秋晴、最懷父也強節節、促客俱聽劍舞聲

祭 文

同年九月五日 涼池院様五十年正忌日に付松茂庵佛壇に於て左の祭文を謹誦して其精靈を慰めり。

嗟夫太陽ノ光ハ一秒時間ニ七萬八千五里ノ速度ヲ以テ大空ヲ旅シ地球ハ同時間七里餘ヲ行クトイフ父君ノ歿セラレシハ纔ニ十年前ノ如クニ思ヒシモ今ヤ五十年ヲ迎ヘリ、因テ去月廿五日御墓在所静岡寶臺院ニ於テ新ニ香爐盤ヲ建テ一族相集リ法師ノ御回向ヲ請ヒ五十年忌ノ法要ヲ營ミ一篇ノ祭詩ヲ供ヘシモ今日ハ全クノ五十年忌ニ付仍午前法要ヲ營ミ該本堂ニ於テ御回向ヲ行ハシムルノ外茅ヶ崎松茂庵佛壇ニ於テモ御生前ノ嗜好物ト家内手製ノ御精進料理トヲ供ヘ以テ之ヲ祭ル、嗚呼父君ガ生前覆育ノ御恩深且高此深高ナル御恩ヲ御生前ニ報キムト欲シテ遂ニ能ハズト雖モ御歿後猶ホ未ダ幾何ナラズ除服出仕ヲ命ゼラレ、直ニ大迫縣令ノ被告代理トナリ遠州城東郡來福村ノ海岸大紛議ヲ擔當シ出庭辯論三年遂ニ全勝ヲ得テ歸縣復命セリ、出庭ノ始ハ十六等出仕ナリシモ忽十五等出仕ニ進ミ又十四等出仕ニ進ミ歸縣スルヤ一躍シテ十二等出仕ニ進ミ、尋テ佐野城東、豊田山名磐田、賀茂那賀、磐田郡長タリ、其施設舉ゲテ數フベカラズ、加藤弟和三郎ヲシテ帝國大學ニ入り醫學ヲ研鑽成業ヲ果シ、伊豆ノ舊大醫家肥田家ヲ相續セシメ于今振々乎タリ、恩限リナクシテ壽限リアリ、唯後世子孫ヲシテ之ヲ全フセシメンコトヲ期セリ、但忠一運尙拙クシテ高等官ノ郡長ニ止マリシモ幸ニ長男宏ハ夙ニ帝國大學ヲ卒ヘ中央政府ニ在リテハ社會局長官ニ昇リ、府縣ニ在リテハ京都府知事、神奈川縣知事タリ、二男錫モ亦之ヲ卒ヘ内務省衛生局技師タリ、今ヤ洋行中、三男克モ亦之ヲ卒ヘ檢事ヲ經テ今ヤ司法省思想部書記官タリ、皆君國ノ爲ニ貢獻スル所頗ル多シ、其到ル所豈ニ測ルベケン哉、尙クバ享ケ給ヘ

昭和三年九月五日

過去の思出

宏註。是同年九月一日の記にして父の述懐なり。自叙傳の一節とも見るべきものなるに依り左に之を掲ぐ。

今日は大正十二年癸亥の第七年にして日本國民の須臾も忘るべからざる所なり。人生は善く生死の間に出入する者は幸運にして立身出世する者多く、之に反する者は落魄沈倫して功名富貴を得難きものなり。余は生死の間に出入せしことなしとせず、戊辰の役友人と脱走を企て、父母に痛く悟され、武州成増村に歸農せるは其第一回なり。明治三十年大池水利事件を仲裁したるとき二之宮側の爲めに竹槍にて害せられむとしたるも從容自若、遂に之を調停したるは其二なり。大正十二年九月一日の大震中上野博物館倉庫内に於て五十年史編成中將に壓死せんとしたるも辛うじて之を免れたるは其第三回なり。此三回を免かれて併かも今日に碌々たり。今悔ゆるとも將た亦及ばむ殊に官海の游泳に至りては先達の士に頼るに非らざれば、身を立て功を遂ぐる事能はざるも、余の官海に於ける先達の士は故人たるに非らざれば則ち亦志を得ざるの士なり。余や官公職を奉ずること實に五十年、一日の缺勤なく、一分の遅刻なし。郡宰在職中の如き大紛議大葛藤を和裁して永く平和の契を結ばしめしもの十ヶ所の多きを致し、又感化院其他神社佛閣及學校其外公益事業等に獻納寄附せし金額は實に莫大にして勝つて數ふべからず。殊に郡農會長囑託の如きは一任期四年間無報酬無旅費にて盡力したり。されば克く平和を保つことを得たり。該紛議大葛藤の和解の如きも、私費を以てし、大根一本たりとも受けざりき。又人間の二大癖たる煙草及酒の中、煙草は妙に性來之を喫せずと雖も、酒は壯年時代酒豪なりしが、自から感ずる所あり、今より三十六年前より之を全廢し、凡そ酒の名あるものは和洋を問はず、麥酒、葡萄酒の類も一滴だも之を口にせず。又建白癖あり、下地方長官を始め、總理大臣内務大臣文部大臣等に至るまで、上 天皇陛下にも上書せしことあり、

時に採擇せられしこともあり、明治十一年十一月 陛下靜岡縣へ御巡幸の節豫め百木太撫をして本縣下駿河國安倍志太兩郡及遠江國榛原郡の各部落人民生計困難の實況を模寫せしめ、大迫縣令を経て之を山岡侍從の手に差出し、以て 乙夜の覽に供へたり(之には説明書あり、朝露の覺第一卷中に載せたり、各上書及建白書亦同じ。) 其他は朝露の覺各冊、巡和紀行、京都巡遊紀行、遊養軒文集稿、詩稿、歌稿等に就き之を見るべし。余の性行は前述の如くにして、人知らずして慍らず、惟 天神 地祇の知るに任する而已矣。今日の記念日に方り略ぼ其の要を擧げ、以て之を子孫に報ずと云爾。其の他は依例舉行。癸亥の兩 大詔拜讀後左の二歌一詩を誦せり。

握飯梅干たべて忘れぬも此の日のみでは益少なければ 膽を嘗め薪に臥して忘れじな關東のみか日本國中

空前災後八星霜、興復功竣增國光、握飯勿忘當日慘、拜聽 明詔淚成行

同年十一月 宮内大臣より來十六日大饗第一日の儀行はせらるゝに付當日正午神奈川縣賜饗場に於て饗饌を賜る旨達せらる。感激に堪ゆるなし。

同年六月 兩陛下御發輦七日には畏くも養老の御思召を以て高齢者に 御杯及酒肴を賜はる。

忘るまじ我 大君の下されし此 賜の厚きめぐみを

又即位禮の時には

寶字無倫我 聖明、盛儀亦使外人驚、紫宸殿上新 皇勅、天地疑搖萬歲聲

の一詩を高らかに頌し奉れり。又大禮奉仕の宏より大饗に戴きたる御料理大鯛焼物、年魚焼物、寄物、筍慈姑など贈り來る。老夫婦にて誠に難有頂戴したり。代々木練兵場にて大觀兵式(十二月)横濱港外にて大觀艦式を行はれたり。盛儀實に未曾有。

無數拜觀雲不如、新皇親閱莫遠梳、艤艫中外爭連海、偶遇風波有綽餘

尙同年十月 には肥田和三郎同松子、貞子を伴ひて來泊、相遇はざること茲に五年歡待措かず。

欲駐難留忽欲歸、天公降雨宿心違、人間離合尋常事、千里相逢似鳥飛

同 四年編生 十四日 松茂庵副築記念館成る。

十勝風光不換金、松林到處 聖恩深、儉勤餘澤真無限、斯館全成忠孝心

同年四月 孔子の御祭日に當るを以て其の厚恩を謝する爲妻はま子をして草餅を製せしめ、之を大成殿に供へ後學忠一左の詩を朗吟し恭しく之を祭る。(安註。是も父が年々の行事の一なり、但しこの詩は此年の作なり)

博物館陳其釋奠、斯文會祭聖堂中、五常之教今猶昔、赫々伸人長敬崇

同年六月 自撰松茂庵十勝記へ銀屏風六曲へ草行雜りを以て辛うじて記載を了せり。

同年七月 宏勇退。

同年六月 起然勇退志高哉、多歲勤勞付點埃、尙富春秋徐可待、有時報國盡忠來

同年十月 錫歸朝に付感賞書を送る。

同年十月 錫歸朝に付感賞書を送る。

同年十月 光大病に罹り遂に歿す。父慈善心に富み、蓮月光大童子追善の爲め教育及救貧費として

金三百圓を茅ヶ崎町に義捐し、童子の衣類を貧窶に施與せり。

同 五年三月 十一日 克司法研究の爲め歐米各國に赴く。

洋行萬里試舟航、須凝深思探異鄉、凌駕幾多歐米客、明於美嶽映朝陽

同年十月 午前零時第二回國勢調査行はる。調査員過ぐる二十日該調査要目十二項につき下調査を行

ひしが、調査員は余に告ぐるに當日零時には内閣掛員特に出張して嚴密に毎戸に就き取調べらるゝ

に付何卒御注意を乞ふとの事なりき。然るに夜半何人も來調せず、其措置虚喝と謂はざるべからず。何ぞ料らむ午前九時頃該調査員海老色の同一申告書を齎らし來らんとは、余笑つて之を記交せり。

同年十月 忠一感ずる所あり、信神八幡野郷社八幡宮へ幣帛奉納肥田一族の健康を祈奉る。

同年十月 宏に寄す。

報國盡忠何止官、千般職業亦須觀、就中市制敷諭事、却有頗關斯治安。

同年十月 寶臺院に於て池蓮院様二十七年忌を施行し法要を營み、家内及妹大友けい子、長女鍊子

をして焼香せしむ。

同年三月 追憶 池蓮院大姉殿前葬儀有感歩前韻

遠近不招爲盛儀、吊人雲集互嫌遲、高僧命諡有知驗、一族顯榮蓮滿池

宏より左の書翰を送り來る。感激したり。

謹啓仕候先以て御勇健奉賀候却說過日は 池蓮院様奉獻の 御哀情御垂示を賜はり感慨無量、御孝道確かと感戴致候 昨日は特に日中の汽車を選びて下阪、静岡驛を過ぐる頃端座して跪拜、思はず左記奉獻致候 折から秋雨濺ぎかゝり、如何にも 享けて笑み給へるが如くにして暫く靈界の人と相成申候間此儀謹みて御報告申上候 せめて我業卒ゆまでと身を盡し空とも知らずみどりせしかな

我末を待ちに待たれてゆくりなく逝かれしことの今にかなしき

幾十度年は経るとも今更らに在りし日のいよゝ慕はしき哉

珍らしき女丈夫の御さがこそ嗚呼我今日の本と仰ぐも

み訓は今も忘れず護ひてうからはらから眞幸きくぞある

我誠 神に通へる秋雨の手向けの水と濺ぎかゝれる

水曜日まで當大學の爲めに講義致し、即夜歸京、木曜日には中央放送局の婦人公民講座の爲めに全國に放送の任務を果し、夜は藤伯傳記編纂事業創始の會を開き可申、金曜は専修大學に政治學の講義を致し、土曜再西下、日曜に當大學創設五十年記念事業大學術講演會に招請されて大都市問題に關する講演相濟ませ、其後又當大學の講義前記婦人講座の續講、専修大學の講義あり、藤伯傳記編纂事業も愈々多忙と可相成夫れに過般來大阪市より特別市制案起草方依囑せられ居候關係もあり、目下全く寸閑だに無く、しばらくは御膝下に奉侍するの時間なき事と被察候間恐入りたる次第には御座候得共不孝の罪御宥免被下度奉願上候、乍併勝手申條には御座候得共宏も御蔭を以て國家社會の爲めには 地方の長官たりし以上に奉仕致居候事御欣び被下度乍末兎角不順の折柄御大事に被遊候様祈願此事に御座候 敬具 大阪商大講義時間の前 宏

同年同月 池田藏六、臺灣總督府財務局長に榮任。八年前復興院創設の際、轉任の希望を懷きて余に依頼ありしに依り、宏に謀りしが、復興院は將來望みなし、若かず專賣局に勤續するの將來あるにはとの事なりしを以て切に諫めて思止せしめたるものにして今其望を貫けるものなるが干今記憶する哉否や、又藏六の名は、大人保光中々の學者にして、君出生の際は六藏と稱したるものにして其字を活用して命づけられたるもの君の名なり、藏六とは即龜の一名にして萬年の壽を保ち實に目出度、藏六の六とは頭尾兩足兩手を甲の中に藏して野干（狐）の災厄を免かれしといふ雜阿含經に在る事なり、此話は大人の生前に聽かれしことありや云々と申遣はして喜ぶ。

同年同月 中川夫妻の發起に基き忠一が昨年八十一翁に達せし高齢祝として同志胥謀り（宏、鶴、克、中川望、大森佳一、兒玉九一、永井浩、重成格、大森齡子、長壽吉、長世吉）特に書棚一架を寄贈し來る。是れ宏及民子が之を受くるは名譽なるを以て之に對し之に酬ゆるの企なかるべからずとし、受祝高齢者の書齋に掲ぐる額面の自作松詩を白縮緬に染抜き袂紗として之を贈與者各別に呈することに決し、既に其向へ注文濟みの企にて辭するに忍びず、至孝の忝なきに感泣措くこと能はざる所以なり。

同 六年一月 川島直次郎大雪を冒して年賀に來訪、年玉として名菓を贈らる。年々早朝の年賀來訪を缺きしことなし、篤志の人物なり。
同年同月 東京、志村中臺稻荷前鈴木長藏實母かな子（忠一實妹）より白餅及澤庵贈り來る。十五日たちてからをありがたき下さいと添書あり。

此婦人は戊辰の節忠一及二弟一妹と與に父母に従ひて成増村に歸農、時に年十六七、教育なく父が村夫子を爲せし時、いろはを習ひしのみにて母の農業又は仕事を助けたり。幸に嫁入の世話人あり、成増村隣下赤塚村鈴木藤左衛門方へ嫁す、其長男權十郎の妻となれるなり。専ら農業を勤め、中農にして生活上不自由なかりしも、未だ幾何ならずして舅姑に別れ、夫權十郎勤勉家に非らざるを以て身代不如意に傾きし爲め田畑を失ひ、かな子は精農なるも、一人の力能く支へ得べきに非らず遂に現時の村に移住し、小作百姓となり、幸に長藏を儲け、辛うじて農業に従事しつゝある有様其困苦は一朝一夕の故に非ず、尋常の婦人ならば疾くに離縁すべき處なるも、眞の苦勞人にて于今六十二年此家を保ちて忍耐しつゝあるは、實に世に稀なる貞婦と稱するも、亦溢美に非らざるべし。忠一の妻にま子能く之を顧み年々歳々之を慈み施與を吝まず。

同年三月 克去月廿六日歸朝に付今日來茅、相遇はざること一年に滿たずと雖も其長きこと三年の

心地せり。不取敢歸朝の祝歌詩を與へ、芽出度赤飯を 神佛様に供へ以て無恙無難の御厚禮を奉申上且之を本人にも饗せり。

同年同 宏長女説子の横濱高等女學校を卒業し、女子大學に入れるを祝す。

第一の港に高き學びやの學びの業を卒ふる譽れは
大學に通ふゆきくに不二の山仰ぎて勵め朝な夕なに

同年八月 實弟肥田和三郎遂に永眠の報に接す。痛惜不能措余會葬すべきの處、宏よりの意見に依り宏會葬すべきの處、生憎不快にて療養中に付、余の代理として錫、宏の代理として善長、親族の總代として榛村謙三をして會葬せしむ。

修醫大學副醫家、遠近如雲患者譁、六十八年如一夢、命雖難奈使人嗟

和三郎は元來蒲柳の質に付自ら其養生に勉めしも、松子(妻)の貞節と、孝子(女)の孝行に頼るに非らずんば斯く高齡を保つ能はざるなり。依て此旨を認めたる手翰を三人に持たせて松子、春充、孝子に感謝する所ありたり。

同年十月 七十九翁鈴木芳太郎大人身まかる。

一驚何料涕沾 胸、哭佛 呼神 難復逢、縱此身雖歿藤地、魂歸鄉里護天龍

同年十一月 今日より朝禮式第一の末尾並 神武天皇陛下以下歴代 天皇陛下の御厚德を謝し奉りる次に

何卒御加護に頼り滿洲事變平定の爲め派遣の皇軍の毎戦全勝を願ひ奉るを加ふ。隨て第二の朝禮式詞左の如し。

伊勢兩大神宮様、明治神宮様、富士淺間神社様、茅ヶ崎八王子神社様外日本全國神々様に對し奉り恭しく祈願し奉る、忠一謹みて 今上天皇陛下の萬壽疆りなきを祈奉り併せて 皇運の彌々隆んらんことを祈り奉り又國運の益々昌ならんことを願ひ奉り且我國滿洲事變平定の爲め上下一致舉國一體特に兵を出して我臣民を保護し及我權益を擁護するを以て不屈不撓千辛萬苦しつゝあり又我陸海軍將兵に在りては粉骨齋身しつゝあり何卒 御加護に頼り派遣 皇軍の毎戦全勝を得速に此目的を貫徹せしめられんことを千祈萬禱に堪へず謹みて申上げ奉る。

同 七年二月 依例豆撒式を行へり。

同年八月 綾部關八十五の高齡を以て永眠、詩を以て弔ふ。

教育多年達 帝宸、齡高感化啞盲仁、榮動赫々傳千古、奚翅梅花不是春。

同年同 麥畔の梅三株滿開に付家内下婢と花見を催す。東に在るは淡紅色、西に在るは白色、中間に在るは青三株とも家内の丹精に依り生長せり。今年は定めて風味佳なる梅干を得べし。

同年四月 横須賀鎮守府に於て三浦半島及湘南一帯の地に晝夜防空演習舉行の由にて燈火管制施行本宅にては午後六時前戸を閉ぢ消燈。余は寝ねず暗夜に端坐せり。

同年六月 中川望別邸落成に付四時皆佳樓記を草して祝意を表せり。

同年十月 克自營の道立ち現住宅に移轉に付祝意を表する爲め宏をして金四万正を傳達せしめしに感激し來る。

同年十一月 錫日本政府代表として國際冷凍協會第八回總會へ派遣を命ぜらる。

同年十一月 德川慶光公御成年に付祝意を表し奉りしに葵御紋付富久紗拜受。

同年十二月 徳川家達公より御結婚五十年御祝の御挨拶として御兩人様の寫眞を拜受す。
同年十二月 但馬八木藏翁永眠の報に接す。宏は直に民子と共に會葬。古稀のうへ高さも、高くなほ越えても、とせまでも重ねて欲しかりしを、惜しみても餘りあり。

德普一郷能導民、商農重務不替身、爲患長病從容歿、會葬如雲遠近人
同 八年十一月 宏より長翰を以て本籍を東京へ移轉の件相談あり直に異議なき旨申遣はす。
同年八月 大島衛生局長より錫來る二十八日横濱入港歸朝の報あり、安堵す。直に謝狀を發送し歡迎の詩歌を得て豫め貞子に遣はす。

一別經年無雁信、杞憂遺難若遇遼、祈 神願佛彌強健、忽報歸朝又有歌
朝毎に神に祈りし甲斐ありて龍田の船に乗りてかへり
同年三月 宏民子と共に臺灣に旅行したる土産物珍品携へ來り、歡談。其の中に淡水溪羅溪石大硯あり。實に得易からざるもの郷重に保存し、時々取り出して楽しむことゝす。

同年四月 三方原學園長に適地を選びて新營の工竣りたるを祝し、將來教育の功績一層期待すべきあるものあるべきを悦び、且忠一曾て學院を去りたりと雖も、未だ嘗て在學生及退學生の成業を神明に祈らざるはなきも、學園に轉じての後も亦然るべき旨を「米壽脫指三、元靜岡縣立三保學院長池田忠一」名を以て申遣はす。昨日は自治制發布記念日に付き豫て同意を與へ置きたる本籍を東京に轉歸の件實施したるに依り、錫・克共に分家各一家を創立したる旨宏より申報に接す。
同年三月 宏と中泉所在邸地の事に付き相談す。

同年五月 春過ぎて珍らしく鶯の聲を聽けり。松茂庵の松の茂りを深山とや見し。
同年九月 惟徳より武藏高等學校偵察に入舎の實況を報じ來る。依て將來を勵ます。
同年十月 左の茅ヶ崎覺を撰ぶ。東海岸中石神なる小字あり、此小字に一橋あり、之を石神橋といふ。

今回縣營にて道路及水路を改良したり、其新道（水路沿ひ）を石神小路と稱す。水路の幅は九尺にして道幅は三尺なり。而して此水路に架して松茂庵より清明莊（榎村方）及兼樂莊（錫方）に通ずる架橋を清兼橋と命じ、其松茂庵及四時皆佳樓に通ずる路を清兼小路と命ず。
同年六月 長母君（三洲先生未亡人）永眠の報に接す。人生百歳を望むと雖も其實は則相同じ、愁ふに足らざるなり、一詩を獻じて微衷を表す。

天地蕭條饑歲還、秋風春雨幾循環、人生三百六旬日、宛是齊騰夢裡山
同年六月 克來訪、久しく面せざりしが、人物學問著しく進歩、司法省中の有力者と爲りしを欣ぶ。種々と三兒の目的を聞く。
同年七月 増田次郎より長良川産鮎を贈り來る。直に七絶一詩を賦して其厚意を謝し、且此旨を宏に傳ふ。

同年八月 本日午後二時錫獨逸より購入し來れる寫眞機にて撮影。（宏註。是即本書の冠首に在る父の寫眞なり）
同年九月 善長の需に應じて其の命名の典故を書きて遣はす。左の如し。
元者善之長也、亨者嘉之會也、利者義之和也、貞者事之幹也

右善長命名之典故而出于周易文言傳

祖父忠一選并書

同年九月二日 秋季皇靈祭に付例の通先づ 宮城に對し奉りて萬歳を祝し奉り、併せて 列世 皇靈の國民愛撫の 聖徳を欽仰し奉ると共に今日は 今上陛下の特に葉山より 還幸し給ひ 皇靈殿に於て厚く 御親祭遊ばさるゝ 御孝徳の限りなき所以を感戴し奉れり。

同年十月 茅ヶ崎開町以來二十五周年記念祝賀會舉行並高齢者慰勞自治功勞者篤行者孝子節婦義僕表彰式あり、余も亦高齢の故を以て記念品を受けたるも、所勞に付き缺席、町の厚意を恭く受けたり。

同年十一月 久振にて、折柄來泊中の宜民を携へ、海岸まで散歩、大道出來、面目を一新したり。

同年十一月 汎子、靖、田鶴子の七五三を祝ふ。母子來り會す。髮に霜降る後までもと祈る。

同年十二月 本日今朝六時 皇男子御降誕あらせらる。御母子共に御安らか。皇運の益々御隆なること 皇國の爲め誠に敬賀に堪へず。

朝露の覺の後に宏泣くく註す

父の尊き朝露の覺は是にて全く餘白となれり。嗚呼。蓋し父は年々其の年の日誌を、弟克の選びて贈れる日記に、其の日其の日の覺を認め置き、一冊を埋め了りたる後ち、更に此日記を辿りて其記憶を喚起し、別に整理して仕まひ置ける關係書類、手紙類を取出し、彼此對照したる上、正傳とし



(昭和八年撮影)

生きのびし命は何か惜からむ憂世永くもいつも同じ幾
無風花自落、有樹鳥空啼 浮世真如夢 死生心不迷

と。院號は范文正公先天下之憂而憂、後天下之樂而樂に出で、居士號は二宮尊徳先生報徳訓百八字
中在十一字、不一字、從て十一在一不は即報徳訓を總括するなりとは父の諡號記に在る所なり。

(後掲選養
軒文集抜)

報	父母根元在。天地令命	子孫相續在。夫婦丹精	吾身富貴在。父母積善	身命長養在。衣食住三	田畠山林在。人民勤耕	來年衣食在。今年艱難
徳	身體根元在。父母生育	父母富貴在。祖先勤功	子孫富貴在。自己勤勞	衣食住三在。田畠山林	今年衣食在。昨年産業	年々歳々不可忘報徳
訓						

父の訃音傳はるや歳末なりしに拘はらず來弔する者多く、葬儀に參られし名士千を以て算し、郡長時代の遺徳を偲びて遙に東上せる人亦少からず、誄(詩、歌) 踵を接して至り、弔電亦山を爲せり。洵に感激に堪へざるなり(凡て別に記録を存し、厚意を) 就中父の末弟が嗣げる家の嗣子肥田春充より寄せたる弔辭は父の面影を髣髴たらしむるものあるに依り特に之を掲げて永く父の尊靈に獻せんと欲す。

肥田春充の弔辭

時維昭和九年十二月廿七日夜半寒風蕭條トシテ天憂エ地傷ムノ時、一星忽焉トシテ落チテ聲アリ。噫哲人池田忠一翁昇天セラル。翁ガ八十五年ノ生涯ハ廉潔清淨高雅精勵ノ連鎖ナリキ。其ノ官ニ在ルヤ、四十有六年間會ツテ一日ノ缺席セルコトナク、一回ノ遅刻セルコトモ無シ。四十度ノ高熱ヲ押シテ登壇シ、以テ忠實公務ニ執掌セラレタリ。八十有五歳ニシテ、病床ニ倒ル、ニ至ルマデ、毎曉旦未明ニ起キ出デテ、五個條之御誓文、戊申詔書、教育勅語等ヲ謹誦シ、皇城ヲ遙拜スルコト、數十年間一貫繼續シテ會テ怠リシコトナシ。夜、寢ニ就クヤ、必ズ北ニ枕セラル、蓋シ 皇居、北ニ位スルガ故ナリ。其ノ謹嚴ナル 尊皇ノ大精神ハ、人ヲシテ覺ヘズ肅然トシテ襟ヲ正サシムルモノアリ。聞ク、翁會テ靜岡縣下ニ在ツテ某郡ノ郡長タリ。時ニ偶々某地方ニ於テ難解ノ紛糾事件起リ、近在ノ有力者、八方ニ奔走調停ニ努メタルモ、悉ク徒爾ニ歸シタルノ際、翁ハ自ラ其ノ地ニ赴キテ、懇々トシテ訓諭教示スルコト實ニ三晝夜、終ニ其ノ容ル、處トナラズ。止ムナク決裂ノマ、立ツテ歸途ニ就カムトシ、代表者等ヲ顧ミテ、撫然トシテ告ゲテ曰ク「本件ノ解決セザルハ郡長タル予ガ不徳ノ致ス所ナリ。歸ツテ直ニ辭表ヲ提出センノミ」ト。代表者等、翁ガ此ノ至情ニ良心ヲ撲タレテ、暫ク言無カリシモ、ヤガテ一同翁ガ袂ヲ控ヘテ言ヲ揃ヘテ曰ク「暫ク待タレヨ。我等皆ナ過テリ。希クバ無條件ヲ以テ貴官ニ一任セム」ト。多年ノ難案、一舉ニシテ解決シ去レリ。翁ノ生涯ハ斯ノ如キノ逸事美談ヲ以テ滿タサル。茲ニ舉グル所ハ其ノ事例ノ一タルニ過ギズ。其ノ態常ニ端然、其ノ容常ニ靄然、翁ニ接スル者、男トナク女トナク老トナク若トナク、等シク皆ナ生佛ト稱ス。蓋シ至適ノ言ト云フベキ也。翁ハ漢學ノ造詣極メテ深ク、兼ネテ又詩ヲ良クス感興至ルコトアレバ筆ヲ呵シテ雄篇立所ニ成ル。偶々字句ニ就テ教ヲ乞ヘバ一々其ノ典據ヲ明ニシ、考證微ニ入り細ヲ穿チ、人ヲシテ驚愕讚歎措ク能ハザラシムルモノアリ。翁ガ性格ハ漢學ノ莊重典雅ナルヲ愛好セラレ、漢學ノ養ハ又以テ

翁ノ性格ヲシテ、益々清眞至純ナルヲ致サシメ、兩々相待ツテ翁ノ風格ヲ作セリト云フベキカ。此ノ父ニシテ此ノ子アリ。子女皆ナ各々其ノ道ニ於テ頭角ヲ擡デ以テ君國ノ爲メニ偉大ナル貢獻ヲナシツ、アリ、翁又安ジテ瞑セラルベキナリ。

嗚呼翁不幸ニシテ米壽ノ喜ヲ伸ブルニ至ラズシテ逝カレタリト雖モ、清操明節ハ永クアベルノ血ノ如クニ物言ヒ長シヘニ天地ノ間ニ在ツテ、凜乎トシテ華倫ヲ敍ス。古詩ニ云フ。朝榮聲利以テ苟モ屈スベカラズ。青雲白雪、深趣アルニアラザルヨリハ、其ノ意肆兀、何ニ由ツテカ降ラム、丈夫ノ壯節、君ニ似タルハ少シト、信ナル哉、言ヤ、引ヒテ以テ翁ガ清節ノ讚辭トナスニ足ルベシ。嗚呼、我レ説カント欲スルモ、安ソ得ンヤ巨筆長杠ノ如キヲ。不肖春充、謹ンデ白ス。英靈希クバ來リ享ケラレンコトヲ

尙中陰長子善長が祖父の御靈に捧げたる一文は、朝露の覺の補遺とも見るべきものなれば、特に之を左に録して、跋と爲さんと欲す。

御靈に捧ぐ

善長

一遺志

人の眞の意味における生誕は、心の底に或る嚴肅にして侵す可からざる而かも豫期せざる或物を感じる境地に入れる其時である」と私は信ずる。死が嚴肅神聖にして邪俗を解脱し淨土に精進する事即ち物質生活より精神生活への轉向を意味する限り死は此眞の意味における生誕と一致する。私は祖父の死を斯く考へ祖父の死に層倍の意義を見出さねばならぬ。

願ふに祖父の八十有五年にわたる全生涯は不斷の眞摯にして敬虔に而かも感恩に満ちあふれたる生活態度を以て至誠一貫せられたるが如くである。斯くして修練されたる全人格は死によつて解體せられたに非ずして此生活態度の故にこそ今新たに生誕せられ、斯くして生前覺得せられた諸々の徳は子々孫々の生活態度の規範となり祖父生誕を更に意義づけ其眞意の具現せられんとして居るのである。

之は私が祖父の死に直面せる時、祖父を看とりつゝ、神々しき此全人格より感得せる唯一の感銘である。そして之こそ現世に残し給へる無二の私への生ける遺志であると信じて居る。

二葬送の感

「若し夫れ幽明界を分つは會する者の必ず難るゝ如く人の世の宿命にして不可避の事とせば此事敢えて悲しむまい」とは祖父の病篤として北海道の學舎にある私に父の知らせ給へる書面を手にする瞬間の感である。之は私自身が或特別の環境に刺戟せられた際死といふ事に就て眞面目に深く考へた結果、生死に對する強い信念を把み得て居るといふ經驗からでもあらう。然るに嚴肅なる死に面し而かも今既に現實として死を否定し得ぬに至れる時、此の私の「敢えて悲しむまい」といふ決意もいつか人知れず拭はねばならぬ涙となつて居る。

私は祖父の死を限りなく悲しみ其處に盡きぬ落寞を感じる事切である。併し私は此事によつて更に深く祖父の全人格に觸れ自己今後の生活規範を求め得た事を此上なく歡び、此上なき感謝を捧げねばならぬ。

之は祖父の御靈を奉送するの日に心私かに私の思へる一節である。

三追想

私が祖父を自己の精神生活の中にとり入れようと努力しはじめたのは中學を卒業してからの事であるが驢げながら意識の中に祖父の姿を描き得るのは丁度今から二十年程前の事である。此時代の事から思ひ出づる儘に過ぎにし記憶の跡を辿り御生前の徳を偲びつゝ、面影を追想しよう。

今思へば祖父が三保に既に晩年時代を送られる頃は私は小学校へ入學する前の臍白小僧であつた。學校へ入學する様になつてからも休暇毎に屢々三保に遊ぶ事を例として居た私ではあつたが此時代の祖父に就ては私が餘りに幼少であつたゝめか多くの印象を見出す事が出来ない。併し子供心にも深く目に映じて居る事は毎朝朝禮式に紋付を召されて出かけられる謹嚴な後姿とその反面には時折私を膝の上のせては頼づりされる様な人間味にあふれた一面さへも持たれた祖父の姿である。

其後三保から東京に移られた祖父は小学校卒業間近になつた私をよく伴つて養鶴外先生や勝海舟先生の墓參を遊ばされ其人の偉業に就て道々私に語られた。其途次道路に紙屑や煙草の吸殻が散亂されてあると夫れを一つ／＼拾つては袂に入れて家に持歸つて

處分されて居たのを記憶する。之は祖父が公德の重んずべきを自らの實行によつて私の幼い心に植えつけようと試みられたものであらう。其他此時代の祖父は折にふれては道德の何たるかを教へ或は節儉の要を説き研學の道を諭されるに常に何等かの自身の具體的行動を以て示され私の修養を常に念願せられて居たが如くである。

爾來京都横濱と常に膝下に暮したのであるが最近即ち茅ヶ崎松茂庵に於て餘生を樂しむの境地に入り給へる頃の祖父に就て私の心に映じた事共を此處に想ひ起さう。此時代は凡ゆる精神的修練を経て完成された修身徳行の士たるの風格を不讓具現され常に國家の安泰を祈る愛國の志士としての一面さへも窺はれ日常は只管文筆に精進遊ばされた。慙ふした事は當時北海道に遊學中の私に宛てられた詩歌の中によく現はれて居る。

光大の亡くなりたるは國の損四名局めて補ふてくれ

之は昭和四年七月亡弟光大の早逝に就て残れる四人即ち善長庸徳惟徳充之に對して述べられた祖父の心からの希望である。

又私が昭和九年三月大學を卒へ更に研究室に勤務致すに就ては

大學を終へしはよきも尙ほきはめ大家となりて國に盡せよ

と詠み給へるを以てするもよく祖父の心境を察し得よう。祖父は平生富士山を殊の外愛でられ常に此山に事寄せては詩歌を以て教訓を垂れ給ふた。即ち昭和五年冬私が豫科より大學への入學準備をなし居る際には

大學の富士に登るは支度あり支度は豫科で人にゆづるな

此の心いづも忘れず勵みなば大成功は疑ひぞなき

昭和六年四月大學へ入學叶ひし折も「寄不二山祝」として私に次の歌を贈られた。

此の山にこゆる山なき人も亦人にゆづらぬわざを成してぞ

斯く祖父が常に私に對してこよなき御心も私の成人を樂しみ願はれたにも拘らず私自身何事も報ゆる事なき中に長逝せられた事を深く、憾み自らの不敏を慚ぢる。大學卒業後の私に對しては毎朝特に「日本國ノ九神一佛へ内願」と題して次の如く祈願せられたのである。私は之を此處に摘記して私自身の謝恩の報と致し度い。

「日本國ノ九神一佛へ内願」概要

善長ノ益々健康ニシテ依然北海道帝國大學農學部ニ於テ該學術ノ蘊奥ヲ究メ生徒ヲ教ヘ導テ大家ニ入り君國ニ盡瘁スベク覺悟ニ

付キ何卒御加護ニ頼リソノ目的ヲ貫徹セシメラレンコトヲ切ニ願ヒ奉リマス 恐惶謹言頓首頓首

祖父御自身餘生の内的生活は既に超然解脱の域に達し一途に敬神念佛を事とせられ御辭世に拜する如く「死生心不迷」の境地を自ら拓き自若然たるものであつた。私は祖父に就て多くの逸話、御病中の感激すべき御動靜をよく知つて居る、併し徒らに述べる事は御意に反せざるやを懼れ此處には主として私の最も感謝しつゝ心に銘せる二、三の點を追想し在りし日の御面影を靜かに思ひ浮べるに止めよう。

最後に、俗世より淨土に生誕遊ばされた祖父の御旅安かれと心して祈り奉る。

敬 親 碑

父君忠一幼修儒學尤好詩書遵養甚勩
能辨大義爲池田氏中興之祖清嚴絕倫
不私分陰執正履義憂國慨世常如在危
獻策進言不憚權威持身恭儉待人寬厚
處事公忠頗弘化理奉牧民官職三十年
獎學勸業猶親子到處治績徧德譽湛潛
心于感化教育又十年過古稀而退最重
報德以朝禮朝拜爲日課八十有五年遂
不貽悔吝容與兮全天壽矣其辭世云
無風花自落有樹鳥空啼浮世眞如夢
死生心不迷

「昭和十年四月百日忌長子宏謹撰」

宏註。一五丁建議書中

上款トハ縣令參事處分案ヲ立テ主務ノ省ニ稟議シ許可ノ後施行スベキモノニシテ其事項下ノ如シ(一)部内郡村ノ制置經界ノ釐正
 (二)部内地ノ相互更替(三)租稅章程ノ増減變更(四)賦役章程ノ立及變更(五)凶年饑歲除租減稅(六)新墾地ノ檢定石高ノ
 探定租稅規則ノ設立(七)中小學校ノ事(八)較以上刑罪人ノ處置(九)社寺ノ廢立又ハ其例規ノ變更(一〇)驛遞道路從來ノ方
 法ノ變更又ハ郵便規則ノ設立(一一)新港ノ開疏又ハ新河ノ決(一二)堤防橋梁ノ修築又ハ官舍ノ營繕(一三)草萊荒蕪ノ開墾
 (一四)河流溝渠ノ填闕浚疏(一五)港澳ノ修理(一六)地方警邏規則ノ設定變更(一七)濟貧恤窮方法ノ設定(一八)節義篤行
 褒賞(一九)工藝ヲ開キ工場ヲ興ス事(二〇)新發明品專賣ノ允許(二一)洋行願ノ許可(二二)諸會社ノ許可(二三)官林伐
 木(二四)諸礦礦願ノ許可(二五)牧場ノ開設(二六)定額ナキ諸費ノ支給(二七)圖書開板(二八)外國人ノ傭使(二九)内國
 債消却方法(三〇)外國債(三一)奏任以上官員ノ黜陟

下款トハ縣令參事專決處分ノ後其旨趣ヲ主務ノ省ニ達スルヲ要スルモノニシテ其事項下ノ如シ(一)戶籍編成ノ方法ニ依ル戶口ノ
 總計(二)定額アル租稅及運上冥加金等ノ收納(三)定額内出納(四)定額アル救助(五)徒流以下輕罪ノ事(六)市街村落警備
 (七)諸省公用土地ノ撰付(八)犯罪人ノ逮捕(九)植物及製造品等民ノ願ニ依テ準許スルコト(一〇)倒木枯木等ノ伐拂(一一)
 荆榛山野栽植(一二)水陸運輸ノ爲舟船車馬ノ願指令(一三)諸礦礦試驗評決(一四)官祿旅費士族卒及社寺秩祿其他常額アル公
 費制限ニ從フ支給(一五)判任以下人員ノ決定(一六)判任已下ノ黜陟

遵養軒詩集抄

宏註。遵養軒詩集二卷あり、父の詩は詩集の外に、北游帖、巡和紀行、京都巡遊紀行中に載録せられたるもの多し。日誌及朝露の覺中にも諸所に散見す。此詩集抄は遵養軒詩集より抄出せるものに、右の紀行類朝露の覺等に散見するものを組み合せ大體年譜に依り時代別に編纂したるものなり。

不神
某祝此の社にまゐる女も重なり
は典の院に事

在指名有列廟堂佐之須祐國
家光は典の院に事傳ふ業ふ殿能
是之職不揚

九
上院 忠一



一 北遊途上

(朝露之覺 第三、七丁)

○渡名取川

溶々名取水、赫々源將功、憶昔東征日、智略一何雄、流水無晝夜、功名傳無窮、公自無耻水、水自無耻公、極目三千里、悲風吹篷窻、男兒不取名、莫復渡此江。

○過高館拜源義經像有感

維歲辛未九月秋、適經陸中故跡求、行到高館問頻々、土人指膺衣川頭、川頭尋來時彷徨、古廟幽鬱倚山丘、拜之忽懷治承際、空弔英魂不暫休、君不聞平氏逆賊恣鼠偷、幽上皇偏三帝勢傾王侯、又不聞君家兄弟棲姪島、臥薪嘗膽思報讎、一朝鎌倉奮戈起、八州豪傑盡連謀、此時佐兄勤壇浦、天子聞是寵命優、奈何功成被人嫉、間關流離赴與州、衣川之戰何酷暴、此舉長爲千載謬、想見姪島之厄會稽伴、右府之猜勾踐儔、君智勇亦是招禍、何早不伴五湖舟、弔畢惆悵當回眼、金山謂金山欲沈謂越山倚山謂越山浮、紅葉染血亂峯赤、蒼鷹蹴波白日幽、遊子誰不弔君跡、每弔感淚與衣川空自流。

○弘前客中詠懷自嘲

此身飄泊陸奧國、冬來阻雪絕鄉翰、故園遙望路杳々、夜寒燈暗百感攢、褐衣捫虱且談務、髀肉瘦盡猶跨鞍、豪氣曾吞五大陸、雄心真欲壓三韓、刮磨日月學自進、看破前日疎闊頑、呵々自嘲既往事、緜來西史背霑汗。

○壬申詠新曆明治五年

四荒今日奉正朔、巷闕無人作偶談、東野放牛桃景爛、角隣晒矛麥秋酣、吹笛豈有中山恨、嚼雪誰懷會稽慚、新曆元同去年曆、治平獨唱北山三。

○月下梅

鐵骨冰姿太瘦生、清宵寒月轉惱情、半窻描出疎々影、人在香雲堆裡行。

○偶感

感慨豈堪聞世譁、好當從此學桑麻、笑吾故態終無已、時復拍案論國家。

○秋日郊行

籬邊停杖弄晴光、過雁紅楓兩斷腸、獨有黃花保清操、昂然含笑傲風霜。

○記感二首

昔日講論多不是、浮石碌々頻躬耻、試臨實際竭吾材、始悟讀書々外理。

誰是誰非元甚邈、是非何顧他人營、從來成否關是非、否便作非成便是。

○留別弘前人士

我今從斯歸故山、莫言天外別離難、火輪電信開應近、千里相逢頃刻間。

二 歸鄉待時

(朝露之覺
第三、七丁)

○壬申歲晚書懷

歲月忽々逝將盡、平生豪氣未曾衰、窮應益患國家事、遠今能思草莽時、屋後梅因無雪早、籬邊菊用

少霜遲、閑來既往多兒戲、獨對寒燈涕若絲。

○興津途上所見

田子浦連三保灣、灣中風色似仙寰、超然自脫塵紛外、飽賞扶桑第一山。

○望富嶽

推窻中夜觀天象、萬里雲晴無點埃、寒月照明峯頂雪、恍疑仙客送吾來。

○追悼弟善作

憶汝辭家赴上毛、實在明治癸酉歲、何圖一去遂不回、忽々又爲一年祭、短命古來非可歎、可歎唯志未成斃、朝聞夕死聖所云、既孝既悌何恨逝、臨祭細數生前事、言容優然猶在世。

○雨雪憶曾遊于弘前

駿陽春暖梅方綻、何料今朝霰拍簾、憶起曾爲弘城客、雪埋家屋犬呼簷。

○題菊池武時射神龜圖

精忠貫日何畏死、底事祠前馬不前、直挽鳴弦罵奴輩、誰門門外氣衝天。

○虞蘭

豪傑由來生五洲、虞蘭材略無匹儔、身曾平定墨西哥、全地球中推第一。

○癸酉歲晚書懷

明治六年

人無人不死、國無國不亡、死亡尋常事、畢竟何是傷、國當以道滅、人當以道僵、國人以道立、勿論弱與強、見說戊辰際、王師定四方、治化被遠近、今日尙小康、官雖廢門閥、請謁尙橫行、學雖酌歐

米、沈溺非取長、西門接韓城、北門偏魯疆、危殆蹈虎尾、精神却不量、嗟吾今布衣、本無緣救匡、一旦若有急、直欲以身當、丈夫功名志、豈安死故鄉。（宏註。父爲客於東京）

○養正氣

丈夫應百折愈雄、勿做女兒多痛恫、我自從曾養正氣、每逢一厄悅無窮。

○雜感

喜余生大有爲時、得失誹譽不足悲、衝破愁城何用酒、泄排幽悶只須詩、功名千載元希願、富貴一朝非宿思、屈辱休嗤竟難雪、古來事業掄棺知。

三仕官閑邪

（朝露之覺第四、八丁）

○丙子元旦

明治九年

北魯西韓未得寧、悠然迎歲賀寒廳、幸因身免紛塵累、閑折梅花插膽瓶。

○失題

人如山水形千態、山水兼人一例看、借問詩曹探得否、無名處却有雄觀。

○晚春山村雜興

夜來風雨花都謝、獨步長堤心忽驚、春老山家晝森寂、野雉求友一聲鳴。

○梅雨過宍原驛

隸之庵原郡甲州道也

鶯衣編傘沿長堤、煙雨空濛晝日冥、孤客寥寥宍原驛、滿山新綠杜鵑啼。

○巡村偶作

枯枝芒鞋好、穿雪又蹈霞、僻村探討徧、半月不居家。

○躑躅植松嶺

屬駿之志太郡

山岳重々晝猶暗、南風吹送摘茶歌、杜鵑不解愁人至、雨裡聲々啼血過。

○春夜圍棋

棋敵欲尋前日盟、突然來訪對楸枰、香殘花甕篆煙遠、湯沸茶鑪蟹眼生、夜短誰知失鐘漏、坐長方覺較輸贏、中原逐鹿落何手、笑闕家庭小戰爭。

○自警以詖官人

大智平生蟄若龍、無事潛匿寂無蹤、一朝被雲雨喚起、何異平生臥淵中、憶昔太公拜將日、不換渭濱一釣翁、憶昔武侯拜相日、不換南陽一耕農、絕世智負絕世任、始克得立絕世功、滅殷興漢無德色、從容如常愈謙恭、笑他世上小智輩、博小官如登王公、每經一官智愈下、財立小功謾自崇。

○寶臺院小寓雜感

周歲索居蕭寺裡、閑來散步滌襟煩、官卑有事不如意、時治無功可報恩、一枕松風牽醉夢、半窻蕉雨惱詩魂、還披青史喟然嘆、今古英雄老筆門。

○溪邊煮茶

溪邊來避暑、閑話汲泉烹、因欲全詩約、不圖違酒盟、茶鑪風忽起、澗石雨方傾、半日清遊樂、利名鴻羽輕。

○送今井信郎從軍于西南役

西海大魚威勢猛、黑波蹴天恣驕逞、從軍將士出諸州、威勢日縮勢不永、歡君特抱撥亂材、何須徵募與上請、眼光閃々風姿嚴、叱咤直靡幾賊盾、料知千軍萬馬間、從容若蹈無人境、他時名遂功成後、如愚泉下燒新筭。(後田如 愚泉記)

○村居

門巷晝沈々、村居沿水滸、鶻類蝸獨弔、花落蝶空尋、野渡無人渡、孤舟似我心、賴離羈絆厄、坐愛綠苔深。

○明治十一年十一月 天皇陛下駐蹕于靜岡時動行在所宿衛偶作

宿衛不厭冬夜永、微臣何料拜 龍顏、北山經盡又東海、玉輦巡窮幾險難、雨滴 行宮四隣靜、風搖旭旆萬家歡、天恩無限及枯骨、偏照通宵 御夢寒。

○同巡幸之時 和吉岡星秋判官上行在所詩韻

去年鷹島起風波、今歲誰唱太平歌、國帑空竭兵力弱、政法朝令暮改多、回首千島樺太約、還爲日域縮關河、臺蕃一戰纔逞志、支國動靜近如何、維新功臣多失處、國步艱難何由禦、英商貪黷甚於狼、魯兵猛悍勝于虎、廟堂紳士 日苟安、何早不及國會舉、政府之賢明有限、何若無限衆力補、小官竊任國會事、遵養不泄平生志、政府不與當迫取、繙來西史潛血淚。(參照朝露之覺八丁)

○奉送 御輦於函嶺 途上雨中寒甚凄然有作

函關冒雨隨供奉、馬語荒寥冷殺人、鄙體慣寒々透骨、御身何況九重身。

○和平山機陽(省齋)詩韻以賀出島竹齋有渡郡小鹿村人志氣脫凡俗爲人所長敬

聖帝忘尊常恭謙、每遭名士 輒掀簾、爲歡翁志達 天聽、殊拜 龍顏賜素縑。

○開田島訥歸駿喜而賦

回憶分袂辛未秋、君遊東京我北遊、默數六年絕會面、何圖復遇駿河州、々中不似曩時盛、兩舟(海舟)達斯無卓行、唯有一二友堪談、定聞君歸相共慶、別時不約容易逢、丹心誓欲奏偉功、豈知蹭蹬不稱世、身爲轉蓬嘆衰窮、行藏有命何可常、古來丈夫幾斷腸、丈夫畢竟不求納、不求納處竟難合。

○送友之東京

多年輔仁芙蓉下、何料自此唱陽關、君去京華我斯國、離愁逢春情般々、碧海波靜清見鴻、石磴雪消箱根山、多少春光無限景、總落朝昏行李間、却恨吾身化富嶽、不得日夕對君顏。

○志太郡伊久美途上

涉水攀山前路迤、芒鞋枯杖不須輿、村家宛似圍棋始、散布四方無定居。

○城腰客舍苦熱

城腰地偏促、客舍炎蒸酷、樓狹風難通、雲遙雨不沃、燒灣(燒津)漁火紅、當嶺松林綠、因臥對羈窓、時々費眺矚。

○河岸紫藤花

千朵藤花幾岸隈、紫雲披靡任風來、不須棚架被人養、野性依然隨意開。

○山間踽踽

四帶命滯京 (朝露之覺 第四、一二丁)

○亡父一年祭即恭賦此以弔靈魂

生一覆育益深厚、追慕一年加一年、況是秋風燕歸節、又逢白露雁來天、眠醒客舍寂寥處、夢遶墓門蕭索邊、隔地心情誰得識、西望富嶽淚潸然。

○途上遶近河目俊宗于番町、先是一夕相與論國事、論不相合、別者殆十年、因互謝其疎隔且賀其健康、自此來往親善倍舊、偶賦七律一篇以寄

往事回頭夢又狂、睽離荏苒幾星霜、十年不遇謝疎絕、一笑相逢賀健康、燭淚隨懷友情落、酒香兼話舊談芳、世間朋之君思我、々亦思君不肯忘。

○送石黒大書記官轉任于內務少書記官

多年參翼有輝光、誰料忽々去靜岡、氣舶應歎缺機關、高宮却恨失門牆、恩深春塢綠茶麥、德厚秋郊肥馬羊、思慕從今俱各願、莫看此地做他鄉。

○送同人轉任于福井縣令

駿陽遺績霽嘉聲、拔擢新任福井城、勸課必須君老練、教撫應贊國開明、恩敷 皇澤未沾土、政及朝威化外氓、顯貴常情誰不羨、人間爲令有餘榮。

新任元知任不輕、二州施治奈權衡、期君開鑿在方寸、善使木芽山境平。

○明治十四年五月八日謁長瀧先生墓 (朝露之覺 第三、六丁)

若越二州以木芽嶺爲境風土人情各相異三四故及之

一縷香煙一片心、無端灑淚慕容音、掃墳休掃莓苔綠、苔與師恩日々深。

○逢宮內某又忽別有賦此以寄。

聞名尋未遑、忽過是他鄉、話熟相逢晚、交生恨別長、導民基愛國、護士在尊王、分袂何時見、銘肝矢不忘。

○亡父三年祭

獨滯 皇都難得旋、隔離休語既三年、夢魂不厭函關險、夜々歸來遶墓邊。

○王子瀧野川觀楓

寒山古寺夕陽亭、々枕溪流靜可聽、楓葉滿林霜似酒、西峰如醉北峰醒。

○雪中作

豈料今朝雪滿天、京城數里絕人烟、卜知前夜夢醒後、風霰憂過窻竹邊。

○送友人歸縣

一夜輕風醫病草、皇城春色十分生、羨君從此歸看好、三保桃花建穗櫻。

○客居卽事

日長客散漸黃昏、一盞微醺亦國恩、貧好可堅心白屋、富嫌欲售媚朱門、牡丹花大元無實、芍藥香輕還有根、白笑濃身如杜宇、聲々底來向人喧。

○綾瀨川舟行

村居一醉足消愁、吟步辭車又儼舟、長命寺邊暮鐘裡、絃聲湧八百松樓。

〇櫻 兮 歌

櫻兮々皇國第一花、就中芳野與畧陀、連山數里婉美女、長江一帶麗彩霞、櫻兮々花輕薄、忽被風開忽被風落、々日復無昨日容、無情惱殺幾多客、櫻兮々世間似汝、空負虛榮向誰誇、媚風諂雨太污節、不若寒梅衝雪華。

〇客 中 梅 雨

燈下讀書々幾行、更深雨暗客愁長、周時勤儉漸衰委、晉代豪奢自盛昌、杜宇叫天々未答、陰雲蔽日々無光、誰能隻手廓清者、不在朱門在白鄉。

〇東京客舍苦熱

溽暑如油苦此生、高樓醉臥夢難成、炎威底事轉專橫、天氣何爲倏雨晴、螢火光流半宵景、牽牛花傲一朝榮、他時獨待風霜烈、閑聽孤松葉上聲。

〇西ヶ 原 途 上

數里郊原蕪菜連、秋光滿眼望無邊、晴空一碧黑雲起、知是王村抄紙煙。筑嶺光山望不凡、橫林缺處認孤帆、爭來遠樹看難判、漸近非松便是杉。

〇觀龜戸臥龍梅

縞袂相逢共不言、幽香自占別乾坤、節高漸受溫風澤、心潔嫌沾膏雨恩、伴柳伍桃真可笑、凌霜冒雪始知尊、蟠蜿宛似臥龍態、好使騷人三顧園。

〇菅 相 祠

遺動千載垂、赫々尙存祠、梅子寒勞節、藤花紫綬姿、鼓橋依舊險、華表至今欹、賽罷人歸去、鯉魚紅滿池。

〇失 題

讀書窮道味、意倦買微醺、笑者任其笑、行藏附白雲。

〇雨中別城島古狂歷游支那頗有文字

八百松樓飛羽觴、飲酣慷慨是同狂、俱逢只恨俱交短、相憶莫嗟相別長、淺草暮鐘烟外落、深川歸艇雨中藏、江山無限助豪興、且況紅裙來侍傍。

〇雨中踰函嶺

酒薄今朝尙宿醺、藍輿札々度烟雲、山深夏日似春晚、鶯語鶉聲處々聞。山秀水清望不群、途逢煙雨亦堪欣、藍輿停得最高處、萬頃鏡湖渾似雲。

〇營了亡父墓表有作

落葉隨流水、蕭々往年空、年々懷益切、夜々夢難通、墓表聊追遠、庶羞也慎終、厚恩回首數、天地本無窮。

〇送磯部物外平山陳平之兄也爲靜岡縣會議長頗有氣概被徵外務省于東京

外交多事拔尤急、忽自禁城宣旨傳、爲賀 聖明人盡取、却怨教野莫遺賢。

〇壬午明治十五年元旦

曉色催春旭旆揚、閑正衣帶拜 天皇、東風依例無深淺、先自京城到草堂。

五 歸縣之後

(朝露之覺第四、一三丁裏
第五、一五丁裏以下)

○隨辻文部大書記官泛舟于濱名湖

山低湖濶舟行穩、滿眼風光畫不成、沿岸村家鷄犬靜、空聽水鳥隔烟鳴。

○探梅

幽討何妨行路遠、細溪曲々嶺重々、梅花自有勝卿相、高士山中還枉筇。

○上毛途上

指顧桑原綠映顏、三峯鼎立上毛間、赤城容婉榛名瘦、奇骨驚人是妙山。

○送大迫前縣令迎奈其原新縣令

君不見治民如治河、順其性治逆之亂、又不見治國似治水、順其理治逆之濫、大迫君來臨我縣、實在明治甲戌年、十年圖治無倦怠、治績歷々總堪傳、擊嶺截河運輸便、勸學勵農風俗美、愛民如子報國忠、三州草木仁風靡、施治畢竟知順逆、善治果能達天關、三州老幼爭歎惜、無奈榮遷難留轅、大迫君去奈其原君繼、君亦會疏猪苗代、曠原千里爲其田、英名早已溢宇內、疏水定熟治民方、三州地盤數百里、天龍富士水勢惡、嗚呼治民亦奚異治水。

○送奈其原縣令轉任于工部省

偉業頻々隨處起、奈何忽去向京城、蓮峯亦惜君離別、故放雲烟不肯晴。

六 忙裡間優

(朝露之覺第五、七丁以下)

○新豐院即事

在向笠村、爲說論社山疏水工事
不服淹留此寺旬日竟達其目的矣

消暑何圖山寺邊、寺清山靜聒寒泉、斯身宛好毀譽外、襯水蜻蜓浴水蓮。

○二俣懷古

桑滄一變欲言誰、驛馬秋風人易衰、空弔寒山黃葉寺、古城落日暮鴉悲。

○登久能山

白沙連海濤、懸壁覺雄豪、欽仰千秋下、德威山嶽高。

○丁亥元旦明治二十年六言

花枝亦荷國恩、升綠梅芳松繁、共賀前途漸近、廿三年別乾坤。

○亡友高橋淑道廿年祭祭賦此以供靈前

自愧廿年如一夢、瓦全今日祭君魂、杜鵑何意啼東去、烟雨空濛安塚村。

高橋氏戊辰之難
死于野州安塚村

○丁亥除夜六言

門外常無請謁、歲除閑養木訥、儂心宛似梅花、獨立清宵寒月。

○恭拜謁德川從一位從三位兩公且賜酒肴感喜無極即咏

遺臣列末班、咫尺拜溫顏、何料今桑海、恩波溢酒間。

○和勝伯奉山岡子爵靈前詩歌以悼遠逝

天何早奪君、痛惜不堪聞、却仰千秋下、遺動高若雲。

○雨中訪巖水寺在濱名郡

烟霞痼疾風流癖、幽訪何妨山路遙、簷笠敲門岩水寺、暮鐘花外雨蕭々。

○二俣清瀧寺

衆心相合且圖營、遺德千秋功忽成、惆悵古城々畔寺、紅楓落日滿墳塋。

○祝憲法發布

皇統連綿尊益榮、休言海外傲文明、憲章發布紀元節、都鄙齊呼萬歲聲。

○追悼關口知事遠逝名隆正當時合安場愛知縣知事
榮原千葉縣知事稱日本三知事

元期漸次平瘴近、來訪何圖接訃音、哭地泣天呼不起、三州草木惹愁深。

○庚寅歲旦明治二十三年

赫々憲章天地新、回頭政海事皆陳、風流未爲塵氛滅、閑插梅花弄首春。

○夜讀各大臣內閣官制改定上奏書而寓感

西苑官梅失根本、前枝後幹弱堪憐、誰知村遠山深處、獨枕青松高士眠。

○館山寺矚目在濱名湖邊

健討領來風物權、誰妨身在白雲巔、一望湖面明於鏡、照見森羅萬象妍。

○聞官制改正有所感明治二十三年

自笑疎狂志未成、空棲草舍養丹誠、却歡鷄口告晨好、不乞一朝牛後榮。

○讀書偶作

事務繁如春草繁、隨生隨刈不憂煩、胸中還有持餘裕、閑活燈花讀魯論。

○辛卯元旦明治二十四年

冷飲三杯酒、草堂春色加、揮毫喜香迸、歲旦賦梅花。

○步永峯舟所寄詩韻以酬之

窮達任天何足問、只從其道不偷安、漸知身在烈風裡、世路難於山路難。

○寶綿引秦水戶人所寄詩韻以酬之

燕雨鷗風往事悠、十年如夢獨回頭、羨君嘉遯官途險、秃筆一枝千里遊。

○家嚴十三年祭恭賦此以供墓前

十有三年如一夢、偏驚世事易蹉跎、墓前空澗舊時淚、奈此慈恩高大何。

○告文學士山田一郎所寄詩韻以酬之

山川草木爲君愁、報國雄心未暫休、鴻鴈聲高空破夢、芙蓉容瘦不勝秋、淺深政海誰能渡、冷熱人情

詎足尤、滿腹文章椽大筆、山川草木爲君愁。

○拜林鶴梁先生靈位

猶見先生治法存、斯文斯業兩相尊、社會今日有餘澤、々自人民及子孫。

○辛卯歲晚

毀譽如一夢、詩酒伴寒燈、謬幸誰甘受、虛榮詎足矜、人情蹈白露、世態涉春冰、堪笑塵囂事、祇應

醉枕肱。

○二侯町長田代嘉平次辭職頌德會即吟
歡君辭職德愈顯、可見千秋一寶瓶、請看插來花萬朵、德馨不是止花馨。

○壬辰元旦明治二十五年
新年上話頭、舊臘傳 嚴詔、梅與我同憂、開春花未笑。

○送鈴木七二郎榮遷豆州

離別尋常何足嗟、豆陽風物亦堪誇、知君志不在山水、好勸學農酬國家。

○過瀨尻金原明善山林即賦此以寄翁

忠節由來與時異、馬前何必致其身、御林翁植滿山樹、亦是勤王愛國人。

○遊醫王寺

脫却世間名利心、又遊塵外古禪林、品書評畫風流事、半日清閒價萬金。

○修禪寺疑雨來館迎母

飄然身寄修禪寺、一浴試來功利輕、半夜水聲疑是雨、知斯館不負斯名。

○壬辰歲晚

世上虛榮不欲貪、一杯新酒菜根甘、冷官酷似寒梅樹、空吐清香人未探。

○癸巳歲旦明治二十六年

屠蘇酌罷醉顏新、亦趁千門賀歲人、一事無成空自愧、遠陽天地十迎春。

○賀寺田彥太郎賜藍綬褒章福田人企海岸砂防堤竟成功

盡心公益幾星霜、百折無撓老益剛、天賜恩褒是何物、粲然藍綬綰銀章。

○春日偶感

自笑疎狂不計身、丹心一片在君民、休將得失評人事、花落花開幾百春。

○寄山林家和田佐太夫龍山村人

鬱蔥園翠方千里、沿岸之山價萬金、輪伐補栽休濫伐、保安國土是森林。

○戶倉途上在龍山村

山益加高山有骨、水彌到遠水無音、鵲聲鶯語相應處、幽靜還生太古心。

○狐塚觀櫻在見附

一瓢傾盡欲歸難、脫却簿書堆裏煩、日落狐丘春寂々、山櫻如雪撲衣寒。

○題可睡齋忘歸亭

停車場北望依稀、古寺鬱蔥連翠微、不似平生清廉志、飽貪風物又忘歸。

○梅花先春

群雀噪中狐鶴揚、新年淑氣洽邊疆。天恩不隔幽谿下、梅已先春一笑香。

○甲午歲晚明治二十七年

征清未半歲云暮、慷慨無窮奈此生、豪氣未衰鴻鵠志、夢中前夜陷燕京。

遙思將士祈安全、天佑 皇師所向順、敵地定應寒較輕、谿童昨夜傳梅信。

○奉祝 大婚廿五年

大婚方廿五星霜、白鶴青松壽共長、國體儼然冠宇內、臣民萬古戴 君王。

○轉任賀茂那賀郡偶作 明治二十八年

浮沈如夢真堪笑、十載勤勞百事空、半島官游亦多幸、海山無限養斯躬。

○踰 天 城 山

海澗山高山又海、芒鞋到處從吾廬、曾登第一芙蓉嶽、笑踏天城是坦途。

○乙 未 歲 旦 明治二十八年

皇德洽六合。國威振八紘、閭閻非所問、禦侮只忠誠。

大轟親征藝海濱、長驅萬里幾艱辛、雖非戰地亦軍國、不是千門賀歲人。

○石室岬 矚 目 伊豆南端燈明臺之所在也

石室風光冠豆濱、怒潮吞岸浪翻銀、怪巖奇壁望無限、尤其是巖懸欲噉人。 昔時弘法大師之所懸箕云奇不可言

海風如怒撲吾面、四顧茫茫眼當明、尤其是奇觀無限處、幾層岬角似奔鯨。

○訪臨濟寺詣故關口隆吉墓

回首七年如一夢、青山依舊綠新時、臨濟寺畔故人墓、杜宇聲々與我悲。

○佐藤大佐 鬼將 頗有軍功、爲負重傷、頃聞凱旋于豐橋、乃慰問之恭呈

誠忠赫々貫天日、義勇堂々吞敵兵、休謂負傷分外重、奉公身命一毛輕。

○雨中過小松原 松崎下田間通路也

連山起伏似相爭、四顧濛々雨未晴、黃鳥不知時已去、雲間空和杜鵑聲。

○亡父十七年忌

十有七年如一夢、未成功業淚潸然、孤客今日他鄉客、何忍鴈來霜隕前。

○偶遊于故木村春臺所卜之竹澤園

絕賞林園景色幽、微吟閑步意悠悠、先君遺業碑千載、又見清泉萬古流。

○乙 未 歲 晚 明治二十八年

歲月難停時易馳、人間萬事似圍棋、儂身猶未離幽谷、唯有寒梅一樹知。

十年空廢讀書燈、一事無成愧寺僧、休謂寒鄉稀益友、高山大海是良朋。

○丙 申 元 旦 明治二十九年

戰捷皆言四海安、東洋誰唱清平調、寒梅似與我同憂、春到枝頭花未笑。

○新 年 偶 作

鵲巢三換豆陽濱、處世不忘常臥薪、今古虛榮如一夢、海山佳處養精神。

○下 田 懷 古

低回空弔古、慷慨立多時、松茂古城址、梅芳雙士 謂吉田松茂金子重輔 碑、武山巖露骨、乳嶺樹藏肌、互市今無

跡、名高萬國知。

○山地中將 治元 以幹部演習之事偶泊下田港即恭賦此以呈

拉銳摧堅易于朽、名揚四百有餘州、下田灣上半宵夢、髣髴還尋旅順不。 下田地勢酷似遼東旅順口三四故及之

○松會樓 矚目 在松崎村

幾船成隊圍灣江、燈火萬星浮又沈、漁父生涯真可樂、東風一夜攬千金。脫却紛塵心自閑、微吟青草白沙間、誰疑海面雲屏列、刮目看來便峻山。

○携母及兒二男遊于蓮臺寺

風流未脫舊時態、半日閑遊兒母携、浴罷高樓人散後、青山不語鳥空啼。

○谷津浴後即事 下河津村

人生至樂在斯中、浴後樓前樹戰風、一笑仰天思底事、青山不動與心同。

○湯ヶ島

綠樹陰々斜陽暗、清閑半日聽蟬鳴、山河似感日東急、泉石猶爲萬馬聲。

○訪江川氏于葦山 其第宅頗古朴實八百年物真可觀矣

歷代聲名冠一州、々人仰見日星俾、入村休問君棲處、第宅巍然八百秋。

○姪子島懷古

榮達多萌困辱時、鎌倉霸業萬人知、青田渺々何須問、況有千秋一片碑。

○吉田松陰先生孫庫三來遊于下田見訪其古跡乃一夕招之侑酒席上

憂國不圖遠國禁、先生卓見至今明、餘光尙及兒孫末、便待其遊詩酒迎。

當年物議輒雷同、乃祖壯圖冠國中、今古英雄多失路、何須抱恨訴天公。

(參照讀圖因錄)

○對吉田松陰撰文金子重輔行狀碑

雖然計敗亡其軀、壯志雄圖前代無、請看斯文與斯士、英風千古立懦夫。

○伊東村感懷 于時弟和三郎養病中也

一別雖常無鴈信、相思不減舊時親、再遊離恨難堪處、矢筈山光又射人。

○海善寺八景 乙未余來寓于下田海善寺房已一周年矣今茲移寓于稻生澤本鄉誠不堪追懷之情乃自題八景且繫之以五律贈諸寺僧吉水玄儀

鐘樓暮鐘 禪房夜雨 三本梅香袂 將軍松風濤 富山翠嵐 乳峰鴉陣 本堂壯觀 山門朝暉

暮鐘雲外響、夜雨洗塵煩、香袂看無飽、風濤聽不喧、翠嵐當戶滴、鴉陣掠林屯、最賞伽藍壯、朝暉照寺門。

○寓居秋色絕佳偶備小集

樹々經霜分外紅、滿眸秋色畫圖中、富山如喜武山怒、無限詩情句未工。

移寓九回猶未定、官游到處是吾鄉、得何須喜喪何患、人事忽々夢一場。

○安良里村秋曉 伊豆田子村之隅

海灣清似鏡、寫出幾峯巒、最愛天明處、月殘黃葉山。

○丁酉元旦 明治三十年

歲々迎春人不同、由來浮世有窮通、風流身在紅塵外、詩就先生意氣雄、

明治迎春三十年、風光依舊轉忻然、有人若問新正事、笑答閑來學水仙。

歲且揮毫自有真、紫門依舊衆賓臻、寒鄉勿患乏良友、雪裡梅花獨占春。

○自白濱望稻取

向客堪誇是豆陽、風光無限入吟囊、乾坤一碧望來好、岬角如蠶海似桑。

○偶訪黑田重兵衛於其園宅下河津村

巍然大廈最幽深、可見先人幾苦心、堪喜君家無盡藏、萬山翠滴樹森々。

○遊于嵐山

峽流浙瀝水如藍、三友樓頭攝酒甘、看飽豆州無限景、嵐山雖好亦平凡。

○偶感

小屈何妨有大伸、呼愚呼咄判煩人、斯心知不愧天地、燈下繙書獨養真。
人事忽忙棹急湍、世途危險渡狂瀾、年來養得浩然氣、每遇艱難心益安。

○丁酉歲晚

今古浮沈如夢回、人間行路似寒梅、南枝依例不求暖、却被北枝求得開。

○戊戌之歲再入于磐田郡明治三十一年

豆南風物未探徧、豈料再歸前版圖、入郡村知心意快、青山亦似喜迎春。

○賀茂郡留別

無限海山如惜別、故妝姿態似娛吾、官遊四歲空開拓、偏恨天城未坦途。

○西光寺僑居附在見

禪門不許俗塵侵、山靜真知太古心、尤是幽情難語處、曙鐘音歇鳥啼林。

○紀元節拉鈴木信太郎坪井啓作觀梅於八丁園

偶携僚友赴新晴、忽訝雪霞離屋明、不恨主人無待我、梅花幾百笑相迎。

○大池紛擾

一誠思職不思危、難奈至公招衆疑、昭代誰圖有變俗、任他池鏡別妍媸。(參照朝露之卷五六丁)

○己亥元旦明治三十二年

四海年云改、曆遊伴小童、寒梅幽谷裡、獨未遇東風。

賀客千門翻旭旆、戰捷餘威海外知、東洋休唱清平曲、國勢危於累卵危。

詩債如山年已新、千門賀客去來頻、梅花不笑鶯猶默、古寺蕭條未是春。

○紀元節拉縣杯武鈴木幸雄觀梅

寒甚溫風未遍枝、本年花比去年遲、斯君宛似吾身世、空吐幽香人不知。

○招詩人太田有終等與韓客韓錫璐應酬作

天涯萬里隔雲岡、會見人誰得不傷、却羨風流一枝筆、漫遊到處墨痕香。

此心正大遍天地、群謗區々何是傷、請看小園梅一樹、幾遭風雪不淪香。

箕域建文旌、日東留大名、五洲鄰保志、四海弟兄情、富國元要教、強兵何恃城、偏歡親睦宴、緝得

酒詩盟。

看破利名關、浪游雲水間、一詩論宿志、小酌慰愁顏、烟綠寺前寺、霞紅山外山、窮迫君勿語、天理

自循環。

奇遇轉忻然、誰知有好緣、輔車無覆轍、辱齒有經年、健筆凌坡起、能詩壓樂天、家遊春漸暖、好去

洛陽邊。

○接中島雄寫真回顧一別已三十年恍如一夢雄曾為外交官漸顯達今駐在清國佐日本公使專講善隣之策矣而余則依舊碌々宿志未伸惘惘無已而況世間乏正義之士與我同憂殆如晨星禦侮善隣何用戰、樹勳全在外交宜、溫容一見今如昔、慚我窮廬空素尸。

○大池紛議和解

和就名揚是大池、從來禍福本人為、當年血雨地憂處、今日慶雲天喜時、契約萬全堅互守、量標千載不容疑、偏歡兩邑持謙德、宛似一家團結宜。

○庚子九月扈從于小松宮殿下觀競馬會於磐田原明治三十三年

何料夙將高貴身、迭遊猶見試艱辛、磐田原上王車跡、靄々德風秋似春。

○過濱名湖

松濤風籟海波清、脫却紛塵功利輕、水鳥不知吾失路、聲々得意隔烟鳴。

○大千瀨舟中作在浦川

水色山光滌俗襟、天開活畫悅吾心、雲過前嶺々如動、空使詩人費苦吟。

○長篠懷古

想見篠城要害地、群雄角逐在斯間、停車欲問興亡跡、只有水聲空答山。

○中部佐久間村內即事

文明餘澤及邊陲、抄低煙颺濃淡輕、誰料深山幽谷裡、絃歌聲答杜鵑聲。

○奥山村途上北周智郡

峯重水遠水流長、六七人家占一疆、穀貴翁難飽糟粕、茶卑妻不著新裳、春耕扶老逐呦鹿、秋穫携兒禦豺狼、周歲棲山無寸暇、藤衣稗食送年老。

○庚子歲晚明治三十三年

未成一事去忽々、歲晚風光千里同、官柳媚烟榮有限、谿梅窘雪樂何窮、世波曲折多兒戲、人海淺深都夢中、自笑奔洋掣鯨手、小池垂釣養斯躬。

○送小野田元熙轉任于宮城縣

誰料疾雷轟碧空、榮遷忽赴帝京東、圍棋對客樂閑日、鞭馬追村有威風、學舉州人歡不已、波收池水灌無窮大池紛議和解依君之幹旋歎君養得治民妙、一歲能成十歲功。

○二俣客中

山雲滄海晝猶暗、愛看樓前燕子親、欲雨忽晴々忽雨、天公變幻亦欺人。

○辛丑之歲亡父廿三年祭明治三十四年

二十三年如一夢、星移物換幾回秋、炷香恭向靈前拜、志業未成涕自流。

○秋日訪油山寺

乘輿陶然試一遊、山門寂々鳥聲幽、風光滿眼真堪愛、古寺夕陽黃葉秋。

○辛丑歲晚

每償詩債又回頭、駒隙忽々歲月流、吾似凍蠅空負暖、人如紅葉互爭秋、清貧陋巷却多樂、富貴浮雲不欲求、自笑身雖居草莽、獨思君國亦先憂。

○菅公千年祭

欽仰公威德、炳乎星日明、賽神人不絕、千載凛猶生。

○壬寅之歲五月接休職之恩命明治三十五年

官途荏苒空尸素、世上毀譽何足論、堪喜清閑須養志、一朝休職亦天恩。

七 罷官養真(朝露之覺第六、六〇丁裏)

○罷官後夏日

忙裡欲閑々欲忙、人生境遇亦無常、詩雖遣悶難醫病、丹心一片在彼蒼。
青梅經雨大於豆、一陣薰風燕子輕、自笑罷官無客到、讀書消日復書生。

○送大久保將軍春野之熊本

熊城元是名譽地、前有藤君後谷君、豫誠西陲傳警日、應奇於二將奇勳。

○奉賀德川從一位公榮典

遺績冥々終不沒、新公爵是舊將軍、誰知還政退身德、何止昇平三百勳。

○固辭衆議院議員候補

深院養病還學仙、清閑盡日日如年、人來勸我議員事、笑指蛙鳴閣々邊。

○壬寅歲晚明治三十五年

歲月駒過隙、暮年空感時、寒花嫌鳥弄、殘葉奈風吹、少事如多事、無爲似有爲、堪嘆人海濁、孤潔

任天知。

多歲磨來鐵石腸、每逢艱苦益加剛、喚非喚是任人喚、一片赤誠心自康。

○癸卯元旦明治三十六年

迎新依舊樂清貧、賀客更無來往頻、匹似寒梅遜幽谷、笑他爭暖競溫人。

○弔桑原真清遠逝

顯族芳名遠近聞、齡高賜位表忠勤、人生貴賤誰無死、死有餘榮真此君。

○巖上松

紅摧白挫事多違、蝶舞蜂狂計悉非、空賞巖頭松樹綠、莓苔爲帶雪爲衣。

○日露戰時遊說各町村農會偶作

由來世事有浮沈、沈亦不愁浮不歆、誰識高山清水裡、芒鞋踏出幾千金。

○甲辰之歲十二月悼母逝明治三十七年

事夫貞節事親孝、開得吾家一世基、告地訴天呼不返、出林禽語亦如悲。

○乙巳元旦母喪中

門廢飾松春不春、喪中軍國兩傷神、一杯蘇酒數行淚、半灑征人半母親。

○二宮先生五十年祭即恭賦此以告神靈

天降是人膺大任、好將忠孝表良謨、救民何顧苦心志、報國元甘餓體膚、學有淵源出機軸、業無隣援拓荒蕪、庶羞追遠彌欽仰、遺訓千秋德化敷。

○春日謁寶臺院父母墓

追遠彌知覆育恩、每來尋寺慰靈魂、春鶯似告二親喜、睨皖迎吾度墓門。

○次乃木將軍爾靈山韻以呈

膽氣衝天々可攀、攻城戰野不辭艱、露軍百萬冠歐亞、爭敵 王師力拔山。

○臨市川中尉葬祭

遠近爭先會葬人、偉勳千載仰爲神、天公亦感君忠烈、一雨晴來不起塵。

○乙巳之歲四月爲關東三縣農事視察發中泉明治三十八年

麥綠菜黃々雜綠、滿眸春色照硝窓、此行豈止觀光樂、看取富源酬我邦。

○薩埵途上所見

駿海豆山望不窮、海山相待多豪雄、推窓絕貴芙蓉嶽、々雪千秋聳大空。

○視下總御料牧場

古牧場開今異古、林明草綠馬牛肥、一望千里看難盡、帝德亦敷禽獸微。

○自鴻巢到松戶

硝窓四顧皆詩料、南面紅間北面青、造物遇春如織錦、櫻花爲緯柳爲經。

○三縣千葉埼玉神奈川農事視察歸途上

鞭馬走車村又村、欲探農事立黃昏、奚囊滿腹誇人語、不貯詩歌貯富源。

○和大島第三師團長義昌戰場詩韻以呈

欲掃東洋天日昏、同胞幾萬悉忠魂、王師所向如枯葉、風靡朝秦暮漢村。
禹域戰雲今尙昏、腥風血雨幾忠魂、豫期平露凱旋日、無數移成日本村。

○歸 農

俸隸錢奴休語功、稅衣租食詎論忠、誰知富國綏民術、渾在晴耕雨讀中。

○日露講和感懷

折衝力弱損邦威、姑息平和約已非、海內憤源難止湧、帝都騷擾易招饑、萬軍將士空枯骨、十載臥嘗
惟涕歎、休謂滿韓成目的、無稽謙抑事多違。

平和約成却傷吾、連捷功空達遠圖、遺憾誰愆千載計、一時休戰奈前途。(參照朝露之覺八五丁)

○間 中 偶 作

間却不間忙却間、々中忙裡兩間々、休言忙裡無間日、忙裡間優間裡間。

○亡 父 母 年 祭

男(宏也)終大學女(練也)婚他、一族振々嘉聲多、蟋蟀代靈如告喜、飛來堂下數聲和。

○秋日訪關口永峰兩先輩墓

君逝靜岡無足遊、獨尋臨濟寺邊秋、墓門蕭寂無人訪、啣々寒蛩先我愁。

○乙 巳 歲 晚明治三十八年

奏議誠忠勳 帝宸。忽傳臺閣々臣新、江湖雖遠思 君切、獨對寒燈憶古人。先于日露講和批准敢奏善後三事(在于朝露之覺)而其一事今

乃見行忽西園寺內
聞之報一二故及之

○丙午之歲一月岡田良一郎以病愈張宴明治三十九年
多年施教老無撓、燦爛動章思顯勞、天祐是人醫是病、尙祈齡與德彌高。

○晚春偶感

世事回頭如蝶舞、讀書春晝樂清閒、可憐青紫浮榮客、不脫人間名利關。

○紙齋

紙是肌膚竹是筋、無衣無食又無勤、若微絲力與風力、爭得飛揚上碧雲。

○散策于濱松

健脚廢車行路遐、春光無限屬村家、貧中有富人知否、滿圃黃金明菜花。
面々微風吹不盡、停車四顧眼前寬、拾黃收綠興無限、何似汽車煙裡駿。

○偶感

陋屋却安於玉樓、布衣還貴自卿相、嗤他餐俸服金人、阿勢諛權沒德量。
屋堪防雨食醫飢、呼是呼非々任非、天運危如臨戰卒、人情薄似向寒衣、世無攀援何須憾、家有荆妻尙足肥、富貯乎心々濟世、休言落魄事多違。

○秋懷以供有賀龍格西遊人善國歌建碑式

殘菊衰荷難耐情、況遭年祭憶先生、請看蕭瑟墜風葉、縱沒新碑不沒名。

○汚南洲先生韻慨世

可憎輕倖屬、名利沒忠肝、易語言論易、難談功業難、雪華欺月白、秋葉奪花丹、戰捷人彌侈、不知危在安。

○歲晚雜感

堪笑射名營利客、終世役々雁翔空、無情最是紅楓葉、見惱繁霜見妬風。
若不雄圖掩八紘、只應閒適樂清貧、堪嗤射利沽名客、鼠走狼奔競暴榮。
元因擇職得之難、駒隙忽々歲亦殫、野有遺賢空落魄、朝無先達獨長嘆、凍蠅遭暖忽增勢、綠樹醉霜還變丹、欲待買沽誰善買、知不鵬翼九霄搏。

○丁未新年所感和鈴木七二郎詩韻

富貴由來元有涯、清貧之樂莫能加、道窮儒佛酬君德、身化神仙輕世華、鶯意難通臺閣裡、梅心獨識野人家、居安又見忘危象、都鄙通春皆傲奢。

○樂無事

落魄何歎棄此材、讀書春晝道心開、鳥窺雨後雖呈媚、花向風前不與哀、若悟位官均敵履、還應動爵比纖埃、世間誰謂苦無事、々々於吾亦樂哉。

○雜感

紛々政海壯心悲、大厦一繩猶欲維、遠在江湖頻靖獻、布衣卿相有誰知。余屢上書區稅政而稅政漸革三四故及之
○明治丁未明治四十年大久保春野欲爲烈士沖禎介募集詩歌以追弔其忠魂余與焉
敵地如無人、壯舉轉慘絕、志望縱不成、敵勢爲挫折、義膽嚴於霜、忠心堅于鐵、一死笑如歸、惜喪此人傑、嚴將軍之頭、顏常山之舌、壯烈雖可傳、比君未壯烈。

○奈良懷古

七代蹤何處、低徊春日邊、風光皆歷史、雲物悉天然、樹大知年古、宮殘覺世遷、唯看三笠月、詩拙愧歌仙。

○告日露戰役受賞教育家

天恩所及實周諄、不洩幾多忠孝民、戰勝由來存國體、休將教育漫誇人。

○夏夜偶感

愛看螢火入書幃、況是今宵山月微、後園花萎飛蝶瘦、前池荷動躍魚肥、思多滿野新開地、夢繞隅田舊釣磯、吾已去來耕讀好、蜀魂休訴不如歸。

○讀片倉大佐手編日露戰史

元知勝敗有因由、神國男兒死不休、低背透觀忠勇本、一篇戰史照千秋。

○雜感

脫却塵紛事讀耕、呼愚評拙任人評、節高何羨誇勳爵、志潔偏慙沾利名、後進養來多顯達、先賢散盡失光榮、誰知容膝小齋裡、縣政隆々自此生。

○奉送 東宮渡航于韓國

俱仰航韓闔外勤、神功以後不曾聞、約新 皇澤未全洽、八道山河留戰雲韓國舉徒處々錄起三四故及之

○賀岡田良平任京都帝國大學總長明治四十年

多年斯道幸窮探、且擢榮官 聖澤覃、須壓赤門高世價、還修實地莫虛談、教要智德兩全士、學願亞

歐兼達男、期化飛龍施雲雨、無鶴鷄止一枝甘。

○送鈴木貞次見選士官候補生今步兵中佐惣作之弟也

俱是雖尊護國榮、將兵之譽大於兵、須期運用五條 勅、勿負日東男子名。

○丁未歲晚

盡非兒戲是盆栽、奈莫所乎容此身、幸免酒通來督我、南窓讀易友寒梅。

○戊申元旦明治四十一年

料得風雲難定時、休言約就日東綏、大書春帖告之客、舉國安而不忘危。

○新年所感

松竹裝門又越年、獨怡塵外自由天、壁懸吳岳畫三幅、几展象山書一箋、歌有精神皆絕調、詩無糟粕悉新篇、約成休唱太平曲、八道風雲兵未還。韓國內亂尙未絕結局故及之

○送德村喜作轉任于燒津小學校長

有此良師學可振、校風期待逐年新、駿河灣接燒津湊、日本坂通常目濱、一抹海霞如孝子、千秋嶽雪似忠臣、雙眸觸處無非教、勿泥科書賊後人。

○發中泉途上(以下十詩巡和紀行所載也、宏于時奈良縣第二部長)

百里行程過瞬時、天然活畫々中詩、三公不換此間樂、水色山光到處宜。

○月潮觀梅

芒鞋探徧白雲邊、數里山村別有天、一目梅花三萬樹、恍疑身駕鶴登仙。

行々宛入武陵源、溪邊山園村又村、高士雲屯香世界、佳人雪滿玉乾坤、無邊明月芳元夢、不斷清風
水是魂、天下絕勝今古客、二翁山陽 拙堂之外與誰論。

○過都跡村

帝宮無跡悉田疇、願望悠悠何所求、雲雀不知孤客恨、聲々啼上古陵丘。

○笠置山懷古

遺跡于今歷々明、低徊懷古淚空傾、松濤響和川流響、坐使人疑萬馬聲。
無伴孤筇試一遊、攀來險坂立山頭、忍過南 帝蒙塵地、颯々松風使客愁。

○過藥師寺

千古佛宮今始經、低徊難去立中庭、寺房荒盡無僧住、空有垂楊依舊青。

○參拜樞原神宮

畏拜敢傍山下宮、巍然華表仰彌崇、誰知赫々明治業、遠在樞原即位中。

○過古都高市

到處古都尋跡行、西遷北徙幾回更、千秋遺德潤民治、尙記 天皇歷代名。

○過法隆寺寄之佐 伯僧正

堂塔加輪奐、真欽太子龜、梵文高致溢、佛體古光含、美術元能進、妙工今却慙、若微觀此寺、何可
說伽藍。

○中宮寺

古光千載黑兼蒼、溫若春風嚴若霜、一拜自生欽慕志、無香却是滿堂香。

○吉野懷古

如意輪邊夕日昏、幾重花影掩陵門、山櫻亦似學忠節、古慰 御心今護魂。

何妨探討苦斯躬、石路羊腸萬木中、山色依然千載下、櫻雲尙護古王宮。

問山奇骨豈他凌、如此櫻花何足矜、唯有南朝遺跡在、獨專天下絕名勝。

踏破千山萬水來、低回懷古暗愁催、花神似感我誠意、早已令櫻行處開。

由來天道非耶是、亂賊橫行忠義僵、忍見南朝 皇舊跡、寥寥小室使人傷。

○歸家

尋寺探祠日不遑、詩歌如沸感情長、休恠奚囊携得重、悉是古都千載光。

國寶千年歷々殘、妙工教客坐驚歎、名勝各地雖多有、觀了大和無足觀。

○臨故市川中尉銅像除幕式

威風凜々宛如真、想見戰場中尉曠、身遇地雷毫不屈、氣凌鐵網却彌伸、精忠一死摧強敵、壯烈千秋
泣鬼神、宣矣軍功々莫比、元非武士是文人。

○讀報德彙集京都府農會編 大森鍾一所寄

彙集方成允得宜、網羅嘉績不毫遺、前賢古物萬年耀、先哲舊蹤千載垂、澤被琵琶疏水業、利開保瀨
(高瀬) 漕舟基、考來皆適宮翁教、今代豈無伴此措施。

○戊申歲明治四十四年九月欲遊于橫濱(安子時神奈川縣事務官)

路入山崖汽笛殘、雙眸觸處總雄觀、火輪疑是走波上、窗外只望蒼海寬。

○伊勢山官舍夜望

浴罷高樓倚曲檻、煤煙如霧夜冥々、恍驚身在雲霄上、車響萬雷燈萬星。
海舶往來呼欲響、繁華場裡占名勝、星明休怪霹靂起、便是車聲便是燈。

○大森鐘一亦來泊閑話徹宵賦此以詠

榮枯異所果何由、君上青雲我白頭、無限心中雖盡處、依然天地一閒鷗。

○謁山岡先生墓

大中至正本無偏、千載殊勳義貫天、欽仰德風惟有似、亭々不染淤泥蓮。

○東台懷古

回頭四十一星霜、物換使人追恨長、木葉蕭條苔徑滑、萩花歷亂寺坊荒、山王臺上無王跡、不忍池邊有忍岡、唯仰照宮依舊燦、賽之先禱國家康。

○觀秋草於向島百花園

依舊滿園秋色新、趁晴爭賞綺羅人、女郎花笑應相語、門內不容携妓身。

○鎌倉懷古

雨霽鎌倉秋色寒、忽懷前史獨長歎、洪鐘北條貞時所鑄獻獻響想條家盛、土窟暗疑王影殘、惆悵只望源嶺綠、低徊空仰鶴宮丹、雖持寧樂探勝眼、古跡亦多俱可觀。

○訪蒲福寺讀源義經腰越狀而喟然有作

夷讎已奏蓋天功、忽遇讒邪志遂空、一讀何堪千古恨、源家衰運在斯中。

○過龍口寺內北條時宗梟元使臣遺跡

赫々偉動千古知、何須遺跡建豐碑、平吞十萬胡軍勇、在斬五人元使時。

○金澤九覽亭

九覽亭頭拍手愉、滿眸風色冠相模、恍然身若遊仙境、宛是瀟湘活畫圖。

○觀金澤文庫

振威天下豈徒爲、崇佛敬神文教施、珍寶幾多今尚在、使人千載費心思。

○觀橫濱市米艦歡迎盛況

遠客來遊客是誰、曾開此港舊恩師、觀光盡意恨歸速、招宴推誠諸到遲、軍艦煙中俱接砲、國旗風裡互交肌、堪慙五十年前夢、目以黑船呼以夷。

絕前珍客自同盟、傾注滿腔誠意通、萬戶張燈如不夜、歡呼日米國交平。

○同所感

非須武力勢難支、宛似春秋戰國時、勿語艦艦示威至、平和風動日星旗。
可見艦艦幾十艘、砲聲轟海々波高、雖稱米國之仁義、尙疑東洋競勇豪。
休言列國悉相康、口唱平和心本狠、不是中心爭武力、何要連艦到東洋。

○根岸大競馬

宜矣斯場天下鳴、如雲駿馬使人驚、剎那驀進決輸贏、騎手一鞭風有聲。

○謝大森鐘一見惠先哲墨寶

多謝此書希代珍、網羅遺寶輯編新、似招先哲陪其席、墨跡留神影見真。

○戊申歲晚感懷

節物催吾百感蒙、回頭往事盡虛營、煎茶充酒亦豪飲、假紙爲田儘筆耕、滿腹文章無濟世、堆齋著述不安眠、可憐池畔亡林鳥、戢翅未飛何得鳴。

○己酉新年雪中松明治四十二年

飛龍百尺萬年齡、十八公名今古馨、可見後凋清節貴、每遭風雪愈青々。

○夢觀櫻覺後即吟以寄宏

西走東奔戴月回、難辭講演與和裁、孝情一夜分明夢、伊勢山頭櫻滿開。

○晚春郊外散策

麥綠菜黃畦又畦、閑來曳杖夕陽西、傍人不解余心樂、一路新晴頰白啼。

○見宏所寄養老瀑布繪端書而有作

萬客齊知養老名、曾遊回首淚空傾、千尋瀑布宛如見、畫裡無聲猶有聲。

○改葬祖先以降累世之遺骸而有作(改葬前在淺草、移之于築井、故三四及之)

潑淚墓前披孝肝、讀經聲盡九泉安、避來卑濕移高燥、不獨遺骸魂亦歡。

○讀內田正所著儒教新議

特尊夫子逞高論、看破釋耶流弊源、未審國光彌致盛、在將儒教配倭魂。

新議唱來真卓論、令人容易悟其門、闡明儒教無餘蘊、探得迦蘇弊竇源。

○謝大森鍾一來訪

謝君不料貴紳軀、僻邑枉車茅草廬(中泉小屋)、移晷清談欲投轄、如何鐵路瞬間趨。

○喜宏初舉男

徒然無客對書檠、忽接飛翰喚一驚、披展何思舉男子、呱呱聲裡有歡聲。

○己酉之歲奉祝式年遷宮之大典明治四十二年

欲拜遷宮盛典儀、肩摩幾萬共嫌遲、須知赫々皇威震、遠在大神垂統時。

○賀宏全式年遷宮警護之大任

警周全市若蛛絲、群衆肅然無小疵、雖是由神威不測、祭官亦感指揮宜。(頃日置鹽祭官來信云自古每有遷宮職必有事焉而今回之大典不拘未嘗有之大群集無事告終是固由乎令節君指揮得宜而然矣一同感嘆結句故及之)

○聽新渡戶博士簡易道德論而有感

看破國民流弊源、坐教聽者服高論、說來說去無餘蘊、痛切感人尤格言。

○己酉歲晚

天地蕭條餞歲還、秋風春雨幾循環、人間三百六旬日、盡是耆騰夢裡山。

○送中川內務書記官之歐米望君也

壯哉奉詔發都門、海陸鵬程萬里奔、殊俗異風周米市、玉諧金闕滿歐村、潛心細視政治實、決志精探教化源、今古探長斯國是、歸來何以答天關。

○庚戌春王正月偶訪津市四天王寺謁齋藤拙堂先生之墓而肅然有作
誰無謁墓淚潸然、落日春寒古寺邊、學政要拯文弱弊、海防策破泰平眠、遺恩千載備功舉、奉事一君
忠節全、埋骨是雖同化土、芳名與月瀨梅傳。

郵童亦識先生德、導我殷懃來墓門、一拜豈無欽慕念、文是韓歐史是溫。

○賀三重縣會議決四日市築港接以呈有田知事

歷代長官難制先、迨君成立感謀全、斯功豈止縣民利、永潤幾多中外船。

○聞森田節齋翁有建碑之美舉

曾逢贈位受恩深、今見建碑聊慰心、滿腹經綸無所用、文章千古使人欽。

八三保卽事

○庚戌之歲三月受靜岡縣立三保學院長之命而難固辭焉偶書感（一時既出子朝露之覺中）

受託何思養院生、赤心求實不求名、童蒙宛似霜霜草、徐遇春風芳始萌。

○辛亥三保新年

鷄犬無聲似謫居、紅暎映嶽報春初、身棲浮島尚憂國、朝迪童蒙夕讀書。

○賀宏榮遷于內務省

五年殊積達 天閣、拔擢堪歡入省門、期駕等情施建築、益將忠實答 君恩。

○三保囑目

神女何圖配伯梁、羽衣無跡海波蒼、桃源不索晉時遠、山白花紅又一鄉。

○送長子宏奉 勅之歐米

欣然奉 勅出都門、臨別豈何無片言、四海皆知同種族、五洲元是一乾坤、意平須索文明本、志大應
探開化源、活眼窮人未窮處、歸朝亦合答 君恩。

○三保學院

花紅山白自仙寰、讀書盡日道心閑、四十六童多改過、積年教化不辭艱。

○三保療園 在羽衣橋畔園主岩崎氏也

不二巖大觀 白雪爲冠雲作裾、四時大觀入斯廬、芙蓉八朵聳天半、變幻無窮畫不如。

御穗神社舊林 遠近如雲參祭人、靈宮占得羽衣濱、松平樽自有威望、日本武尊曾賽神。

清水灣漁歌 外舶噴煙奪國旆、清灣波穩夕陽微、漁歌如湧喧天外、知是多收誇得歸。

羽衣橋明月 羽衣橋上好鋪氈、酒可以賒茶可煎、恰駕長霓臨大鏡、滿身明月夢神仙。

龍華寺晚鐘 欸乃聲傳修養樓、無爲海鳥任潮流、呼響在近龍華寺、鐘落波心暮色幽。

清見瀉白帆 寺如城廓水悠悠、無數漁船一望收、尤其是此中清絕處、點々白帆疑白鷗。

三保村桃花 神女豈料配伯梁、羽衣仙曲有遺芳、桃源不索晉時遠、一簇紅雲三保鄉。

龍爪山夕照 半日行程宜一遊、山神尙武翼 皇猷、此間風物畫難就、夕照西春暮靄浮。

有渡峰驟雨 驟雨覆盆雖駭吾、山容平素自溫乎、雪舟亦今歎拋筆、一幅天然活畫圖。

三保洲松原 勝地雖多莫與儔、前賢有祀此名振、蜿蜒斗出真崎角、一節青松似逐人。

○船入田子浦

吟眸望不盡、山色水光寒、船上波雖險、比之人海安。

○壬子歲晚書懷

老去心存一片丹、童蒙教我日多歡、身如黃菊衰霜後、氣似青松傲歲寒、臺閣風雲雖漸穩、政波順逆未曾安、王公不識此間樂、灣水深邊魚上竿。

○感化事業所感

身均遷謫友詩篇、又啓童蒙心理傳、前世猶酬恩未至、天公不許樂餘年。正人無若正吾躬、笑路泣絲元屬空、感化細推心理考、餘師究竟在兒童。

○哀悼 明治天皇崩御

六千萬衆不勝悲、矧是宮中百有司、德大重於喪考妣、涕多殂落訣臣時。

○奉送 明治天皇靈輦于江尻驛

去歲遇嘉辰列班、觀兵場裡拜 龍顏、豈圖今日送 靈輦、永訣難停哀淚潛。

○雨後貝島散策

雨後扶筇步海頭、沿灣林嶺翠如浮、飄然有客來相問、笑答無心一白鷗。

○秋夜對明月寄思於在伯林長子宏

健翮不思甘小成、鵬程萬里試洋行、長空雲散伯林月、照得扶桑學士明。

○癸丑三保元旦

大正二年

諒闡乾坤淚未乾、改年誰語改年歡、門無賀客春何處、滿目海山風物寒。

○日蓮崎懷古

每遭讒害志愈堅、宗烈何惶幕府權、遺蹟空存日蓮崎、怒濤尙似訴當年。

○恭弔木村鈴太郎中尉之殉職

豈料忽亡斯偉人、鄙都同惜落花春、假令骨朽機山下、魂作飛行界裡神。

○恭弔岡田淡山翁

一門榮達是全終、忽接訃音傷寸衷、夙設鄉釐成俊傑、又將報德化民風、觀音像與功勳耀、公會堂兼名望崇、雖死猶生千載後、應傳二世二宮翁。

○淡山先生

二宮翁逝有此人、席未曾溫奔走頻、興國何辭罹病苦、安民豈避遇艱辛、觀音像耀千秋業、公會堂隆百世春、宜矣雙兒共爲相、遺勳歷々殆無倫。

○千濱村懷古

隣里加親約愈堅、民風和煦子孫傳、低回懷起當年事、殺掌翳村家絕煙。

○大正四年十一月於靜岡市特賜饗饌、感激無已、上一詩

聖皇催宴御杯傾、滿殿群臣湧頌聲、感泣慈仁及遐域、微身何料賜恩榮。

○乙卯元旦

大正五年

浮島閑居六遇春、邦家前路尙傷神、年來養就浩然氣、失意人優得意人。

○社 頭 杉

轟々衝天狀不凡、須知境致自森嚴、金甌無缺 君臣睦、恰似護神千歲杉。

○乙 卯 歲 晚

身棲孤島恰如仙、堪笑紛紛爭政權、善化惡童圖報効、人生至閑莫超焉。

○丙 辰 歲 旦

大正五年

聖德威神梁稻豐、家々旭旗動東風、開春第一揮毫祝、天壤無窮寶祚隆。

○偶大森大人於京都府知事官邸

舉族依然喜事無、相逢只憾北堂徂、十年一夢空回首、君益青雲吾白鬚。

○於靜岡行宮拜謁于 皇太子殿下不覺感泣

朝踏雲海夕行宮、見學惟忠勞 聖躬、恭拜 玉顏皆感泣、山陰草木靡仁風。

○歡迎石原健三知事

舉杯俱視得賢能、縣政自今如日升、學界受磨光可復、民風加礪富彌益、恩期春雨有仁惠、威待秋霜無愛憎、前代經倫雖盡矣、亦應遺利爲君興。

○恭祝宏榮遷于內務省社會局長

官務陞遷亦趁新、好以丹心致此身、榮譽雖大任加重、上慰 宸襟下鎮民。

○東照宮三百年祭參拜于久能山奉獻

累戰功成社稷全、無雙豪傑靜於禪、千秋赫赫驩虞德、何止昇平三百年。

九 歸臥于青山 (朝露之覺 第八)

○感化院長退職後偶感

十年斯業亦徒爲、齡超古稀猶未衰、耿耿無眠無限感、丹心一片任神知。

○歸臥于青山偶感

雖云歸臥樂清貧、許國豈忘安 帝宸、憲政未除專制弊、林蟬猶且叫民々。

○偶 成

小室書堆膝足容、堪嗤大厦意常恂、世人不識吾心樂、勝地探詩好友筇。

○虔謁勝海舟先生墓 件嫡孫 善長

墓有號名無諡名、供花一謁使人驚、遠才明識排群議、活眼英裁絕衆爭、都下免遭焦土厄、主家得浴聖恩榮。大勳偉績罕儔匹、微出先生奈此氓。

○題 洗 足 池

南洲碑與海舟墓、併日蓮庵三偉蹤、雖事異心同愛國、獨巡池邊涕沾胸。

○留 魂 碑 海舟翁之所曾 建也因慰其魂

南洲翁與海舟翁、意氣太投是盡忠、談笑救來塗炭苦、小碑留得蓋天功。

○謁長三洲先生墓

謹嚴書蹟本難欺、宜矣忝爲 先帝師、不做世間墳墓侈、小碑一片冢栽芝。

○謁肥田濱五郎先生墓

夙仕宮中宮政新、何圖遭難忽亡身、爾來歲々幾乘客、仰作汽車團廟神。東海道汽車全通之歲（于明治二十年四月廿二日也）於藤枝驛遭難死

○賀末弘殿太郎博士歸朝

踏破米山歐海好、扶桑刮目待歸朝、客囊所貯真如重、知是安民興國源。

○參拜于 明治神宮

選良一致獻多財、全國蒼生又子來、宮就宏模未曾有、相爭報賽似雲堆。

○賀苦學生矢野兼三今爲警視廳官房主事出仕于內務省社會局

獨學九年全大成、將浮官海耀芳名、精神一到如君罕、父喜黃泉母樂生。

○拜觀赤阪離宮御苑

菊花楓葉萬松間、宮殿無人涕自潛、誰思塵囂都會裡、御園前有此仙寰。

○與 宏

要知創業政方繁、毀譽區々何足論、是々非々無偏曲、應全所信答 君恩。

○讀肥田春充著強壓微動術

能明物理兼心理、說到自然真敬聽、識博東西語俊語、學通今古玩群經、悟來天地一元妙。易云大哉乾元萬物資始

至哉坤元叩竭論語云我叩萬物資生其兩端而竭森羅萬象靈、應代坤輿民衆謝、回生起死保身寧。

○辛酉歲旦所感

門前松竹昔猶今、都下文明淚濕襟、思想休言外來殆、天皇萬古統中心。新年無事拜朝曦、共酌屠蘇舉玉卮、一族團欒春客海、此間之樂有誰知。

○祝田中智學還曆

四十餘年欲救患、宣傳講述不偷背、闡明 勅教無遺憾、完了辭林除後艱、國柱會堂隆叡麓、最勝閣館聳清灣、尙要多待斯翁力、靜養應期曆再還。

○題 克 寫 真 影時檢

學窮深奧亦無誇、斷獄雪冤誰得加、寫寄半身洋服影、眼光如射慳姦邪。

○賀榛村專一辭判事爲辯護士

一誠要拔萬人中、護正排邪須奏功、汎接官民何用意、秋霜嚴裡蓄春風。

○罹病背小金井觀櫻之約櫻雖不知而余獨知矣於是乎學季孔之精神欲自此尋其約以謝櫻花

何羨吟朋遇盛時、今雖花落曷嫌遲、病瘳應自此尋約、櫻謂無知吾獨知。長隄花落綠新芽、不聽嬌歌艷吹譁、櫻樹似期吟客到、好教蛛網駐殘葩。

○虔吊弔清峯太郎

一驚何料忽僵壞、哭地呼天不復還、縱此身雖埋袖野、魂升富嶽護清灣。

○寄所思于野村玩古翁

雖因古諺貯金錢、不答慰心詩一篇、悟得吾生健康術、要强氣海與丹田。清風明月不須錢、且暮愛吟三百篇、古諺休尊徒貨殖、作詩時又可耕田。

○上野帝國博物館五十年沿革史編纂中

庫幽如遇謫、獨纂不要論、鐘報空流涕、鴉聲亦斷魂、榮枯知有運、禍福悟無門、想見前官蹟、書中手澤存。

○偶感

天下久無稀世材、前途邦策賴誰開、吏僚紊紀不知愧、兄弟閔墻真可哀、衣食雖甘免寒餓、國家猶未捕涓埃、春宮到處歡迎盛、赫々皇威亦大哉。

○恭祝末弘殿石勇退

奉身司直幾經過、三十八年無一蹉、勳位兩高榮亦大、俸恩俱厚幸尤多、仍將謠曲養心膽、好弄圍碁忘宿痾、且矧有非凡令嗣、前途顯達果如何。

○拜觀 皇太子殿下渡歐後英姿活動寫真洵不堪感激恭賦此

蹈破鵬程萬里濤、空前壯舉想心勞、國民迎駕如雲列、英帝枉車來驛遭、祝砲動濤崇戰捷、花環堆寺吊賢豪、知不雖本 皇威烈、亦靠 儲君德望高。

○次送人登嶽詩韻

曾攀富嶽壯心開、萬象一瞬呼快哉、天漢無雲方混沌、日將昇處此蓬萊。

○消夏雜感

詩文却劣壯年時、經史亦留千古疑、七十二翁何所得、空看頭髮白於絲。
恰好藏身傳物間、知新溫故道心閑、師朋歿盡以何益、清可學川高是山。

小園泉石亦風光、幸有讀書容膝堂、不用山樓兼水閣、一心清處是真涼。

○奉祝 皇太子殿下御歸朝

無恙歸朝安 帝宸、七千萬衆謝 天神、列邦俱表歡迎實、半歲互通情好真、握手溫添條約力、談心睦助信書親、取長先奉獻 皇上、 令旨還應着々新。

○送貴族院議長德川家達公奉華府會議全權委員之 大命赴于米國

奉命忻然告別離、前途措置繫安危、爲黃爲白非新種、曰米曰英皆舊知、尊重國權毫不屈、發揮 皇道復無遺、折衝功就歸朝日、刮目應期 奏上宜。

○向山黃邨先生歿後始謁墓

倍慕先生志操高、悟來官海險於濤、慰心文墨出新軸、寓意武韜藏古刀、佐幼主傾身學問、仕將軍比死鴻毛、回頭五十年前事、碌々無感向墓號。

○秋陰所感

天候由來基太陽、得時籬落菊花香、榮枯速似當風葉、治亂急如防水塘、宿雨休嗟遇凶歉、朝曦誰謂失明光、人間雖有不同面、思想應無白與黃。

○辛酉歲晚雜感 大正十年

至竟秋霖禾減登、難停物價幾層々、饑年檢帳無鬼債、忘老繕書有電燈、詩足遺憂何覓妙、文尊通意不要能、誰知燕雀要枝上、却笑冲天鴻鶴騰。

○偶感

推移何學屈平清、五十星霜不計名、家憲從來尊報德、應銘今尙重全精、黃金富劣經書富、天壽榮優人壽榮、齡老追歎時務策、乾坤無所用狂生。

○壬戌元旦

大正十一年

屠蘇杯酌好、一族共團樂、此鬢雖彌白、斯心覺益丹、梅仙猶未笑、福壽稱如歡、旭日家々旆、扶桑磐石安。

○訪伊藤博文公墓

殉國精神是滿腔、尤欽材學兩無雙、縱身雖化谷垂士、偉績千秋耀萬邦。

○訪山縣公墓

赫々偉勳真絕倫、無雙人氣極人臣、清香薰葉梅花節、護國塋埋護國神。

○訪大隈侯墓

夙志育英籌不群、屢班臺閣樹殊勳、德光贏得國民葬、賽墓以門人若雲。

○春暖花較早

今春梅信早、誰謂見花遲、林外傳鶯語、隄邊伸柳眉、魚紅水後水、松綠雪餘枝、老去何爲樂、閑居獨友詩。

○元旦以來有七回之雪

小鼎焚香篆縷殘、哦詩盡日任人看、天公欲雪民心渴、都鄙七回飛雪寒。

○春日偶成

每雨催溫萬色勻、滿郊風物又爭新、由來我性與人異、常愛清秋不愛春。

○訪井上馨侯墓

日東人傑本忠誠、內治外交無與聞、銅像留魂清見瀉、大勳千古擅雷名。

○青山閑居

青山棲處好、仙骨不求憐、隄柳疑吹笛、隣櫻怪弄絃、人期成業後、花在滿開前、名利輕於沫、奚慙地與天。

○雨中上野公園觀櫻花

肩摩轂擊不思花、爭看滿園開遍枝、雨潤櫻花々更華、浴餘無數美人姿。

○步送德川全權委員詩韻恭祝其歸朝

輿論共不許乖離、皆欲國安誰欲危、禦侮一朝全得貫、折衝千里詎求知、推窮軍備有開悟、說盡民情莫闕遺、艦準雖違徒勿慨、四州和約與時宜。

○追憶蘇東坡居士赤壁之舊遊

千古文章千古遊、嘉肴美酒滿扁舟、今年月似當年月、彼國秋同此國秋、只憾不生其世代、獨歎難共是風流、英才活學多私淑、豈又尋常一獨體。

計就豪遊空快哉、天明不覺共傾杯、幸遭賢主雖除禍、惜遇讒臣空屈材、昔有斯人知既往、前無此賦矧將來、好對客語儂心事、明月清風肇得開。

○恭祝皇太子殿下御納采之盛儀

盛儀今日愈加敦、勅告殿陵真所尊、太子英明開異域、嫡妃淑德達 天開、千秋無變祖宗訓、萬歲不搖君國根、億兆臣民相共祝、爾來 皇運益榮繁。

○偶 感

嚼得詩書味、可消冬夜長、才圖松掛月、尺宅籍堆牀、富貴雲耶露、名譽炎又涼、誰知編史舉、俛矣身老忘。

○賜立正大師號于日蓮上人

幾度遭難不忍言、何圖賜號照宗門、當年法敵靈合服、立正大師安國論。

○訪先儒墓於大塚

壽命賢愚相共齊、生如朝露詎須悽、寒鴉似與吾同感、落葉深邊向墓啼。

○題錫代官山僑居

學就又須窮學基、仕君應奮滿身知、尊榮當是如山家、宜改代官稱技師。

○題克讀書樓

赤心須化惡爲良、溫若春風嚴若霜、擬律不違推學理、應期入室悟蘭芳。

○題 惟善堂 長子安原宿之僑居也

惟善堂名出楚書、懸之扁額每娛予、金銀雖富非真寶、勤儉如貧却令譽、子々登官要顯達、孫々講學伴閑居、償終詩債又多幸、食有鮮魚行有車。

○祝三宅博士兼任于東京帝室博物館總長

碩學多才降自天、能全大任可無前、高師垂範文動舉、帝博盡謀名姓傳、叢趾變成珍寶窟、茶溪養得蟄龍淵、誰言出務太稀尙、滿腹經營是百年。

○謝博物界大恩人田中芳男翁之靈 大正十一年六月二十二日丁翁之薨後七年、余受囑託編纂博物館沿革史、簿書文中散見翁之事績感謝不能措矣、其

爲事績也、不止官職上之勳勞、獻納有益之圖書及物品於我博物館實不少矣、就中距今七年前之今日、翁病革、臨薨、悉見寄贈所贈家朝鮮及字治山田市發見難復得列品、其志可謂篤矣、乃代表帝室博物館、恭贊香于墓前、即賦得此以謝

七年如夢豈堪云、不遇顏前遭此墳、夙究勸農長實見、尤精博物達聲聞、屢航歐米全 君命、幾仕職官垂國勳、感謝先生心血跡、猶存歷々簿書文。

○恭參拜 德川慶喜公墓

思 皇恩國一心丹、恭順遂成天下安、薨後亦猶持此德、碑墳儉素豈堪觀。

○謁幕末三傑之一人大久保一翁先生墓

幕吏群中夙拔群、又徵 朝廷致忠勳、恭謙有學如無學、沈重成勳不伐勳、戮力勝山 謂海舟鐵舟兩先生 安舊主、傾心府院 謂東京府知事元老院議員 佐明君、鐫名片石禁他字、嫌做世間豪侈墳。 先生墓石只鐫一翁忠寬之墓而無姓名、無說無官位無勳爵、七八句故及之。

○初夏 偶 成

年中初夏富風光、隨意逍遙引興長、酷愛芭蕉舒北牖、空看蛺蝶戲南塘、水聲山色非無感、簾簾燕泥還有香、詩就先生呼快處、將茶代酒儘眠牀。

○吊江原素六翁

參加大政贊經綸、夙盡育英增俊民、切實談論能悅衆、溫和風采亦超倫、思君若慮何思命、患國焦心不患身、一代洪勳私淑本、好將宗教作精神。

○有感于時事

常照坤輿東海暎、何爲臺閣變遷繁、無偏無黨帝王道、是々非々日本魂、兄弟閭牆難禦侮、官民爭政易摧根、誰將蓋世之雄略、一掃迷雲撥此煩。

○梅雨感懷

紀綱何解紐、物貴益豪奢、至樂非財貨、杞憂存國家、蝸蛙雖喜雨、蜂蝶苦無花、憲政誰終美、閭牆前路賒。

○送大森佳一赴于歐米

洋行畢竟仕官光、微一經之恰面牆、久掌牧民經驗富、又蒙恩俸令譽揚、黃銅白黑皆同類、海陸鄙都非異鄉、卓絕幾多歐米客、應期美嶽映朝陽。

○追憶舊遊

空歎落魄老塵寰、無復遭逢生死間、真愧曾稱豪傑士、長刀高屐上神山。

○祝中川孺人古稀

盡孝守貞千歲師、鄉人仰表古稀儀、祿遭政變甘艱苦、夫殉國難舒悲憤、奮設身章教淑女、夙圖家計育賢兒、果然兄弟服高顯、矧又連枝雨露滋。

○癸亥元旦大正十二年

白髮稀疎不及梳、整衣東向拜皇居、歡迎十四元旦、新賀依然大化初。

○虔奉悼貞愛親王殿下之薨去

惜悽情極豈堪言、皇族尊中第一尊、內政外交通上下、殊勳偉績耀乾坤、忽懷駐馬天城頂、詎知枉轎篋澤園、無奈豐榮收玉體、高名萬古慰英魂。明治丙午之歲某之日、偶殿下騎馬見探豆州東南之地理、忠一時爲賀茂郡見泊于木村別墅、恐懼無已

○恭謁宮崎水石先生墓

落々雄心不屑醫、傍修經學又能詩、夙航米國全條約、忽返本邦膺館師、幕府立醫學館移駿任藩醫教授、應招掌奧學專司、孝深齡短未成歿、感慨難堪淚自垂。(參照蓬萊軒文集 集中先生墓表)

○偶感

七十四年無寸績、舊知多歿罕新知、請看俊傑士出賢母、底事世間卑如兒。

○小金井觀櫻花

補植年々春色深、櫻源此處感奚禁、紅交白矣美人面、花屑飛矣武士心、芳野路遼難便訪、墨陀樹損曷要尋、里民休傲村名好、宜積小金爲大金。

○恭謁神原健吉先生墓

按劍如神有勇名、門徒雲集使人驚、先生雖逝直心術、今尙靡然傳各贊。

○有所感于時事詎知人

世運由來有屈伸、丈夫憂國詎謀身、爲金翻節爲名動、鮮矣堂々高潔人。

○松浦伯蓬萊園

蓬萊占得好寰區、誰料玉車臨此廬、珍寶無雙駭西客、名園有備冠東都、曾征異域樹殊績、尤仕南

朝伐逆徒、奕代連綿皆舉烈、矧茲千載不相渝。

○恭祝德川慶光公之襲爵

襲爵連綿彌盛華、舊臣俱賀舊君家、謁猶隆渥難堪感、況是恩波溢此茶。

茶賜

○癸亥大震

幾億家財忽化灰、甚於安政二年災、死骸累々橫焦土、悲慘傷心誰罪哉。

○宏新任于社會局長官

好與天災內閣新、矧膺新任致斯身、治安尤是焦眉急、須救幾多飢渴民。

○送長壽吉再航于歐洲

再航學亦可加新、矧是天涯如比鄰、一視不班尊與賤、彌窮蘊奧好同仁。

○謁島田三郎墓

三十四年參議員、堂々雄辯張民權、最欽清節高於位、養得鐵心冰腹堅。

○恭吊森鷗外博士遠逝

叫天號地詎停行、六十三齡斯界驚、寡默任他無問評、恪勤尤好不沽名、官兼文武功勳顯、學博東西材器京、著作雖多猶未足、爲邦家惜失先生。

○恭奉悅 東宮殿下舉 大婚之典禮

威德共仰天日明、沐風栴雨撫蒼生、神前恭舉大婚禮、億兆齊呼萬歲聲。

○慰松方公之神靈

福壽如公所罕聞、屢班臺閣樹殊勳、最欽千載富強策、忠節一身能致君。

○有感于時事

興除謬策詎全終、負衆專委難秉公、爲黨設官將底事、長歎樞府亦雷同。

○弔川路利恭

起身警吏益尊榮、永勗牧民揚令名、自若如眠終不覺、一生心事以梅清。

○喜但馬民子嫁我家恭賦此以詠

理斯家政實仁慈、好學不如能樂之、愛護應期他日効、孫々教化悉成時。

一〇 人 洛 參 拜

○參拜 桃山御陵

養得衆民松柏操、參陵如織不思勞、誰知 聖德似林柏、每歷星霜覺益高。

○參拜于乃木神社

武文感得養天功、忠烈思 君不顧躬、誰識桃山陵下社、遠基春米讀書中。

○參拜護王神社

神前奉 勅表忠誠、恐夫金甌無缺名、僧怒雖呼清作穢、君臣分定益分明。

○參拜北野神社

位官尊詎若心清、廟宇高難及至誠、告別梅櫻二篇詠、從容風骨死猶生。

廟宇莊嚴梅亦清、鄙都到處祀忠誠、威靈如在真天滿、遺澤流風感後生。

○參拜平安神社

上下和衷建此宮、工成壯麗益尊崇、傾心神苑添新景、用意規模倣古風、龍虎雙樓連左右、橘櫻拜殿植西東、迄今殷賑列三府、永奠皇都萬世功。

尚有皇居市井寧、奠都千載御名馨、柏原陵地雖歎陞、壯麗神宮可慰靈。

○恭謁山陽賴先生之墓

自益著書人所欽、追懷往事淚霑襟、香花不絕深山裡、千古文章萬古心。

○恭吊平田伯之薨去

一心終始盡君民、材學兩全稀比倫、官上大臣齡保喜、功基公正謹嚴人。

○參拜豐國神社及豐國廟

內伐外征威德馨、起身微賤慮邦寧、有斯神社有斯廟、豪傑心魂足以瞑。

○參拜大覺寺

離宮聽政講和處、卜築新成宗運昌、不是尋常千古寺、心經殿裡幾尊藏。(此春心經殿成)

○參拜建勳神社

伐賊勤王無逸居、何圖一袂志齟齬、忠勳偉節舟岡上、好祀其靈千歲譽。

○參拜梨木神社

不顧身家真蓋臣、上隆皇室下安民、盡忠雖世多稀比、持帝宮為別格神。

○訪詩仙堂追懷石川丈山先生

門內無塵風物清、滿場遺寶使人驚、學兼文武重忠孝、節樂林泉輕利名、書貴隸知民易習、堂懸額悅筆為耕、探幽畫得先生像、敬拜保齡今若生。

○錦織竹香民子先師來泊即賦以呈

夙知強國在慈親、教育門中委此身、齡歷古稀彌矍鑠、薰陶淑女幾千人。

○謁佐久間象山先生墓

夙定三知顯蓋忠、忽僵兇刃半途空、為扶皇室丹心壯、欲撫萬邦精氣雄、學備東西遂文武、識明今古凜威風、爾來着々外交舉、應慰遠圖皆奏功。

一一 松茂庵悠適

相州茅ヶ崎東海岸

○己巳新年雜感

昭和四年

松茂庵中再遇春、哦詩讀易養天真、世人不識吾心樂、政託黨紛揚六塵。謂色聲香味觸法

○聞增田次郎雄飛財界

六十年前救厥窮、今為社長占財雄、大同資力雖加億、於我猶浮雲霞空。

○十三夜明月

開關以來千萬年、無邊明月每依然、慨歎民族奉公處、政略殘苛不順天。

○己巳歲晚

詩債如山未得償、清貧安樂儘空囊、吸收阿巽松爲友、無盡 天恩短日長。

○庚午歲晚感懷 昭和五年

軍縮如安未免危、政權予奪可翻思、憲章宣布 明皇勅、止與休招專制嗤。

明治二十二年二月十一日憲法發布勅語云、朕回想我臣民即祖宗之忠良臣民其奉體 朕意獎勵 朕事相與和衷協同宣揚我帝國之光榮於中外同鞏固於 祖宗之遺業於永久之希望不疑堪分此負擔也 明治大帝陛下 一旦雖分與此負擔被開帝國議會而動輒事政權之予奪不和衷協同背 勅旨則縱令被下憲法中止之勅亦不得已矣、故及之。

○偶 感

政波危險似狂瀾、避世詩歌風月寬、不做雁鴻高翺殆、奚如割葦々中安。

○聞皇軍大捷

一身當萬葛須爭、況有前籌勝敗明、蹂躪益權徒暴虐、可憐兵弱賴聯盟。

○滿洲事變偶感

豈料蔣張徒弄軍、匪兵馬賊共爲群、皇軍若蹈無人境、討伐凌寒甘苦勤。

○辛未元旦 昭和六年

八十雖加二、迎春春餅筵、梅鶯無笑語、松竹有風煙、鬚髮如霜雪、心神似壯年、子孫皆勁健、共不覺時遷。

○曉 鷄 聲

到處群雞雖不同、斯聲萬古我邦崇、傳聞常夜長鳴鳥、飼育猶存神苑中。

○壬申新年偶感 昭和七年

皇軍到處每羸征、匪賊雖強亦區爭、八十加三益頑健、心如臨戰禱神明。

○八十三翁有所痛感焉乃書懷

一片忠誠銘肺肝、多年磨盡我心丹、斯身雖老若臨急、當殉 君憂與國難。

○吊慰古賀大佐英魂

遠冒祁寒征滿洲、彼多吾寡絕徽猷、休嗟戰死未塵賊、忽報 皇軍奮復讎。

○追悼行幕臣藩士忠死者六十五年之法要於箕輪圓通寺

年々行得法營儀、戰死殉難人所知、一片堂々忠義志、千秋不滅日星垂。

○拜聽 大元帥陛下率群臣被講武乃恭賦一首以來微衷

仍居闔國不忘危、講武浪華宣戰時、統督雙軍無所闕、堂々之陣旭章旗。

○癸酉勅題朝海 昭和八年

元軍十萬均全滅、露艦連艘亦槩同、朝海年々雖酷似、神風所伐勢無窮。

○余與增田君一別數十年矣何料被贈長良產鵜鮎乃賦得七絕一首

以欽謝其厚意

數十年光一瞬過、君彌顯達我蹉跎、何圖長水鵜鮎產、千里冰藏美味多。

○恭祝中川淳與池田倫子婚約成

共語相親同國人、新婚禮日此良辰、名藏詩韻兩奇遇、淳是真倫是亦真。

○追悼東鄉元帥國葬 昭和九年六月一日

赫々東鄉元帥勳、敵艦全滅服 皇軍、神風動舶底如見、生返者將何足云。

○震災記念日

空前災後十星霜、興復功竣増國光、握飯勿忘當日慘、拜聽 明詔淚成行。

遵養軒歌集抄

余の國風を始めしは明治三十三年以來のことなり。甚拙くして只志を言ふに過ぎず。

宏註。歌は明治三十三年頃より作り始めたものあり。祖父は歌道に嗜深かりしが、父は詩文の素養より、歌道に入りしものにて、所思を率直に詠ずるを以て樂しみとしたり。勅題の仰出しある毎に幾首か詠じて其の中の一を詠進するを我國民として當きに爲すべき所なりとしたり。本書は歌集の抄本なり。

○小野田知事巡視中國風をあまた示されたれば

言の葉の玉も得にけむ國巡る心の海のいや廣ければ

○同知事の奥山村巡視は前代未聞とききて

例なき恵の露は奥山の青人くさにあきあまるらむ

○新年梅

新玉に紐解き始むる一枝も匂ふは君の恵みなりけり

○春の野

桃櫻四方の景色も美はしく心の憂さを打拂ひぬる

○徳川從一位殿の公爵を拜受せられければ

幾歳も葵心は變らねど恵の露に花の色そふ

○衆議院議員の候補を固く辭みて

蟬噪ぐ夏の日足もしばしにて雁渡る秋風ぞ吹く

○海水浴のはやり行くに

涼風は己が心にあるものを海山遠くなど尋ぬらむ

○自適

ぬれば起き起きては書を繕きて見ぬ人をこそ友とめでまし

○嘲世

世の中は蟻にも似たり集りて力に餘るものを曳きつゝ、
力堪へくゝてこそ安し世の人は鼎の足の折るゝを知らず

○山里の秋・

風寒み朝夕百舌の木枯に秋の哀を告げて鳴くなり

○長子の京都大學に入るを送りて

何事も國の爲めにと盡しなば苦き事も樂しかるらむ

○明月の夜京都に在る長子を思ひて

別れても我此身こそ月なれや都のさまを照してや見む

○歳を送りて

歲月の流も早き早瀬川あくるまもなくはやたちにつけり

○新年海

改まる海の姿をうたふとて松吹く風に先たれけり
大八島昇る朝日に逸早く浪の上にも見ゆる初花
わたつみに春立つけしき安らけく磯打浪も頷ふ心地す

○新年を迎へて

吾身こそ谿間の梅よ春たてど雪に埋れて色も香もなし

○柳

佐保姫が春魁に畫くらむ霞に籠る青柳の眉

○鶯

鶯の初音さく人初音をば谷ふみわけて聞く人ぞなき

○綾部あつ子の高等師範學校に入るを送りて

業成りて歸るときこそ賤織の錦にまざるにしき重ねよ

○紙 鶯

鶯揚がる紙鶯雲を凌ぐの勢も暫しなりけり風のまに／＼

○積小爲大

末遂に海となりゆく大水も科より出づる泉なりけり

○今年杜鵑の一聲も聞かざるに

去年啼きし山杜鵑ことしまだ啼かぬは時を待つにやあらむ

○宏の京に歸へるを送りて

窓の中照すも嬉し都にて眺むる月の影と思へば

國民の爲めにと辿る法の道道の奥まで尋ね盡せよ

○報徳社員に告ぐ

子や孫の爲めのみ計かり金積むも世に益なくば道に叶はず

○池田日升三の米國より歸るを祝ひて

外國に學の業を成遂げて池の流れを増すぞ嬉しき

○軍國農民

敵を討つ體も火筒も其の本は鍬と鎌との力なりけり

○折にふれて

かりがねの妻は見えて鳴く聲は雲かと計りあやまたれける

○母君の身まかりたまへるを悲みて

家の爲め柱となりし母君のはかなく折れて逝くぞ悲しき

誰人も世を逝くものと知り乍ら別かるゝ身こそいと悲しき

○軍歌 一に御護と號し、之を出征軍人に贈りて其忠勇を鼓舞したり

恨を累ぬ幾十年 怒り給へる我 皇は 膺懲さひと御軍を 滿洲の野に進めらる

夫れ人誰れか死無からめや 死して甲斐ある軍人 東洋平和の爲めなるぞ 我邦自衛

の爲めなるぞ 世界に傲る大國も 伐平らげで已むべきや 君と國とに盡くす身は

如何なる苦難も物とせず 一騎當千向ふ所 無人に似たり烏拉山 争かて敵せむ仁義

の師 争かて當らむ忠義の士 王師堂々海に陸 懸軍萬里露都を衝き 無道の措置

を制すとして 神の御稜威も護るなり

○乙 巳 元 旦 明治三十八年

山もまた軍に出でし妻かな初日に映ゆる雪の肌は

み軍の勝ちの便りを先聞きて年の賀詞言ひ残しけり

○箱根山中残櫻

山姫が吾訪ひ來るを待ちつらむ麓に残る山櫻花

○東京は花盛りなりければ

世の中の進むにも似ず都路の花は後れて今盛りなり

○折にふれて

扶持受けて盡すは扶持の奴なり受けずしてこそ盡くすとやいはむ

○父の廿七周年と母の一周年を迎へて

さなきだに秋は悲しきものなるを亡き双親を祭るけふかも

○新年 河

治れる御代のしるしと河面に舟漕ぐ音も春めきにけり

○折にふれて

世の中は國の危き時の外如何なる事も憂きことはなし

○奈良より中泉に歸へりて

故郷に歸りてもなほ目に見ゆる嫩草山の山の緑は

○東宮の御渡韓を送り奉つて

小春日の光長閑けく鶏も雛もろ共に影仰ぐらむ

○菊に題して

麗はしく霜を凌ぎて咲く花も其故問はゞ根にぞありけり

○奈良縣會の紛擾を聞きて宏に寄す

幾年か鍛へ來りし其の腕試さむ時は今ぞ來にけり

○宏の増俸を聞きて

たまものは民の血なれや増さばなほ勉め勵みて民を救はむ

○折にふれて

爲すなきも爲には優され爲すあるも爲さぬに劣る事も多けれ
退きて世の様見ればみな鳥の梢に群れて唯噪ぐなり
奥山のけしきはいかに勝るとも訪ふ人なくば顯はるべしや

○社頭松

み社の松に響の聞ゆるは拜む誠の通ふなりけり

○富士の山

動きなき御代にも似たる富士の山清き姿は幾世變らじ

○大場重光翁十七年祭に

敷島の道を訓へし動しは花橋と共に薫れり

○惜春

年々にかへる春さへ惜しむなり慕へる人の逝てかへらぬ
年ごとに去るべき春と知りながら惜しむは人のこゝろなりけり

○月瀬の里に梅を觀て

白雲と見ゆるは梅か溪川の水まで匂ふ月瀬の里

○唐招提寺

語らぬも奈良の都の跡問へば古き佛の姿のこれる

○千家尊福の入關を寄梅祝と題して

吹風に咲き後れたる梅の花咲きて薫れりやまと鳥根に

○畝傍山東北陵を拜みて

畝傍山松吹く風の響こそ威けき御靈の在ますかと聞く

○吉野神宮を拜みて

神もまた拜みし誠よみすらむ社の櫻早笑みにけり

○吉野懷古

山深く古き宮居の跡問へば山は答へず唯櫻かな
武士が君に獻げし心こそ散を惜しまぬ山櫻花

○寄川祝

川路奈良縣知事の熊本縣知事に榮轉したるを喜びて

吉野川治めし功顯はれて球摩の川波亦通ふらむ

○田子浦をすぎて

田子の浦富士の姿は見る毎に變りて飽かぬ眺めなりけり

○富士の山に雲のかゝりたれば

不二もまた山の高きを誇らなく姿を雲に隠しけるかな

○横濱伊勢山官舎の夜

遠近の數限りなき燈火は月にもまさる光なりけり
天の河落つると計りまがふ哉數へ盡させぬ夜半の燈火
望月の光はいつも變らねどうき雲ありて妨げぞする

○折にふれて

何事も國に盡すと思ひなば成らぬといふはなきものと知れ

○戊申の歳晩

何事もなき身乍らも何となく心忙はしき年の暮哉

○雪中の松

拂へども又ふり積る白雪は松の翠を研くなりけり
仰ぎみる松の翠は昔より雪に堪へたるしるしなりけり
木の公と仰ぎみるかなふりしきる雪に常盤の色ます松を
萬樹の凋むに後るゝ木の公は雪の中にも春を占めたり

○横濱伊勢山の葉櫻

葉櫻もまた一入の眺なり花より盛長しと思へば

○八年振に時鳥の啼くを聞く

時鳥我には似なく八年目に思ひ兼ねてや啼きわたりたり

○折にふれて

思ふこと思ひのまゝにならぬ世にならぬは成るの始めなりけり

○宏初めて男を擧げたるを喜ぶ

初孫の呱く聲高く揚げたるは家の榮のしるしなりけり

○大池水利事件和解十周年の祝賀に

大池のけふの祝の歡びは幾千代經とも變らざるらむ
このさまは池と月との鏡にも映りて消えじ幾世經るとも

○宏善長をつれて歸省したれば

初孫の笑顔を見れば嬉しくて年の老ゆるを忘れけるかな

○新年雪

初春に御國の富のしるしとて都も鄙もつるしるしがね
賤が屋も玉の臺となりにけり年の首めのたまものとして
大雪の中に撓まぬ梅が枝は花咲き初めて獨り春なり

○感化事業に苦心して

悪き兒を善くする毎にしるし見え増す白鬚の抜き負せざる

○松 上 鶴

萬代の松に千年の鶴すみて鳴く聲高し初春の空

○田家早梅

新玉のゆたけき春を壽ぎて笑ひそめけり賤が庭にも

○遠 山 雪

朝日さす不二の高根の白雪は國の御稜威の光とぞ思ふ

年々に變らぬ不二の白雪を神代ながらの姿とぞ仰ぐ

○入營兵を送りて

國の爲め徴し出されし兵の譽にまさる譽あらじな

○寄 國 祝

波風のあら立つ世にも葦原の豊けき春を祝ふけふかな

○寄不二山祝

大森大人親任官を以て
待遇せらるゝと聞きて

いつ見ても變らぬ不二の清き嶺雲井に高く顯はれにけり

○三保學院生

霜枯の草木も今や温き家庭に入りて春風に遭ふ

○寒月照梅花

梅が香の高きは月の光まで薫るとまがふ春の曙

○宏が青山に住むたるを喜びて

鶴の巢よりも安し吾が庵は書讀む聲も閑けからまし

○友より忙はしくして書讀めぬといひこしければ

世の中にかまけて人の讀む書を讀めぬといふは讀まぬなりけり

○綾部關奏任待遇に進みたりと聞きて

國の菊永く育てし甲斐ありて九重までも匂ひぬるかな

○三保の庵にて

我庵は不二の高根を庭にして景色變るも朝な夕なに

浮島の眺め飽させぬうちになほ夕日残れる浦の釣舟

○井上大人(東京府知事)の墓に詣づ

遺されし功は今も輝きて身まかりしとは思はざりけり

○勝先生のみ墓の前に

池水はたとひ涸るとも動は年ふる毎に光増すらむ

○青山にて蝸の聲を聞く

青山も今は都となりぬれど昔を偲ぶ蝸の聲

○社 頭 曉

動きなき代々木の宮の曉は松ふく風も千代謳ふなり

○新年言志

初詣神に拜むま心を皆守りなば國や榮えむ

○松茂庵即事

海の池富士の築山松の音こゝにまされる園あらめやは

○十三夜の月

雲もよく晴れわたりたる大空にひかり輝く清き姿は

○癸酉 勅題朝海

限りなき御稜威の光耀きて朝の海ぞ浪静かなる

遵養軒文集抄

宏註。遵養軒文集一卷あり、本篇は其抄本なり。父は碑文を草したること最も多く、人の善行美事を旌はして人の事績を不朽に傳ふるに努めたり。日清日露の戦役に忠死したる人の靈を慰め、天龍川治水の功を彰はすには最も盡くす所ありたり、又其羽衣碑の湮滅したるを苦心涉獵して原形を復するを得しめたる功亦没すべからざるの一なり。本篇は文集の佛を偲ばしむるに過ぎず。

讀幽囚錄

嗚呼甲寅之事豈可勝嘆哉（安政元年彼理復來）方是時長門之人吉田松陰者、獨卓越當世、仍曉和戰之俱在察彼情、慨然不苟顧身家、乃欲航海以探各國之形勢、事觸重禁遂見繫獄而死焉、是豈可不謂志士乎、則其在獄中、鬱抑之氣無所發泄、乃積爲此集、是以愴慨壯烈便覽者不覺瞋眼攘臂而欲奮起于今日、而其同時陷獄者、有佐久間象山金子重輔者、蓋聞松陰航海之說實肇于象山、而卒成于重輔、吁、二子者亦可謂有識哉、天若令我與三子者同時、則必當甘心同獄含笑偕入地下、以看破鎖國之國論、俱圖他日神州恢復之功、作俱贊襄開國之國是、不幸而今皆不同其時矣、故余也一讀此集、不覺歔歔失聲血淚灑袖也、噫。

如愚泉記

吾友今井信郎（今井健彦之父也、仕幕府官未至于顯達、戊辰之難與大島奎介等脫走、遂不果其志、尤善劍、轉原健吉高弟、又好文學、因居金谷原而悠々自適焉）幽居金谷原、乃買廢寺而家之、其傍有澗泉、巖石突起荒草繚絡、宛如廢井、而水則清冽、居民飲之以保渴者幾年于茲矣、今井氏以其太類己、也太愛之、名曰如愚泉、蓋襲柳子遺意耳、夫賈賈藏如虛、英雄韜如愚、一簞一瓢在陋巷、而萬乘富貴不能奪者、是顏子之愚也、當邦無道竭力濟君、而卒能全身者、是寧武子之愚也、遭邦有道蹇謬觸罪優遊山水、而終莫以利於天下者、是柳子之愚也、天下治則懷手抱膝無能爲、天下亂則奮才起三軍側目者、是即今井氏之愚也、嗚呼此泉也、亦混々盈科而已、然七八月之間旱、則滿水皆

澗、民之望之如蛟龍雲雨、無不與被其澤者、嗚呼此泉也、不爲人所辱、獨今井氏所專、是實君之榮而亦泉之榮也、於是吾以愚性述愚辭、爲愚人歌愚泉、則一致而不違、同歸而不悖、豈不亦奇乎。

觀 窖 花 記

山陰有善養窖花者焉、余一日訪其廬而觀之、皆盆栽也、而其品格不同、或疎或密或紅或白、艷然笑粲然發、瘦枝屈幹、其葩如瓊、其葉如冰、朶々郁々、其清致幽趣、蕭然可愛也、然而察其在窖中、始蒙土壤、更桓束、窮居尺地、當此之時爲花者甚苦、然及其出窖、而上高堂厦屋也、自有優然嫺雅之姿矣、余深美其有補學問世教也、乃懇請種翁購得一盆、歸而置諸座右、以爲嗟乎栽培之功爾至此哉、夫當蕭冬沍寒之日、百卉俱腓、獨有窖花超然不屈霜雪、能教衆人拍手賞歎、乃知人之欲就大事業、其用力加意、無以異於種翁之養此花、而其當變故遭屈辱、亦無以異於此花之居窖中、因爲之記、以自警。

與蜂屋定憲書 (仕幕府爲目見以上、移發後、見信于大迫縣令、而爲學務課長、後師範學校長)

定憲足下、正路(父仕官當時、字稱正路)往年在小覺時、俱掌授句讀、雖知遇未深、而略識足下之不止句讀師、而其必有應事務之材、未幾何、正路退養遊歷東奧、以故不得見者殆三年矣、既歸而聞、足下仕官被命專任學務、果不負正路前日之見也、方今 朝廷銳意方欲立學校敷治教、以令鄉黨塾閣盡有學、我縣令亦克奉體其盛意、親諭里甲邑長、到於僻村遐隅、悉莫不有其設、蓋定憲足下、輔翼之功亦居多焉、

豈不太美乎、然而猶恨有闕者焉、請遂言之、足下容其迂直而勿責其不遜、昔者學校之教猶未備、其所以課兒童者則止漢書而已矣、不知有他、是以及其長也、口善談漢土成敗之跡、而於皇國之事茫然如濃霧、嗚呼學風之弊一至此也、置縣以往、各國之交際日開月盛、學科浩瀆殆非如昔日、以有限之身讀無限之書、要非先其本而後其末、則不可、朝廷洵有見于此、特置文部省、欲一學則以俾關、於凡全國大中小校之事務、上者盡由于此、以取決也、其課兒童乃先編成皇國單語篇等日用切近之諸書、以頒布諸各府縣、然後雜之以漢歐米各國之翻譯書等、其於學則也、雖粲然、未悉備、而亦以庶乎一變其學風矣、然而其終日所講者則草木鳥獸衣服器皿之名、歷代之皇諡年號而已矣、而未聞有五倫之教也、假令博學強記天下之物無不知、而獨失五倫則不得以爲人也、夫皇朝學之於漢歐米各國之學、其書所載之歷代皇諡年號其草木鳥獸衣服器皿之風俗、雖有各不同而其所以教者何也、則亦唯是不過五倫之道焉耳、夫制學則者文部省之事也、興學風者縣令與足下之職也、學則既一定未可容易變焉、而興學風未嘗不由縣令與足下之英斷、欲興學風則莫善於五倫之教、聖賢之千言萬語布在方策不遑枚舉、而欲觀其要者則莫善於四書、四書未甚易解也、而欲觀其最要而且易解者則莫善於朱子白鹿洞書院揭示、今豫備其書於各區小校、授句讀之餘暇、猶或時々講究、得以教兒童則本末先後各得其所、而或庶乎教育人材矣、足下無以爲迂腐之言、即與縣令相議、以速行之、竊惟縣令推心以視生徒之勤惰、足下盡力以董教員之邪正、彼其思縣令之推心則勵而不至於荒思、足下之盡力則慎而不至於忽、學風方興、而足下與縣令之職斯立、且教正路永不負前日之見、則不堪幸甚、夫興學風縣令之職也、足下之責也、於正路何有哉。

縱觀亭記

大凡以觀游名於世者、未多見、不行遠、不登危、左右達觀四望如一、徧行天下而無耻者也、而唯是爲得之駿州三保灣、稱爲東海勝區、灣之西南有湊、曰清水湊、湊之東北有島、曰向島、凡駿陽之山川達於海上者於是畢出、而人莫能知、雖知未能盡耳、明治五年我賢友白井子音(爲山岡鐵舟友人頗有村智移駿後奉仕于慶喜公)來蒞茲地、不啻取觀游之美、將以計營業之本、於是親命居毗、前指後畫或凌風濤、或犯瘴霧、運山石造隄防、海濱幾畝、白沙之地、忽然變爲魚池、池中蓄鱸魚億尾、候騰價以爲出、而卜居其傍、坐極臨眺萬象廻合、收在亭內、東望函嶺豆山、俯仰低昂、忽近忽遠、如推立富峰而聽其號令、西望有渡峯、蜿蜒迂透、若伸若縮、似龍蛇之蟠臥而將赴乎淵潭者、北望清見寺、隱然如城廓、而其南則三保之羽衣松、神仙之所管也、其間沙村之靄、鹽竈之煙、海霞淡島霧陰晴、船檣林立漁帆點綴、須臾之間千態萬狀殆不可端倪、則雖凡以觀遊名於世者、豈有不降此亭者乎、既成一日山岡鐵舟松岡不隣齋來訪、以嬉觀望久之、既而欣然相俱語曰、嗚呼此亭也、縱觀不覺日之將暮、鐵舟卽命家僮促筆硯忽然揮縱觀二字、子音乃悅曰、謂命之于亭、因號縱觀亭、不亦盡乎、俾余作之記、時明治六年某月日也。

釋堂說

余門人藤井貞枝(小學教員)未有號也、嘗囑余擇之、授以釋堂、其悅出意外、曰真得之矣、幸爲我詳說之、

余乃應之曰、孔子不云乎、法語之言能無從乎、改之爲貴、巽與之言能無說乎、釋之爲貴、夫人性雖相近、而自有氣稟剛柔之別、乃其言也不能無法巽之異、法言易從巽言易說、若知其可說而不釋則又不是以極言微衷之所在、知其可從而不改則面從而己、是雖聖人其末如之何也已矣、然而易改者法言也、難釋者巽言也、何者則巽言者婉導不忤意人自說之、而法言鯁直者逆耳使人敬憚也、今夫人之有過也、猶日月之有盈昃草木之有開落、賢不肖誰無之、但以善納人諫爲貴、其納人之諫道如何、曰從法言而改說巽言而釋也已矣。

始達園記

余友池谷繁太郎(曾爲代議士以郡內屈指富豪見稱)號春泉、世住于駿之大宮、父子併以愛敬爲一鄉所稱、嘗構小齋、朴素清麗、冬溫夏涼、以爲讀書學問之所、於是治其園普植奇樹異草、四時花不絕、牖下穿小池、池中蓄鯉魚數尾、時放目肆意、沿池堀井、圍以石、其泉之始達也混々、因命其園曰始達、而請記於余、余諾之、而職務鞅掌未遑也、偶得一日閒閱孟子、特知其園名之不偶然、孟子曰、凡有四端於我者、知皆擴而充之矣、若火之始然、泉之始達、蓋其所由出也、人之有是四端也、猶其有四體、有惻隱之心者未嘗不有羞惡之心、有辭讓之心者未嘗不有是非之心、此皆天之所以與我者、而固不侮強、故苟充之則足以保四海、苟不充之則不足以事父母、豈可不大大畏哉、余每過其地輒必客池谷所、略知其爲人矣、平素惻隱之心深矣、故能愛下、辭讓之心厚矣、故能敬上、宜矣其爲一鄉所稱、苟能擴之以充於一國、自一國、以充於天下、乃其所達者實不可測也耳。

送淺野彰赴任于志太郡北部序

志太郡北部於峻最爲高且深也、其爲地、東北隔安倍郡接信、西南劃大堰川對遠、山岳重疊、谿澗迂曲、村家碁疎星散乎其間、土民逐山轉居、人之常情所不忍行也、故善來教授此地者、概止三四月而已、至其甚則半途而歸、全其任者蓋鮮矣、而淺野氏獨奮然奉命赴之、能忍人之所不忍、必知全其任而爲他龜鑑、及別語余曰寒陬僻地無師友、惟恐學難成、余乃告之曰、觀山之高以尙其志、臨水之深以遠其慮、何師友若之、欣然而行。

寄梅澤敏書

水戶人移駿後爲縣官後轉郡長山林區署長而不遇若使之曲志仕于朝則良二千石也惜哉早逝矣

某頓首、僕之交足下未甚久、而洵已知其爲俱有爲之器矣、是以僕之敬足下甚深、而足下之愛僕甚厚也、故苟有所思而不竭、大悖於朋友之道也、乃吐微衷以強足下之意爾、僕雖學淺材拙、而天資剛直亦不欲多讓人、其與人每論當世之時務、及古今忠臣義子之不容於世、輒感激涕自下、雖朋友故舊往々如寇讐、然其及一旦胸解意通也、快然亦不負平生之交也、方今國家又安、四海無事、宜若無憂、然而僕却深憂焉、何也、孟軻不云乎、入則無法家拂士、出則無敵國外患者國常亡、今天下有法家拂士而不言有敵國外患、而不慮一取臺灣之債、而人情苟安、再講朝鮮之和、而士氣委靡、魯英窺讐於後、普佛觀隙於前、其勢危於累卵、若使賈誼復生於今日、則不止厝薪之嘆焉耳、欲及今挽回之、非多結天下之志士、而有需於他日則能不也、豈掉尾垂耳爲小吏甘沒世之時也哉、非足下僕豈發露此、

讀訖便投火、不知者以爲狂也。

寄今井信郎書

是下之未仕而幽居金谷原也、書劍飄然屢相來往、濁醪燒筍竭意以話、平生不捨僕之不肖、得以齒朋友之下其有益於僕者亦多矣、故僕亦苟有所思則敢欲以質足下、夫草莽之樂雖王公未可與易也、其樂非止山林、遁世之士蔬食水飲閒放自得之樂、而欲抱大有爲之志、而有需於他日尊主澤民之時而已矣是以及其一旦得志、貴極將相、富俸王公、而亦不易草莽之樂也、周太公滅殷救民之略、既定於渭濱釣漁之間、而非始於拜將之時也、漢武侯三分之策、既成於南陽躬耕之中、而非起於拜相之日也、乃知草莽仕官本不二、其途但以草莽之所蓄而施之於仕官之時也耳、去春足下始仕官、僕亦就驥尾辱員末、此非平生之夙志、暫託而有需也、請足下與僕矢勿易草莽之樂、嗟夫、今世之人仕官而俄易草莽之樂、何耶、官使人耶、將人使官耶、願與聞焉。

絢齋遺稿序

絢齋爲置鹽藤四郎兄惜哉不幸短命而死矣

予聞、天道福善而禍惡、然自古斗筭淺狹之小人竊政擅權、般樂忘教以終其身、而善人君子却罹災厄陷憂患、困躓連遭老死山林屠販而不見用、或早世而竟不果其志者多矣、天何爲其與善之不幸而與惡之幸也、是可嘆焉耳、既而復顧耳目之憂樂止乎一朝、而青史之是非存乎千載、夫小人之跡犬彘亦將不食其餘、而善人君子之跡誰聞而不感奮灑涕以惜之、況其文章可以傳世而行遠也、然則今世之不幸者却

蒙後代之福、而今世之幸者却受後代之禍、禍福循環之理蓋亦不足怪也。(以下略之)

與岡田真一郎書

(前略)抑歐米之富強冠于世界、三尺童子亦善知焉、然而其所以致富強之理、雖大概淵源于普通教育而決非不可也、何者邦國有衆人民然後克富、人民皆有智識然後克強、苟人民無智識而邦國克富強者未之有也、夫不世出豪傑姑舍之、令中等人民少有學、不若令下等人民多有學、我邦之富強復居于歐米之下者、豈非下等人民多有無學者乎、令下等人民無無學者、莫善於普通教育、溯一百期前而觀之、則教育之方法、與學校之制度、雖歐洲非如今日完全、一千七百年代之頃、彼斯多露智者、始出于瑞西國從特通下民之情態、風俗大開、緊要普通之教育、其影響敷被全歐、古代陋習忽一變、切寔可謂偉也、輓近我政府亦夙有見于此、曩頒布學制、以期全國悉設普通小學、令下等人民竟無學者、然創始之際論議嘖々、尙憾未至乎見成完全之結果、下等愚者適曰、本邦從來無學、學者士人以上之事、而非小夫細民之所當修也、中等識者適曰、箕作・中村・加藤・福澤等碩學大家、皆成立於一個專門變則學非待普通教育而後興、愚者之論固不足掛諸齒牙、而識者之說亦非通論也、請遂辯之、夫本邦普通教育之行也、去今歷四五年矣、若夫令四氏者生于今日、則必將待普通教育而後興、惜哉當時無其設、緣缺幼時完全之普通教育、其學或溺、見聞奔時好、其所著書多附歐人之驥尾、其所吐言多嘗其糟粕卓乎闢一大活眼不以立一家門也、然其導後進之功、寔有不可泯滅者焉、且夫試舉普通教育與專門變則等之得失一端、辨其難易、今爰有英敏兒童三人、授甲以四書五經、授乙以左國史漢、而授丙以下

等小學、皆非各費四五年則不能以卒之、及卒之也、集三人之兒童、而問各其所習者、則四書五經之深遠而難窺與、左國史漢之浩博而難解、不若下等小學之卑近而易解達日常萬用之愈也、僕故曰、令下等人民無無學者、莫善於普通教育、雖然止于普通教育而不入專門變則學、則亦何由得出碩學大家足下材學德望兼備、加之資產富饒、僕願足下爲本邦之彼斯多露智、益擴充普通教育、令下等人民無無學者、以立邦國富強之基、是所以不望諸他人而獨望足下也。(下略)

共研學會記

共研學會初號敷教堂、其經營實明治某年某月某日、方此之時、學制頒布、日尙淺、各村因襲之久、墨守固陋、人情不樂學、補頽寺、葺壞社、以教肆者、闔國皆是、而志太郎請所村人、原川治兵衛者、時爲副區長、慨然自覺小學之不可一日而亡於鄉、率先特唱新築、區內翕然莫不從之、於是興役、群衆相勵、趨爲之運土填田、材有羨、匠有餘、不日竣功、何其盛且速也、蓋戶長村松氏、幹事原川氏等輔翼之功亦居多焉、及聞其成也、遠近響應而圖之志益銳、育英正心兩校之新築亦莫未曾胚胎乎此者、豈不太偉乎、余往年被命學區監督、嘗巡臨此校、乃親試生徒之學業、不覺喟然嘆曰、嗚呼、立之先於他校、而教育之後於他校也、既而以爲、是無他、根于教師之屢變遷以釀浪費也耳、夫妨害教育染成惡習、莫甚於教師之屢變遷以惑生徒之視聽、每其一變遷輒必釀三四月之浪費、此教師得生徒之心與生徒得教師之心、要非經三四月則不能也、昔在希臘國有音樂師、其當教門人也、聞有其會就他人學者、則必課之二倍謝金、以充匡正其惡習之浪費、至哉此教、可移以爲小學教師之規箴也、

抑此校之開也、松山麻山爲之教師、諄々然善誘生徒、々々亦日見其進、未幾何去之他、其後岸本松陰、中江正儀青島陽崖等相繼爲教師、亦皆未幾而去、其視棄生徒猶棄敝屣、脫然不毫顧慮、終至令生徒惑其視聽、宜矣其教育之後於他校也、余接諸氏皆略知其爲人矣、蓋松山、青島氏之博聞強記、好古而不通今、中江氏狂暴酗酒而不知制御、岸本氏之柔順懦弱乏氣概、皆未足以爲真教師也、豈可不深愧夫音樂師乎、適應原川氏之請且酌其意乃作之記、以爲後之爲教師乎此者警。

潛心學舍新築開校祝詞

嗚呼懿哉、層階閎麗、嶽雪晴明、海霞陰翳佳眺、攢迎來輔學藝教師善良、幹事勉勵、一舉兩全、相助共濟、亦我縣令所盡 皇帝、米人嘗謂、米國童孩米國財寶、誠矣此辭、夫學校者財寶根基、男傑斯陶、女豪斯胎、此地濱海、漁屋櫛比、居民重利之興學志、帝德洽聞肇知學貴、起此層階于彼城腰斯養男傑、斯毓女豪、以雄海外以答 聖朝、雖然校宇必美結構、縱令閎麗金玉彫鏤、戶有不學、奚若矮陋、今日向衆敢陳蕪言、非祝結構閎麗、望來學者、晨昏斯新、竟使每戶無不學民、嗚呼懿哉、敢祝。

沼津小學校新築開校祝詞

漢圖曰、教育也者、使人遂其應享的至完全能力之發達之謂也、斯語卑近而膾炙人口、誰云能力不若先哲乎、誰云文理學不能優倍根乎、誰云天文學不能抽牛董乎、誰云法學不能超西塞羅乎、吾人所

嘗稟上帝之能力不得測度之也、耳目鼻口吸入智識之門也、能力爲察外物之性、具克耐艱難克忍飢寒苟使人心起想像感動導考究、尋思而往事爲經驗之基、浮世爲迷誤之戒、皆洞通其進路、悉湊合其支流、莫非注于至大至廣教育之一大海、故凡宇宙間莫貴重且困難於教育、請取比喻於此校之沿革與構造以言之、初藩政之頃務起學校于各所、而當時以沼津爲巨擘然其爲學費也出於藩主之特典、而非人民之協力以經營之、其爲生徒也、大抵止于士族之子弟、而非四民同學、其爲校堂也、纔新設而非規模壯麗、其後廢藩置縣、未幾何學制頒布、始設一校稱集成舍、令四民悉入學、以受普通教育、雖漸任于人民之協力、教育日尙淺、其不絕如縷、尋又新起一校、稱明強舍、既而倏忽燼乎火災之一炬、爲假用寺院、以緩一喘中間、又值烈風逢猛雨、而幸免顛覆之禍、以荏苒及于今日矣、然而邑有奮勵之吏區有勇爲之民、不毫屈撓、專盡力於保護、乃合兩校稱沼津學校、維時明治十一年六月望日、全鳩其功恭舉開校之典、大廈層樓、規模宏壯、我縣令亦臨焉、嗚呼全管三州、校堂清麗者有矣、而未見如斯構造宏壯者也、構造宏壯者有矣、而未見如斯教員幹事勤勉者也、教員幹事勤勉者有矣、而未見如斯邑吏區民奮發者也、邑吏區民奮發者有矣、未見如斯生徒之多以千數者也、滿堂不女、此校堂之沿革、可以比吾人勤勞、此構造之宏壯可以比教育之結果、今夫一校堂亦費六七年之星霜、其間或罹火災、或值風雨、或窮居寺院、邑吏區民苦心焦慮始克成之矣、今人々欲遂所稟上帝至完全能力之發達、爲倍根、爲牛董、爲西塞羅、則不可不皆勤勞、不可不費許多歲月、不可不要非常忍耐、適丁本日之開校、深感本校之沿革與構造絕關係于教育、乃言之以代祝詞云爾。

寄永峰彌吉書

見信乎勝海舟、移駿後、爲書記官、後歷任內務書記官大、阪府書記官、宮崎、佐賀兩縣知事、不幸罹病歿海官會

某啓、富貴者人之所好而不能淫者寡矣、貧賤者人之所惡而不能移者寡矣、威武者人之所畏而不能屈者寡矣、不能屈乎威武有矣、未有不能移乎貧賤者有矣、不能移乎貧賤者有矣、未有不能淫乎富貴也、某常愛兩舟海舟之不淫乎富貴、恭謙以下人、雖布衣孤寒之士、請謁輒親勞迎、盡觀不已、是以天下之士、皆樂訪焉、而其聲名赫々遂不可掩矣、若夫苟淫乎富貴尊大以自居、拒絕天下之士而不顧、則亦何以爲大丈夫乎、嗟夫、今世之人舉小官賜微爵、意氣揚々、自以爲足、殊厭勞迎之煩、或託病以拒絕之、富未極王公貴、未登將相、而其志亦既淫矣、永峰兄來官此地、歲月猶未深、而居樞要、綜庶務、其責任雖非不重、而未可富貴自淫焉耳、兄之親炙兩舟也、蓋有年矣、而竊怪自仕以來、其所爲非前日之兄、而殆爲今世之人、某嘗列辱交之班、默々不告非信也、故敢不憚叱撻直言、看訖便投火、不欲也人之見也、某頓首不宣。

宮崎先生墓表

先生諱瑱、字愚、號水石、世爲東京人、父祖累業仕幕府、充醫官、先生少遊藤森弘庵之門、不屑醫天資慷慨、風姿間雅、好作爲詩文、皆工、嘗誡弟子曰、文主氣勿陷對偶聲律、詩主志勿流花鳥風月是以前所作之詩文皆勁健適逸、無非發乎憂國之念、而矯時弊適用也、然而人之知先生者、皆知美其詩文而不知其材之可用也、或知其材之可用不知孝之至也、以明治八年二月某日卒於家、享年四十

有四。

安政元年、我邦與米國約通商、幕府遣外國奉行某、往米國、先生被選爲書記官、留歲餘而還、其後又被命如支那、又留歲餘、是時例醫家雖有功勞而不得遷徙他職也、如先生蓋特典之、戊辰之難、天子下詔、使諸侯悉就國、我德川公亦移駿、先生奉二親而從焉、左右輔弼臣欲興學校養人材、先生被選補三等教授、不肯、向山黃村素識之、謂曰、親老乃擇俸耶、先生矍然起、自此廢醫、專事文學、雖時有中村敬字暨望月毅軒碩學、而問詩文則必稱先生、明治四年秋、津輕侯聘使請招先生、爲學館教師、先生以二親年老固辭、而不可、乃載二親於輿以行、忠一時從焉、駿迄奧凡二百有餘里之間、定省不怠、每有山水水則必捲輿簾以指示之、奧之俗固陋、慄悍喜爭鬪、各樹私黨以相排擠、故諸生往々獨學寡聞、泥經義拘章句、而不通大義、及先生至、循々然善鼓舞振作之、至於錢穀出納之事、無不于預、務省冗費積其贏以供豫備、居一年、學風一變、諸生頗知文辭通大義、來學者日多、學舍狹隘取官署以用之、可謂極一時之盛矣、津輕侯大悅之、賞賚甚厚、明年春適父憂哀毀骨、立及葬、流涕謂母曰、噫孤之罪也、欲載歸國、而山河遼遠、火葬非人子之所宜爲也、他年孤應再來、改葬焉、服除以母之歸心太切、固辭西歸、々之日、諸生送之藤崎、置酒慰勸盡禮而別、觀者無不嗟嘆、以爲榮、途語忠一曰、我捨父骸于二百里外而去、人子之所不忍也、日夜哀之不堪、我命亦不長也、既歸朝廷徵補文部省十等出仕、掌國史編修、亦非其夙志也、朋友故舊多列顯官、皆已知其可用而欲薦之未及、而卒、嗚呼哀哉、有弟言成、君曾學英國、學涉漢洋、子駿兒君、專治洋學俱爲有用之器、既卒之某日、葬于四谷全長寺之塋、其弟子池田忠一、謹表於其墓曰、嗟々先生而早世耶、自古善人

君子早世而竟不果其志、何獨哀先生、祇告母之一語猶在耳、每追憶其至孝、未嘗不悽然灑涕、而惟憾天不加之年、以使其志不遂而已矣、嗟々其命之薄而官之卑、何損其學之厚與行之貴。

送永峰彌吉赴任于宮崎縣

男兒仕官至知事亦榮矣、然宣上意通下情、任重責大、要苟非知機務之俊傑則能全之者鮮矣、況以贊々幕府遺臣、治雄藩之疆土乎、頃日永峰君超遷宮崎縣知事、誰聞而不羨焉、乃抱其材與學奮然赴其地、不日舉治績可知也耳、鼻關口隆吉君任山口縣令、頗有殊功、聲威布 朝廷、其後山內堤雲君任鹿兒島縣知事、今茲君亦任是重寄、竊感 朝廷採賢之無遺、且喜漸見舊幕之餘光、夫山口鹿兒島兩縣本雄藩之所割據、而宮崎亦接邇鹿兒島、雖謂 皇祖肇國之地、 皇澤不霑、民心慣亂有年于茲、所以稱難治也、而特使君承之、抑有故也、必期鞠躬率僚勵農獎學以能全其任與責、可令夫疆土之民帖然就撫知幕府今尚不乏俊傑之士焉耳、嗟夫關口君已逝矣、自今不望之君而誰也哉。

積慶堂記

凡貴族紳士占居于帝都者、大概有別墅焉、以爲遊息之所、唯至於赤松先生則不然、明治三十二年五月超然違帝都而間居于遠之見附、每有事輒假汽車以資便、不復設別墅、蓋省冗費避風塵也、明治三十年二月經始此堂、翌年十一月竣功、

其構造堅牢周密、其規模朴素清麗、是皆先生之所親計畫也、觀者莫不感服其伎倆、堂之西偶有扁額、曰積善餘慶、東久世伯爵之所會揮毫也、易云、積善之家必有余慶、其出處蓋是也、因自命此堂曰積慶、噫善哉、先生系譜最古初堀川氏、移住于播之赤松、因改氏赤松、後雖冒丸尾・中村氏而又復赤松、其積善之所由來者漸矣、及至於先生、維新前後勤勞國事、就中立身海軍、夙誘後進、或航洋、或督事、歷任幾官、見我海軍致今日之盛、誰不屈指於先生、其他參畫國政、盡瘁公益、齡垂古稀、毫無倦怠、其積善之著率此類也、以故曩見授男爵、尋任海軍中將、進勳一等、陞正三位、而其子孫愈振々、皆能揚家聲、其餘慶其莫大焉、且夫、屋外之山丘及庭園、悉栽赤松樹以象其姓、四時轟々、常不易翠、其材可以充棟梁、其壽可以保萬年、宜矣、古人稱之百木之長也、雖然其翠素始於二葉、二葉、漸積爲高遂見蒼龍昇天之勢、猶人之積善乎、先生以其酷類已愛觀不措、且暮逍遙其間以養其老、余偶訪先生乃語曰、雖先生固守謙德不敢誇人、而恐迨今若不記之、則後世難審其由來、先生以爲然、乃令余略作之記。

羽衣天女祠碑再建記

後龜山天皇御宇、結崎世阿彌作羽衣謠曲、自此羽衣天女之事爲人口所膾炙、其後駿府尹牧野成傑夙慨其蹤歸乎湮滅、令中島溫略記其事、乃建一碑於松下、真可謂千載雅舉矣、而唯憾石質不堅緻、碑面爲虧損不復可讀焉、於是乎、御穗神社司長澤雄楯、氏子總代宮城島文助、川口忠五郎・柴田勝五郎石野又七及信徒總代土谷松太郎・松田米次郎・太田彌兵衛等胥謀別保原碑、卜明治四十四年九月吉辰再建此碑於其傍、以垂諸不朽、若夫其碑面、則循會所募捐之舊、而不毫加改竄矣、要在乎重此雅

舉而已、應更書此篆額及碑文兼撰且書、此記文者誰曰、靜岡縣立三保學院長池田忠一也、畫此松者誰曰、土谷風外也。

柏梁翁祠堂記

柏梁翁之於羽衣天女也、古說有三焉、曰大己貴命乘天羽車而求伉儷、曰只是不過本邦之一神話、曰既有其蹤、則不可必謂其事也、夫神代之事邈雖不得其詳焉、而徵之林氏神社考及牧野府尹羽衣天女祠碑文有此事已明矣、又讀結崎世阿彌謠曲每至於其天女與柏梁翁之問答、輒誰有不掩卷歎、其實況如見、妙味無極者乎、顧三保松原有富士山、而占絕景、羽衣天女遇而得雅、一爲雪舟畫聖所描馳名于海外、再爲精里先哲所記、擅勝于國內、蓋柏梁翁則雖漁夫、而素非凡骨、結茅而居焉、釣魚而樂焉、高蹈爽邁、超然于物外者歟、天女配之抑亦非偶然也、加旃見翁宅舊井歷々今尙存焉、則將復奚疑、矧久保田日龜上人夢醒集中載邑人久保田勘三郎世奉翁之祭祠、蓋亦翁之孫裔也、頃日其孫勘作君與有志者胥謀新建此堂、且藏神鏡以祀翁之靈、何其志之深且厚也、屢來請略記其事、義不可辭焉乃據其舊記及口碑、敘其梗概、以闡明其事實、聊以塞之責、且汎告諸江湖之騷客耳。

酒茶孰優辨

或問曰、酒之功優於茶耶、曰否、茶之功優於酒耶、曰否、然則其功相敵耶、曰不然、大凡物有長乎彼者則必有短乎、此有短乎此者則必有長乎、彼未易以一時之長短而遽爲得失也、蓋其所得者大則其所失亦大矣、其所失者小則其所得亦小矣、夫清神驅眠酒不如茶也、脫去聲利談玄鬪碁酒不如茶也、手攪烟霞耳聽泉石優々然不被世累、酒不如茶也、然而掃愁遣悶茶不如酒也、會友劇談說盡衷情茶不如酒也、且夫雲山之曉花月之夕冠婚葬祭之禮非酒則不能以盡其情、軍旅之勢非酒則不能以鼓舞其士氣、是以茶可千日不飲而酒不可一日無矣、雖然概而辨之、則縱雖有酒之功優於茶百等、而尙有不可掩之大害、曰覆人之家喪人之身是也、已既悟其大害安可不除之乎、除之道有二焉、曰節之也、同廢之也、節之如易而却難、廢之如難而却易、庶幾勿忘除之道而招噬臍之悔。

十一在一不居士之諛號說

楠公主義無若教育勅語、報德主義無若戊申詔書、報德之開祖二宮尊德先生也、余之所尊則楠公也、余之所信則二宮先生也、報德主義者戊申詔書之外報德訓則最簡而盡矣、余諛號則自報德訓出焉、何也、曰報德訓一句九字十二句百八字、中在十一字、不一字、以在十一字不一字、總括報德訓也。

宏進記。父の辭世詩歌は訃音を其辱知に報ずるの際遺命に依り添載したるが清水の琴峰散人鈴木平六氏は

老來强健氣凌仙、底事濫焉向九泉、高壽縱雖無不足、悲哀何耐落暉天

と追悼され、中遠の太木隨處氏は

世の中は生死一如と悟られし大人の心や知る人ぞ知る

と靈に告げられ、大阪の成田松坡氏平軍は

忽接訃音何耐悲、幽明一隔想英姿、無常正是春回夕、泣讀當年唱和詩

と追憶されたる後、八七日の旦、特に靈位の前に額づきて左の如くに次韻されたり。

讀罷看花落、吟成聽鳥聲、先憂還後樂、終世道無迷

又葬儀の日には、伊豆三島の久野木靖氏は

冬晴れや茅ヶ崎の雪消へにけり

雪晴れて落ちて行衛の水となり

と詠まれ、中陰明けには、中遠の山下郡次郎氏

去る者はうとしとかいふ早五十日君はいづこの里につきけむ

と手向けられたり。

尙葬送の節には、遠州大雲寺、相州妙見寺の住職、四七日忌の逮夜には、上野寛永寺津梁院の長老長澤徳玄師夫々態々特志を以て厚く回向されたり。以上は獻花供香親しく弔はれたる朝野各位の芳情と共に、感激に堪へざる所なり。茲に特に追録して各位の厚志を感謝すと云爾。

昭和十一年一月二十九日初刷
昭和十一年三月八日三刷
昭和十一年四月五日再刷
昭和十一年四月五日發行

池田養軒著
朝露の覺
(池田忠一遺著)

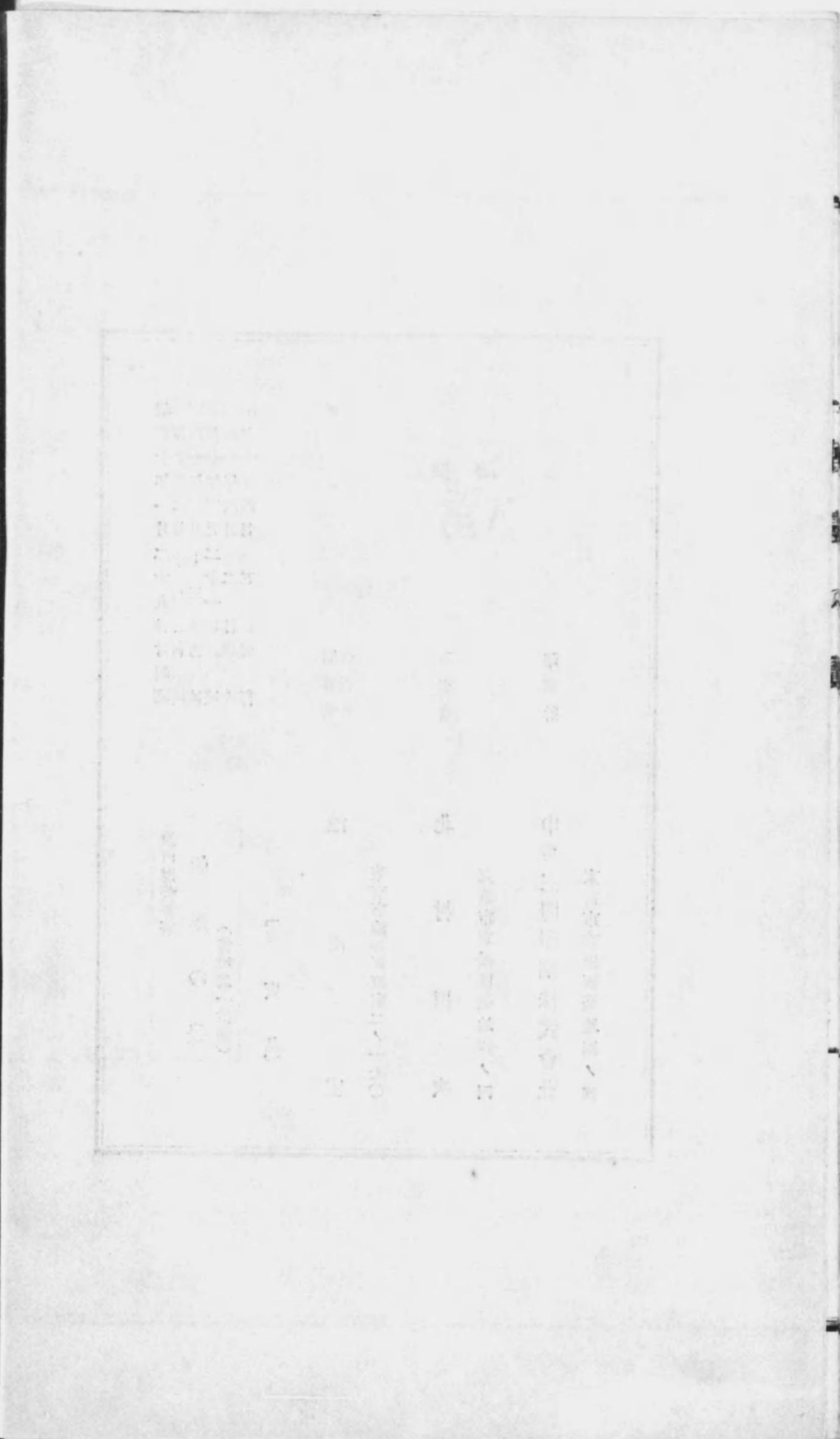
(非賣品)

編集者 池田宏
東京市澁谷區原宿二ノ一七〇

印刷者 北村恒次
東京市京橋區築地四ノ四



印刷所 中屋三間印刷株式會社
東京市京橋區築地四ノ四



終

